

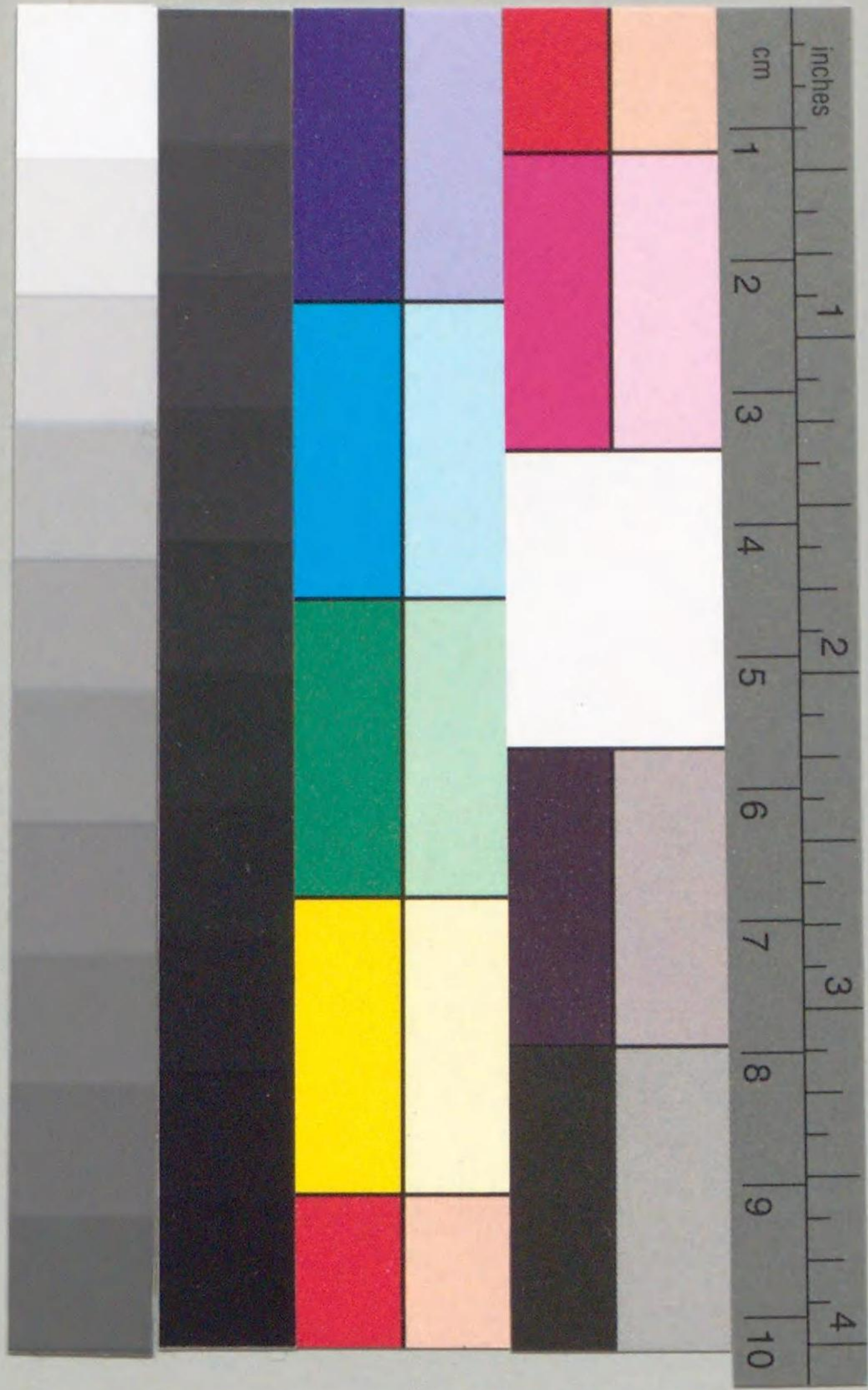
338

338-2



1200501394779

M





32.12.18



2222

穴  
浅く

新作のえさちを

波小



印



は し が き

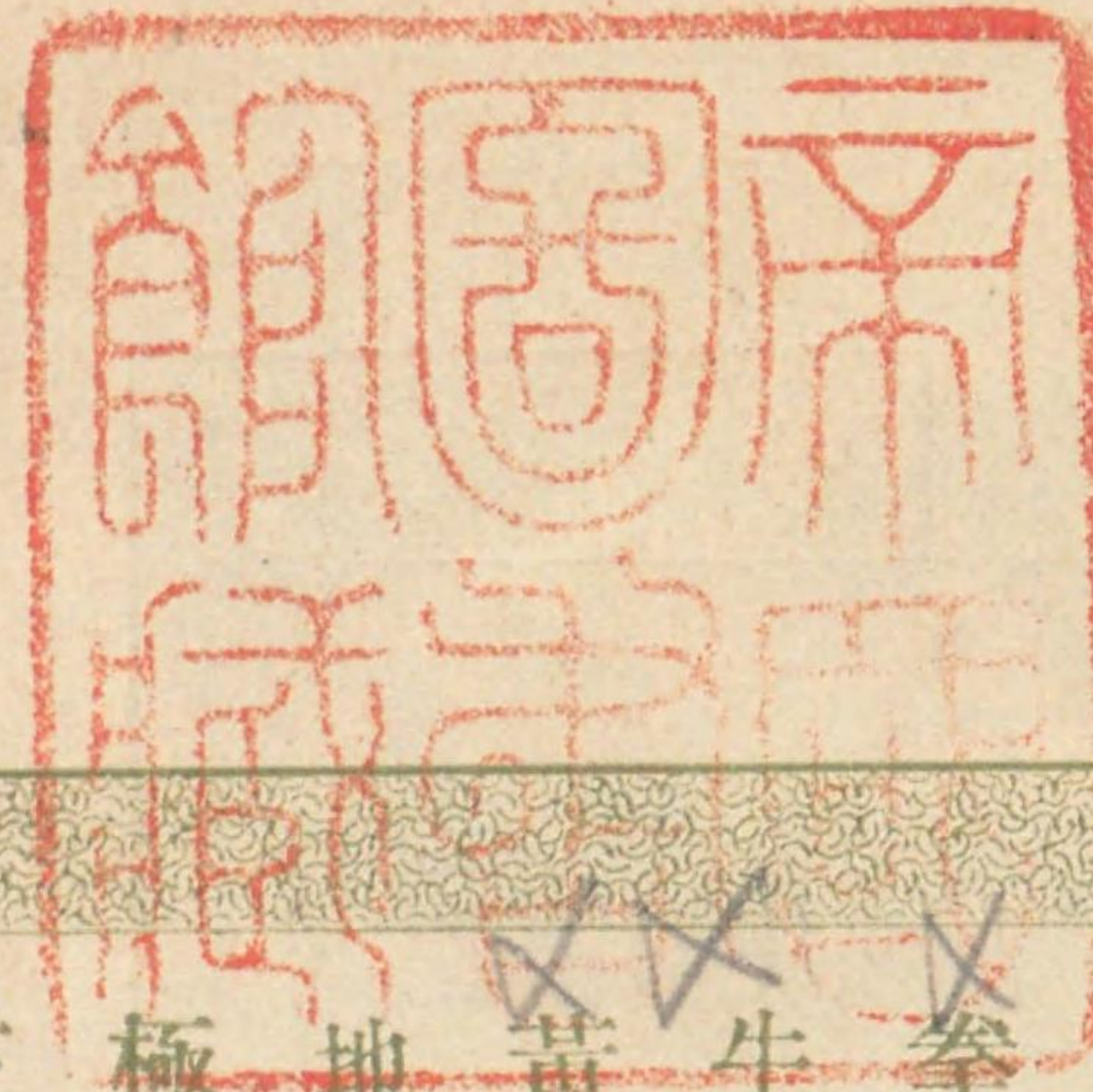
こ	だ	か	そ	嘶	乗	つ	ん	何
れ	け	り	の	即	り	い	し	時
は	ほ	集	ち	ち	か	そ	こ	の
度	、	め	嘶	を	け	の	云	頃
々	お	た	を	ぢ	て	氣	ふ	か
舞	伽	に	ね	さ	、	に	者	ら
臺	芝	過	だ	ん	今	も	が	ら
に	居	ぎ	ら	さ	度	成	あ	か
も	の	な	れ	さ	の	る	る	自
か	脚	い	た	呼	は	、	。	分
け	本	。	時	び	。	果	云	の
た	に	但	の	か	は	は	は	事
か	な	し	を	け	自	れ	て	を
ら	つ	最	、	ら	分	見	る	ぢ
、	て	後	又	れ	か	る	さ	さ
中	居	の	十	て	ら	ら		
に	る	篇	ば	、	伽	名		











三 郎 鷺	極 樂 園	地 上 の 天 使	黄 金 の 鳥	牛 の 鈴	拳 骨 太 郎	も く じ
	太田三郎畫		杉浦非水畫		太田三郎畫	
一 五 九	一 一 〇	九 五	四 六	三 二	一	

明治  
44. 1. 6  
内交







✓

法螺旅行

杉浦非水畫

一七五

由良太郎

太田三郎畫

二一九

七羽鳥

太田三郎畫

二五二

伽芝居  
牛若丸

二七九



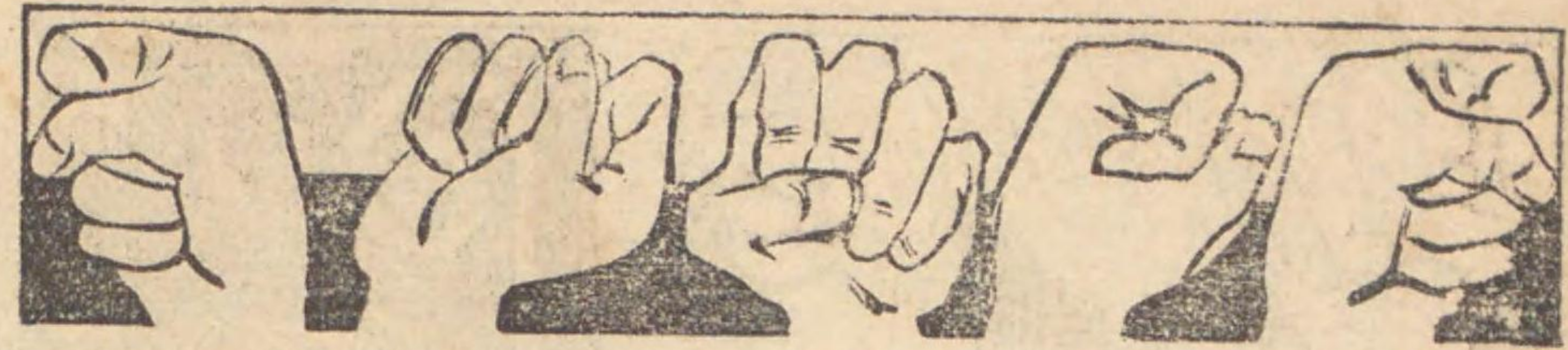


第一 拳骨太郎

拳骨を振りまはす云ふ、  
 亂暴者ではあつたが、  
 その代り氣質は正直で、  
 強い者には何所までも強いが、  
 弱い者には至つて優しく、  
 まことに人の善い男であつた。







太郎はある家に奉公して居たが、力が強くて、骨  
まず、よく働きはするけれど、何しろ飯は十人前は食  
ひ、酒は一斗も飲み、そして時々腹を立てるこ、例の拳  
骨を振りまはす云ふので、とうとう主人も愛想を盡か  
して、暇をやつて出してしまつた。  
けれど、太郎は別に苦にせず、貰ひためた給金で、早  
速料理屋へ上り込み、鱈腹飲んだり食つたりした揚句、ブ  
ラリと其所を出て、上機嫌で鼻唄などをうたひ乍ら、段々  
ご道をやつて来るこ、やがて小蔭から汚らしい乞丐が一  
人出て、

「どうぞやお旦那様！何ぞいたゞかして下ださいま  
ご云ふ。」

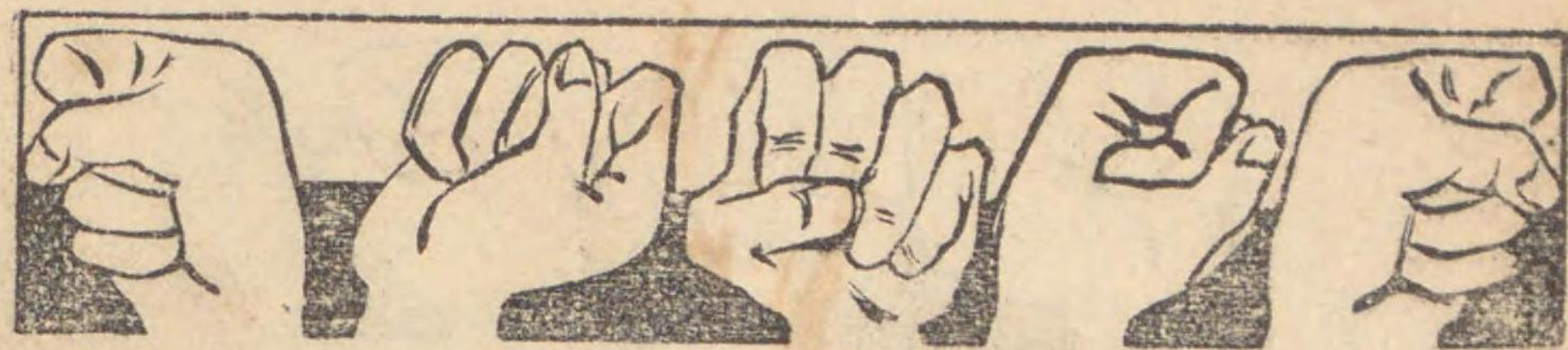
太郎は振りむいて、

「何だ乞丐か。可哀さうに……何か欲しいのか？」

「へい……一昨日から何も食べませんで、腹が減つて  
ならないので御座います……何卒一文いたゞかして……」

「ナニ一昨日から物を食はん？可哀さうに……それぢ  
やアさぞ腹が減つてるだらう。おれはたつた今食つて、腹  
が一杯に成つてる所だ。よし、そんならやるぞ。なアに





一文なんてそんなケチな事を云ふな！おれは有ツ丈みんなやるぞ。」

こ、懐中から財布をつかみ出すと、その儘乞丐にやつてしまつた。

するご乞丐は、押しいたゞいて喜んで居たが、それを又見むきもせず、通り過ぎやうとする太郎を止めて、

「モシ〜！」

「何だ？まだ何か欲しいのか？」

「い、ね、左様では御座いません。私はこの年まで、乞丐を致して居りますが、貴君の様な情深い、氣の大きな

方は見た事は御座いません。就いては只今の御禮に、これを差し上げたうございます。」

こ、云ひながら、今まで自分の頸にかけて居た、汚らしい頭陀袋を出して、太郎にくれやうとするから、

「何だこれを禮によこす。これは面白い、おれも此年まで随分施與をした事もあるが、また乞丐に返禮を貰つた事は無いぞ。それにこんな乞丐袋、折角だが願下げにしたいな。」

「所が旦那様！この袋は不思議な袋で、貴君が持つて居らつしやれば、きつこお役に立つ事が御座います。」





「ハテネ、ごんな役に立つご云ふんだ。」

「何でも途中で邪魔な奴が出ましたら、これへ入れご云ひながら、袋の口をお向けなさい！さうするご出て来た奴は、みんなこの中へ封じ込められて、二度ごは出て来られないんで御座います。何ご不思議な袋で御座いませう。」

ご聞くご、太郎も面白がつて、

「ウン、そりやア重寶な袋だ。では貰つて行くごしやう。」  
ご、はじめて袋を受取るご、そのまゝ今までの乞丐の姿は、何所へ行つたか見えなくなつてしまつた。そして高

い高い所で、

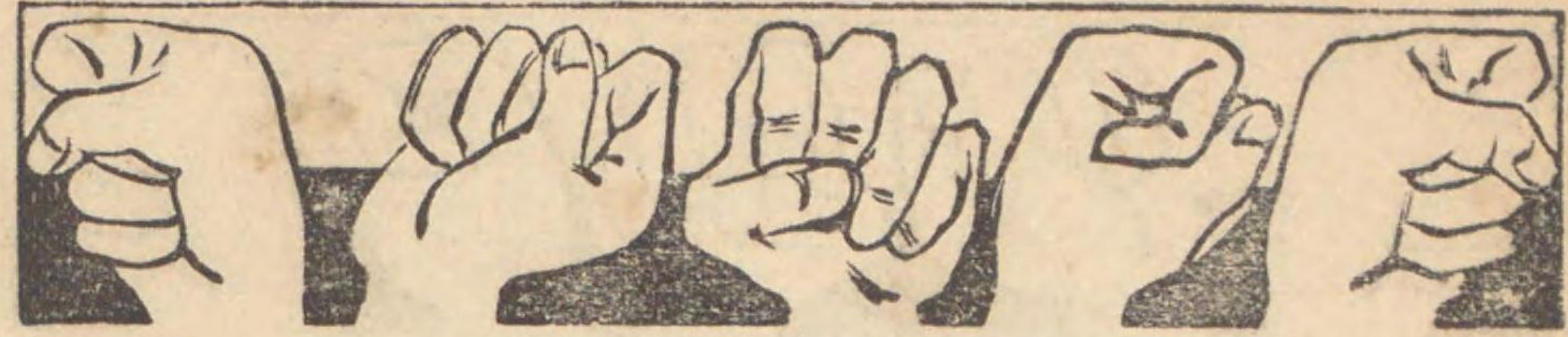
「拳骨太郎萬歳！」

ご云ふ聲が聞える。

不思議な事だごは思つたが、何しろその不思議な袋はちやんご自分の手にあるので、拳骨太郎はそれを持つて尙先へ出かけて行つたが、その中に日が暮れて来たから何所かに宿を取らなければ成らない。

所が自分の持つて居た金は、みんな先刻の乞丐にやつてしまつて、一文も残つて居ないから、宿屋へ行つて泊まる事が出来ない。





ハテ困つたものだと、酔も、う醒めてしまつて、ボンヤリ町端まで來るご、其所に古ぼけた寺があつた。寺なら只でも泊めてくれやうご、いきなりその立關へ行つて、

「頼もう〜！」

ご、聲をかけたが、誰も返事をする者は無く、奥はシンと静まりかへつて居る。

「ハ、ア、さては空屋の寺だな。よし、そんなら遠慮する事は無い。」

ご、ツカ〜通つて行つて見たが、成る程誰も住んでは

居ず、只本堂の阿彌陀佛が、蜘蛛の巣に包まれて、煤けかへつて居る許りだ。

「イヤ、なまじつか主人の居るより、此方が却つて氣樂でい。まア今夜は此所に泊まつて、一ト晩阿彌陀様の

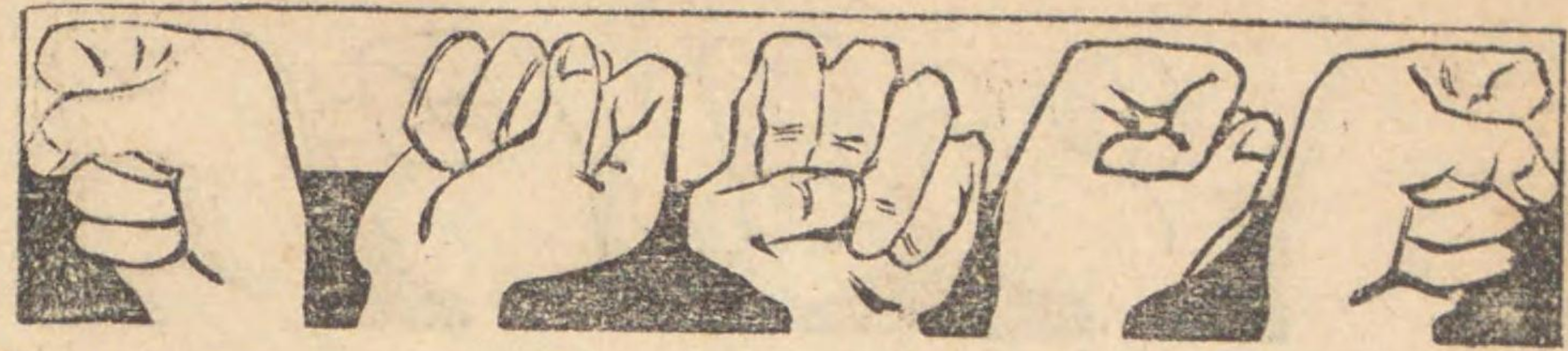
お守をしやうか。」

ご、獨語を云ひながら、その側に横になるご、何しろ草臥れて居るものだから、直ぐごグウ〜高軒で、正體も無く成つてしまつた。

するご、丁度眞夜半頃だ。いきなり太郎の襟頸をつかんで、







「起きろ！く！」

ご云ふ者がある。

太郎は眠むい目をこすりながら、

「誰だく、五月蠅い奴だナ。おれが折角寝てる所へ、

何だつて起こしに来たんだ？」

ご、叱りつけるご、

「黙れこの野郎！全體此所を何所だと思ふ？よく目を開いて見ろ！」

ご云ふから、太郎は四邊を見まはすと、こは如何に？何時の間に来たものか、自分の身體は畫で見ると通りの、地

獄の門の前に来て居る。

「ヤ、此所は地獄だナ？」

ご云ふご、

「それがやつご解つたか。馬鹿な奴が。」

ご笑ふのは、その門番の赤鬼ご青鬼で、太い鐵棒をつきながら、自分の側に立つて居る。

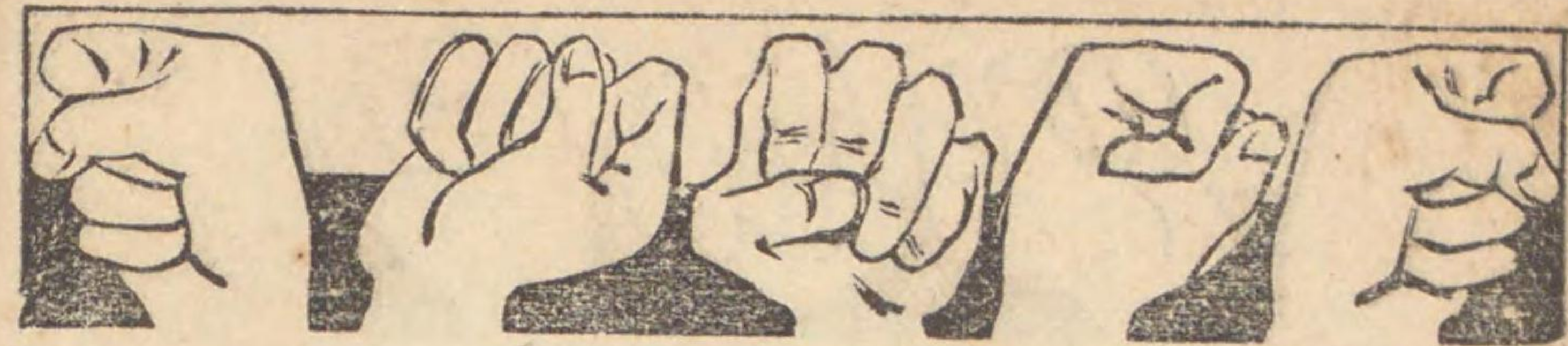
けれども太郎は驚かない。

「さてよ、乃公は先刻古寺へ入つて、阿彌陀様の側で寝た筈だが、それが何うしてこんな所へ来たらう？」

「それは此方等が迎いに行つて、寝て居る間に連れて來







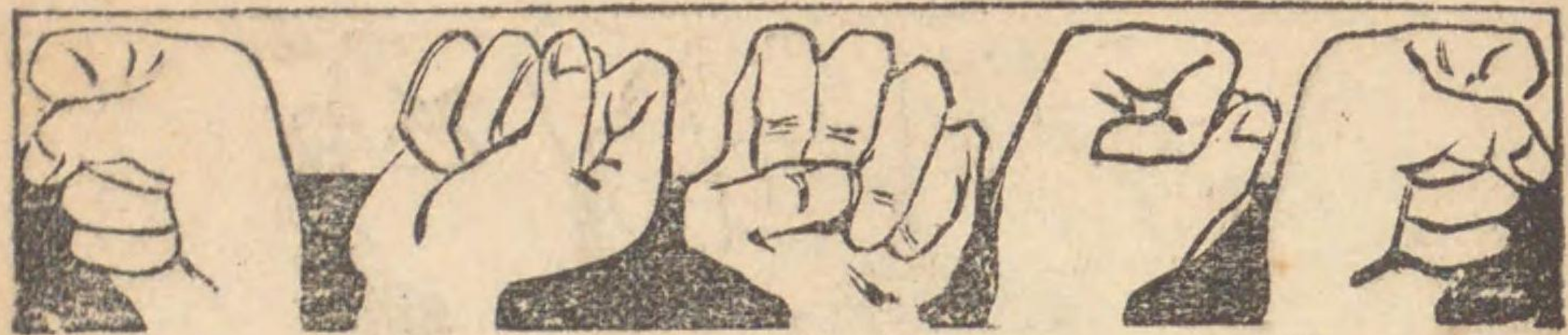
たからよ。」

「ナニ、寝てる間に連れて来た？」

「さうごも。もう斯うなつちやア仕方が無い。貴様もはやく往生して、今日から地獄の亡者になれ！」

「こ、鬼共が威かすぞ、太郎は大きに腹を立て、

「何だこ？はやく往生して亡者になれこは、全體誰に云ふ事だ？憚ながら拳骨太郎は、貴様等の様な鬼が恐くて地獄で降参する様な男ぢやないぞ。それも乃公の命が盡きて、死んだら來てもやらん事は無いが、まだ死にもせん中から、地獄へ引ばり込まうなぞこは、失敬極まる鬼



達め！さア乃公を元の通り、寝て居た所へ連れて歸れ！

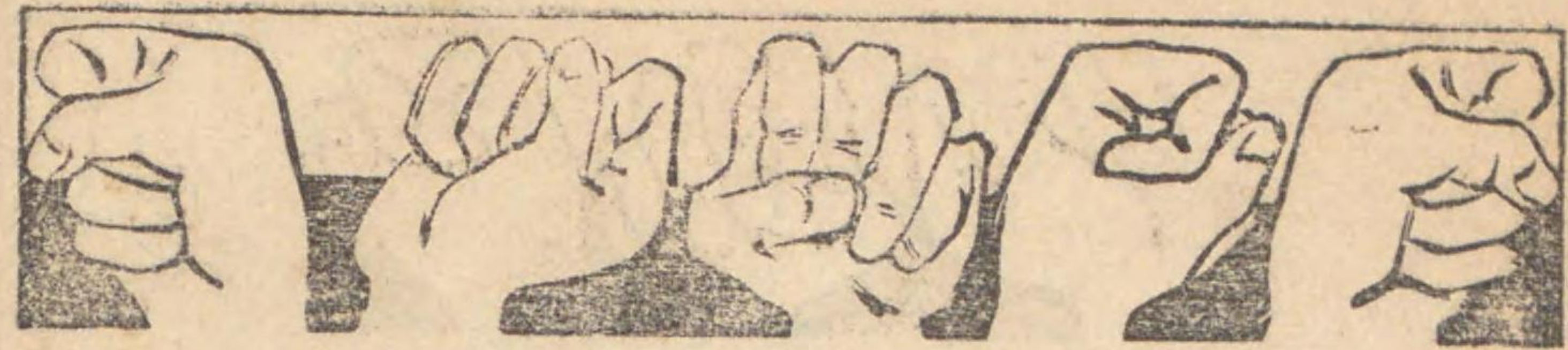
それがいやなら貴様達に、拳骨太郎の拳骨を、腹の裂けるまでお見舞申すぞ。」

「こ、云ふこ、鬼達もムツこして、

「小癩な事を云ふ死損ひ奴！それほご命が惜しいなら、斯うして息の根を止めてくれるぞ。」

「こ、右左から鐵棒で、ビュー〜こ打てかゝるのを、太郎は例の拳骨で、コツン〜こ受け拂つたが、その力で鐵棒は、ピシリ〜こ一本共、見事に折れて飛んでしまつた。鬼共は肝を潰し、





「ヒヤアこれは素敵な奴だ。うつかりするご撲り殺され  
て、此方が娑婆へ晒らされるワ。」

ご、角をかゝへて二匹共、門の中へ逃げ込んでしまった。

その後から拳骨太郎は、つゞいて追ひ込まうとしたが

「まてよ。此所から中は地獄の領分。うつかり足を踏み

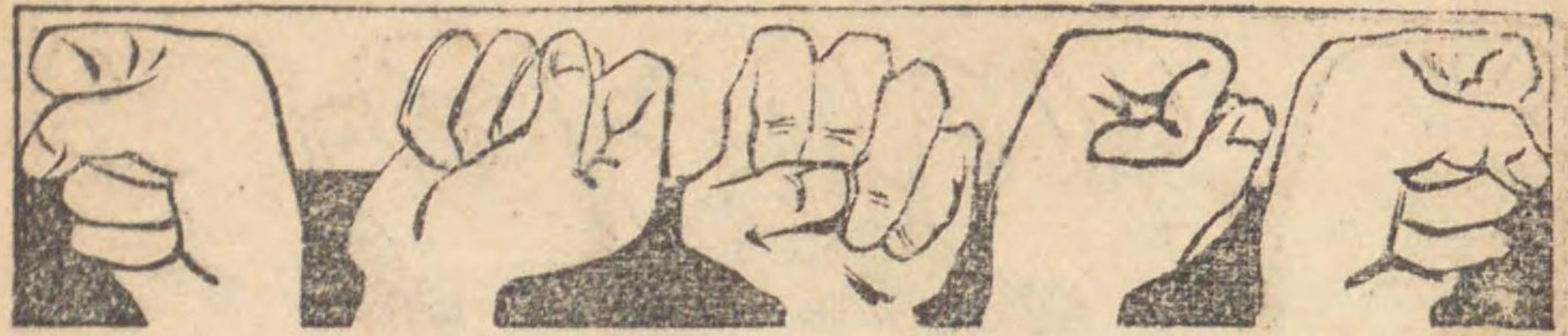
込むご、それこそ亡者扱ひにされて、二度ご娑婆へ出ら

れんかも知れん。乃公は死ぬのは厭だから、こんな所は

眞平だ。」

ご、引きかへして歸らうごするご、今度は道が解らない。

するごやがて門の中から、眞白な衣服を着た、眞黒な



骸骨が、ヒヨロリ〜ご出て来たが、太郎を見るご氣味悪

さうにして、道をよけて通らうごするから、

「ヤイ待て！」

ご此方から呼び止め、

「貴様は何だ？」

ご聞くご、骸骨は小腰をかゞめながら、

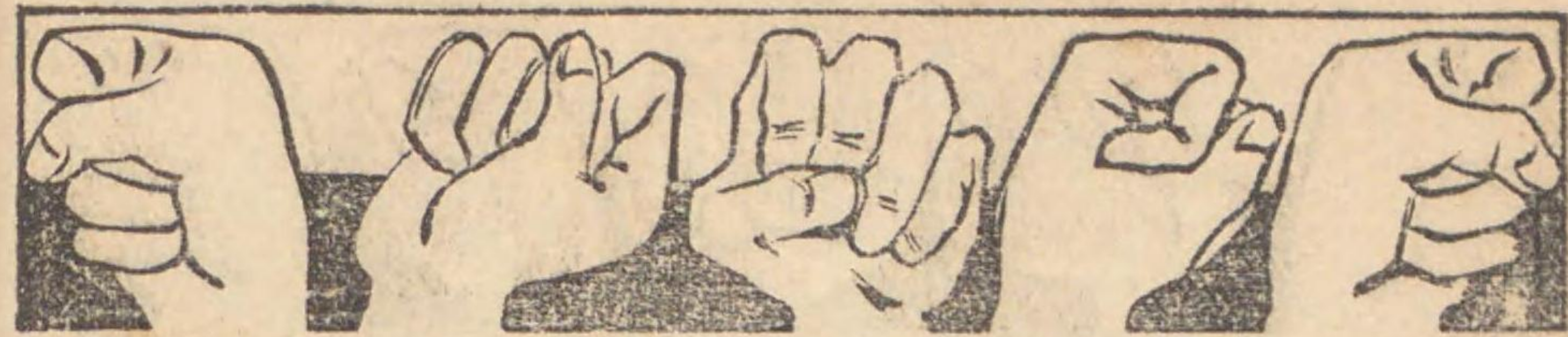
「へい〜私は死神で御座います。」

「死神か、不景氣な奴だ。さうして是から何所へ行く？」

「是から娑婆へ参る所で御座います。」

「ナニ、娑婆へ行く？それは頼母しい。實は乃公も娑婆





へ歸らうと思ふんだ。何ご一所に行かうぢやないか。」  
「それは丁度よろしう御座います。お供を致して参りま  
しやう。」

「、これから太郎は死神ご一所に、娑婆へ歸る事になつ  
たが、その途々も死神は、不思議さうに太郎を見て、

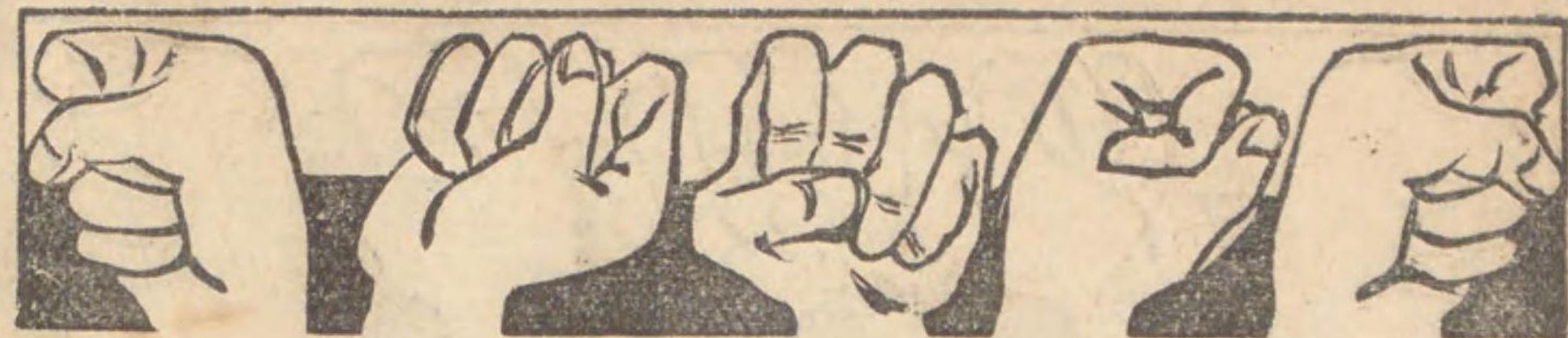
「全體この地獄へは、私が誘はなければ、誰もこられな  
い筈ですのに、何うして貴君は入らつしやいました？」  
と云ふ。

太郎は笑ひながら、

「イヤ、それは斯うなんだ。乃公が草臥れてグツスリ寝  
込んでるのを、輕忽い鬼奴等が、死んだと思つて迎ひに  
來たからよ。」

「アハ、、、、そりやア飛んだ御迷惑で御座いましたネ  
然し私がお誘ひ申せば、直ぐにお出が出來ましやうネ。」  
と云ひながら、死神は黒い手を出して、太郎の手を握つ  
て、連れて行かうとするから、太郎は急いで振りはらひ、  
「エイ、馬鹿な眞似するな！乃公はまだ死度かア無いぞ。」  
「いゝえ、自分で死に度く無いものでも、私が誘へば直  
ぐ死ぬんです。」  
と、又しても手を伸ばす。





太郎はもう我慢が出来ず、  
「おのれ憎い死神奴！それほご人が死なし度くば、貴様  
からまづ殺してやらう。」

例の拳骨で死神の頭を、微塵になれと撲りつけたが、  
こは如何にその頭は、只の骸骨とは違ふと見えて、まる  
で幕でも打つ様に、一向手應が無い許りか、死神は一層  
嵩にかゝつて、はては太郎の頸にしがみ付く。

流石の拳骨太郎も、その拳骨が利目が無くては、もう  
役にも立たない、はてはこの死神の爲めに、あはれ誘は  
れて行かうとしたが、その時不圖思ひ出したのは、昨日



乞丐に貰つた袋だ。

「何でも途中で邪魔物が出たら、これへ入れろと云ふ事  
だつたから、今こそ一つ試してやらう。」

こ、手ばやく袋の口をあけて、

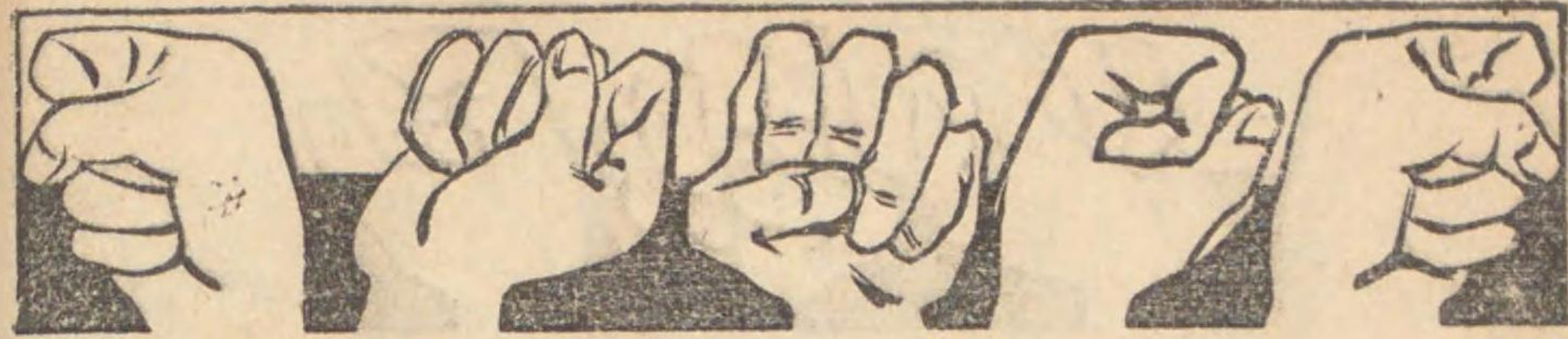
「死神、入れ！」

こ聲をかけるこ、今まで自分を捉まへて居た死神は、忽  
ち袋の中へ投げ込れて、

「助けてくれエ〜！」

こ、ジタバタやつて騒いで居る許り、手も足も出されな  
い。





太郎は見て大きに喜び、

「イヨ、これは成る程不思議だ。死神をさうく封じ込んでやつた。然しこの袋が無かつたら、おれはほんごに危い所だつたぞ。思へば乞巧は命の親だ。」

ご、今更の様に感心して居る。

袋の中の死神は、大聲あげて泣きながら、

「御免なさい！〜！何卒此所を出して下さい！」  
ご云ふ。

「なアに、何らいつたつて、貴様の様な悪戯者は、二度ご此所を出して成るもんか！」

ご、云ひながら袋の上から、又も拳骨でギュー〜押しつけるご、中の死神は苦しがつて、

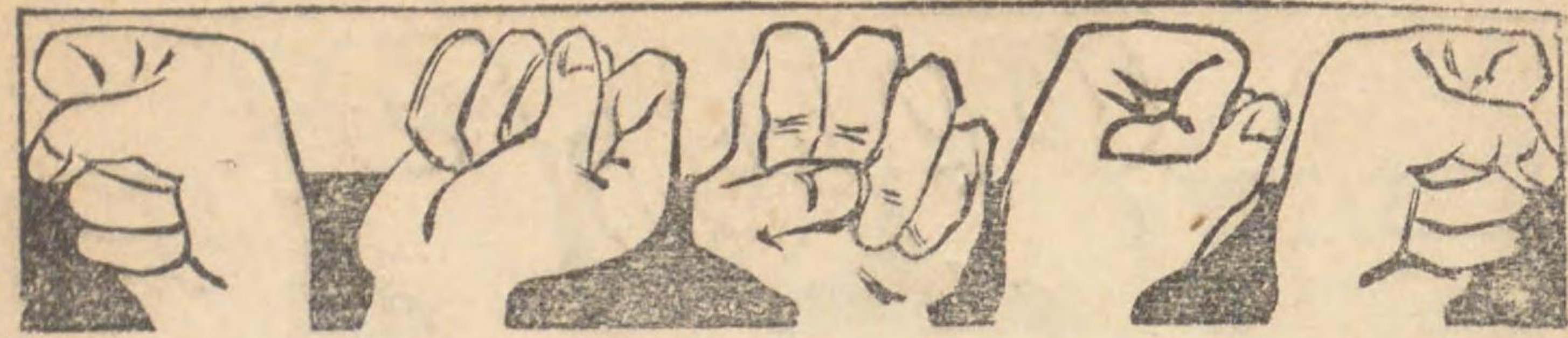
「ウーン〜！」

ご呻つたが、元より自分が死神の事だから、死ぬウ〜ごは叫ばない、代りに「生きかへる〜」ご、さも悲しさうな聲を出した。

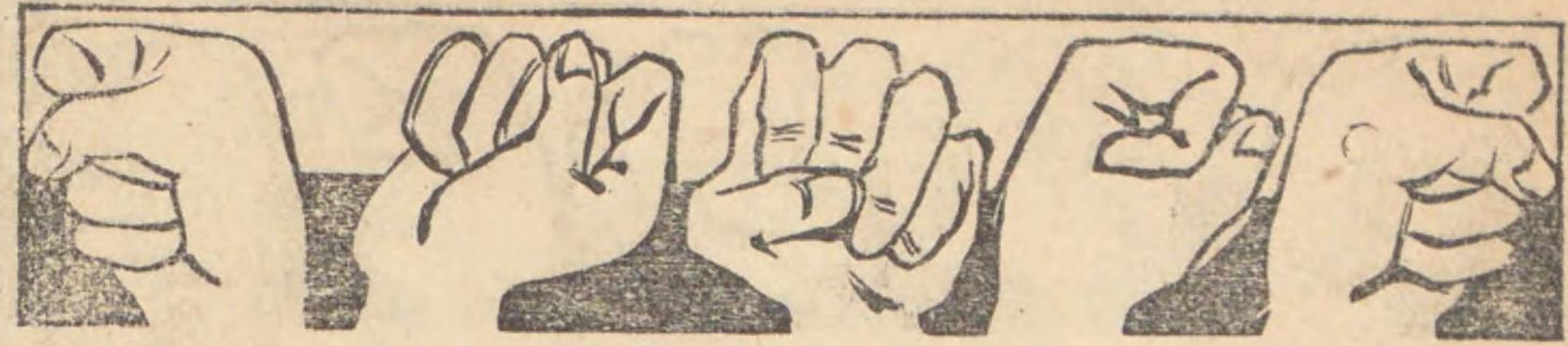
すると、その聲を聞きつけたか、忽ち其所に現はれたのは、昨日出た乞巧であつた。

太郎は見るご喜んで、

「オ、よく来てくれた、お前のくれた不思議の袋で、







これ此の通り死神を封じてやつた。」  
と云つて自慢をするに、乞丐は手を振つて、

「實はその事で來たんですが、成る程この死神が、貴君を誘はうとしたのは悪い、然し世の中に死神が無くなつて誰も死ぬ事が出来ないとなると、人間があまり殖えすぎて、又お互ひに困りますから、死神は又元の通り、封を解いて歸へしておやんなさい！」  
と勧める。

太郎は少し考へたが、  
「他の者なら知らん事、お前が折角云ふんだから、成る

程免してやらん事も無いが、然し又直ぐ來て、乃公を連れてくると困るぢやないか。」

「だから只では免さずに、よく約束をしてから放すのです。」

「さうか。それでは解つた。」

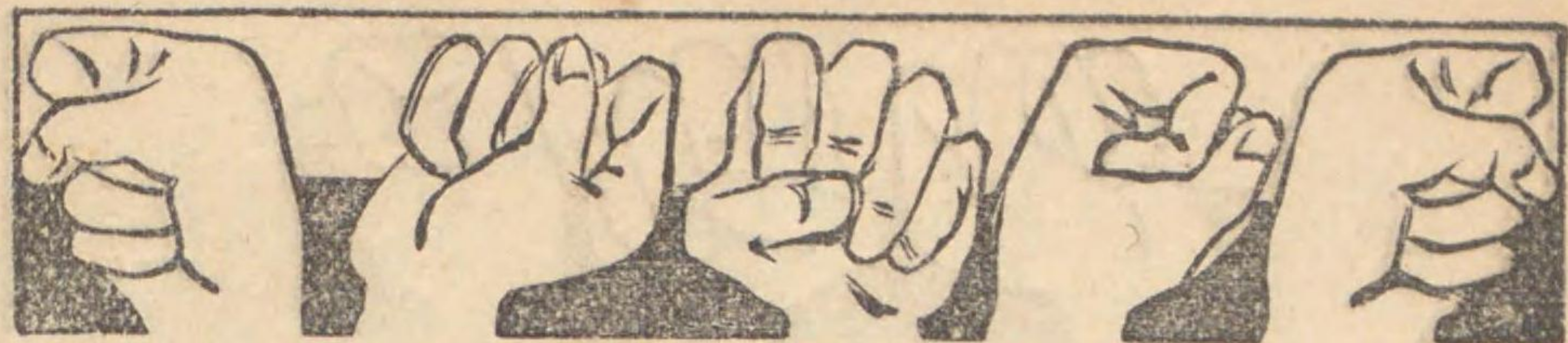
と云ふに、乞丐の姿は掻き消す様に、また何所へか行つてしまつた。

その後で太郎は、袋の中の死神に向ひ、

「ごうだ死神、恐れ入つたか？」

「恐れ入りまして御座います。」





「そんなら勘辨してやるが、その代り乃公の云ふ事を聞け！」

「ハイ、何でも聞きますで御座います。」

「よし、そんならこれから娑婆へ出ても、老人か重い病人の外は、決して誘ふ事は成らんぞ！」

「ハイく畏まりました。」

「世間で役の立つ人は、決して誘ふ事は成らんぞ」

「ハイく畏まりました。」

「人に崇められる善い人や、人を助ける感心な者は、決して貴様誘ふでないぞ！」

「決して誘ひは致しません。」

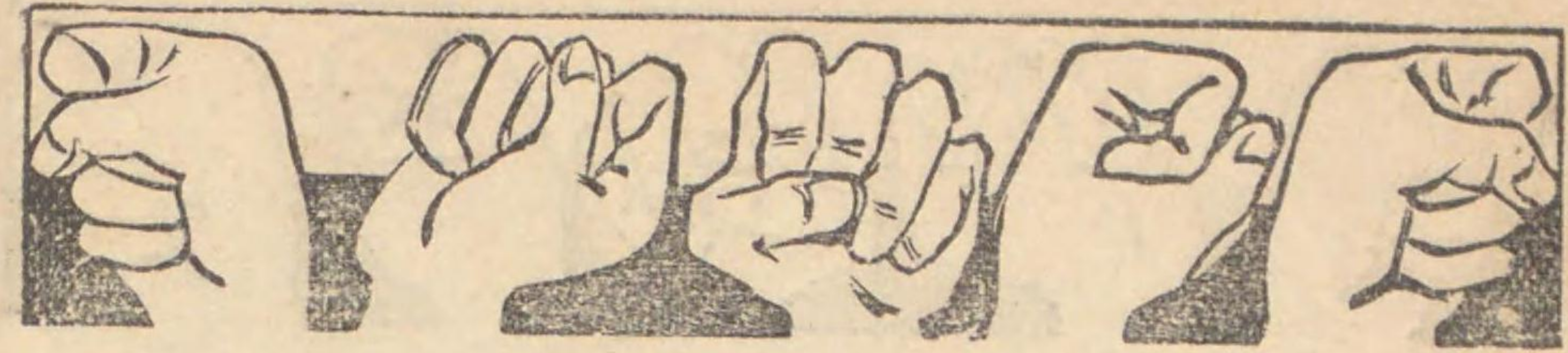
「それから貴様は悪戯に、時々子供を誘ふ様だが、あれは甚だよくない事だ。」

「まここに何うも相済みません。」

「全體子供云ふものは、家の寶だ、國の寶だ。それを大事に育て、行けば、豪い人も善い人も、皆此中から出て来るのに、貴様が途中から誘つて行くのは、まだ花にもならない物を、蕾の中から散らすと同然、こんな惜しい事は無い。」

「御道理で御座います。」





「だからこれから忘れても、決して子供は誘つちやならんぞ！」

「もうく決してお子様方は、誘ふ事では御座いません。」

「その代り悪い事をする奴や、世間の邪魔に成る奴は、

みんな貴様にくれてやる。遠慮は入らん取つて行け！」

「それは難有う御座います。」

「さアこれ丈約束すれば、もう免してやつてもよからう。」

—死神出る！—

と聲をかけるご、死神の黒骸骨は、袋の口からヒヨツコ

リご、又表へ飛び出した。

所へ地獄の方からは、何やらドヤく足音が聞える。

さては又鬼共が、乃公を捉へに來をつたかご、太郎は

拳骨を固めながら、その方を振りむくご、先刻の青鬼や

赤鬼を先に、中央には地獄の王、後には又家來の鬼共、

大勢ドヤくやつて來たが、太郎の前まで來ると、皆鐵

棒をカラリと棄て、角を地にすりつけながら、丁寧

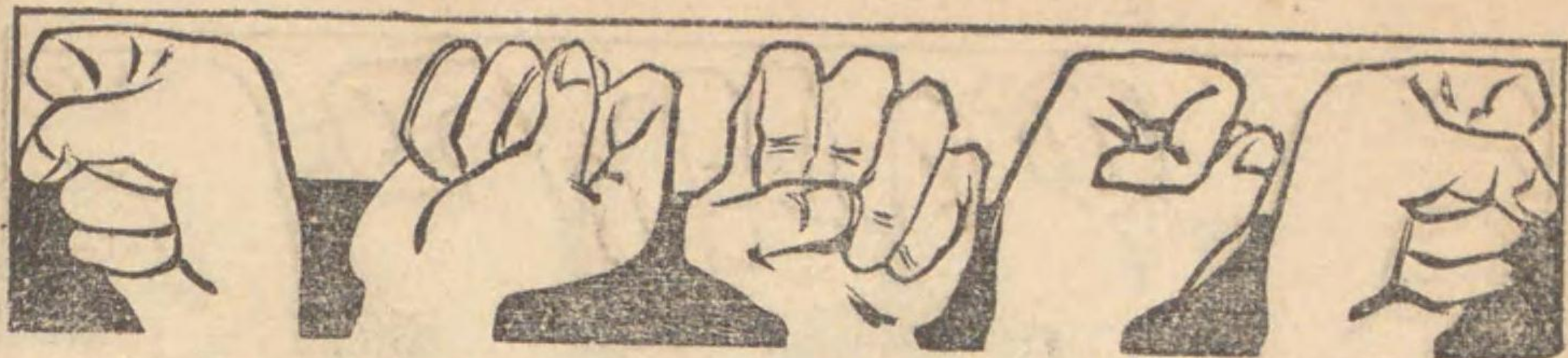
辭儀をした。

太郎は少し勝手がちがつて、握つた拳骨をゆるめなが

ら。

「見れば地獄の王の様だが、何の爲めにやつて來た？」



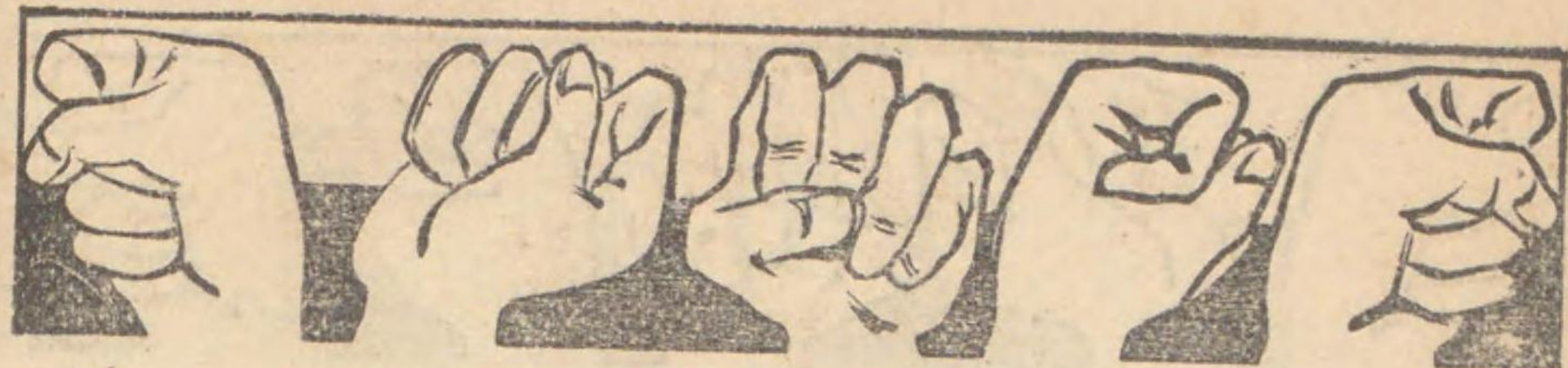


「云ふご、地獄の王は恐るゝ進み出で。  
 「これは拳骨太郎様！初めてお目にかゝりますが、お噂  
 は只今も、家來の鬼共から覗ひまして、身を震はせて居  
 つた所で御座います。それに又只今は、死神奴が目先が  
 見えず、貴君様の様な善い方を、お誘ひ申さうなご、致  
 しまして、眞に相濟まん事で御座いました。然しまた元  
 の通り、死神をお助け下さいましたからは、此後は貴  
 君様の、娑婆がおいやに成りますまで、決してお迎ひに  
 は出しませんから、何卒左様思召しまして、お心安くお  
 生き遊ばしませ！」



「云ひながら帳面を見せ、  
 「コレこの通り、貴君様のお名は、實はこれにも御座い  
 ます通りで、今日頃はお壽命の盡きる所で御座いました  
 が、只今消してしまひましたから、この後は何時まで  
 も、御心次第で御座います。」  
 「オ、さうか。それは大きに難有い。では早速歸るご  
 するが、實は先刻は寢て居る間に來たので、道が解らん  
 で困つて居る。」  
 「イヤ、その御心配には及びません、只今御案内を致さ  
 せます。」





こ、家來の鬼共に眼配をするこ、鬼共は心得て、

「先刻は失禮致しました。」

「いざ御供致します。」

こ、拳骨太郎の先に立つ

地獄の王は後から

「左様なら御機嫌よろしう。またお氣が向きましたら、

ちこお遊びに……」

こ見送つて居る。

死神はまたヒヨコくこ、後に成り先になり、やがて

行方も見えなくなつた頃、太郎は娑婆へ歸りついた。

所が今度来て見るこ、昨夜泊まつた古寺は、立派な御

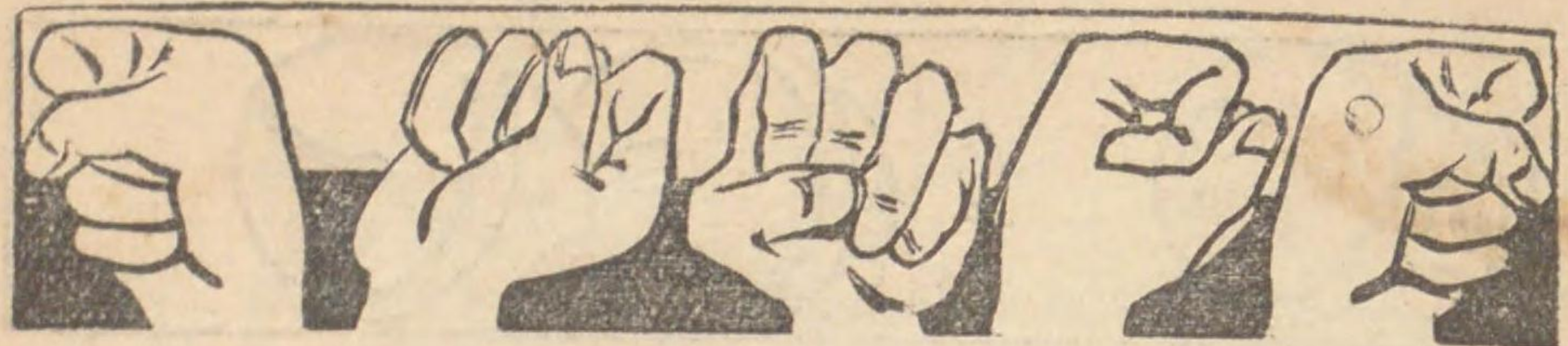
殿に成つて居て、立派に着飾つた家來共が、代るく出

て来ては、太郎を殿様扱ひにする。

拳骨太郎は夢心地だ。然しその楽しい夢は、自分で飽

きてしまはない中は、(例の死神が迎ひに来ないから、

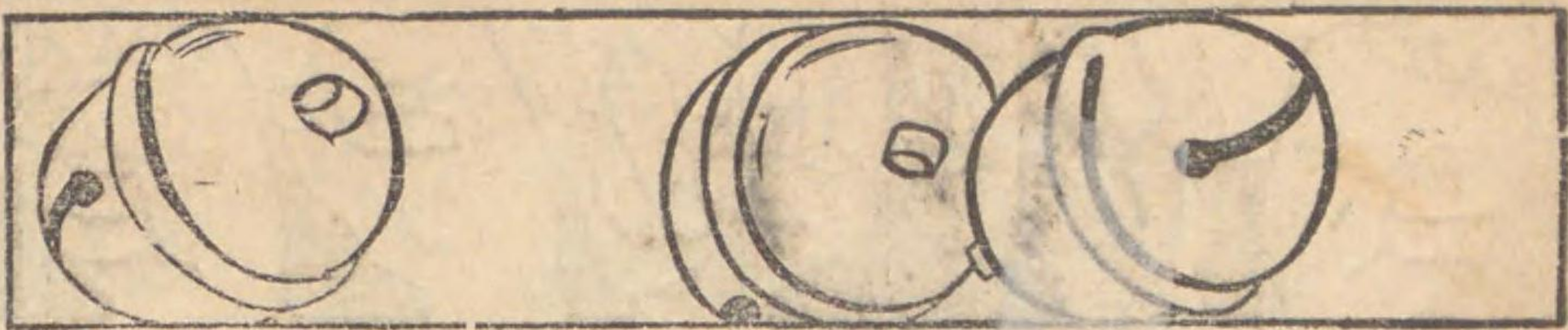
何時までたつても覺めないのである。



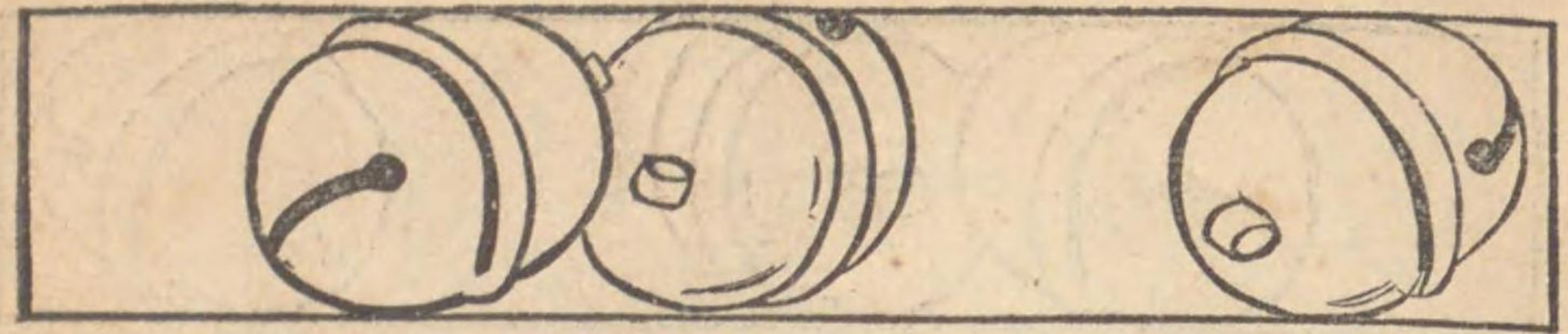


第二 牛の鈴

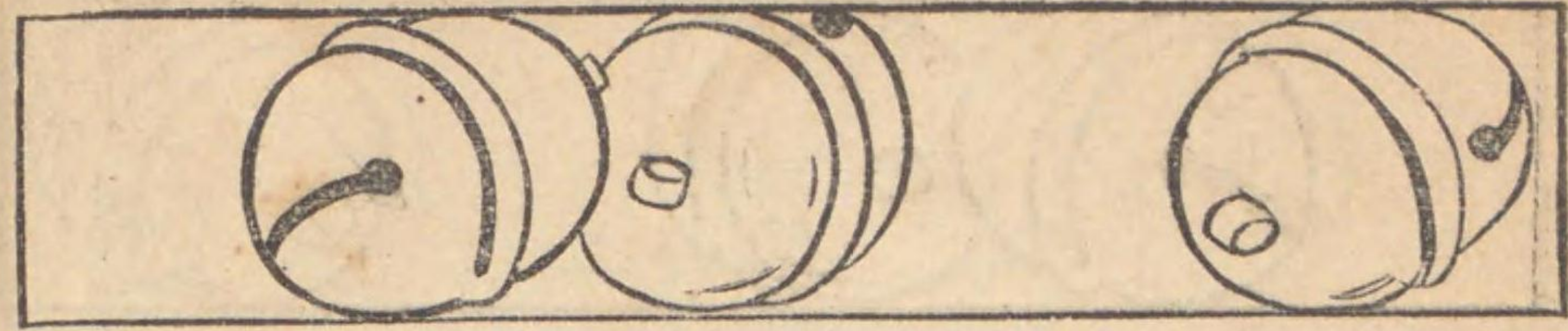
牛うしと云ふ獸けものは、大層鳴物の好きな者です。ですから御覽なさい。祭まつりの山車だしを引くのは、皆牛みなうしと極まつて居ゐましやう。これはいくら草臥くたびれて居ゐる時ときでも、おもしろい嚙は子が聞きえるこ、嬉うれしがつて動うき出だすからです。むかしある所ところに、牛うしの長ちやうじや者しやと云いつて、牛うしを澤山飼たくさんかつて居ゐた、大おほきな長ちやうじや者しやがありました。此家このいへの牛うしには、その頸くびに一つ宛づ、小こな金きんの鈴すずがつけてあつて、歩あるく度たびにチリンチリンくく、好よく音おとがするものですから、牛うしは皆面白おもしろがつて、よく働はたらいて居ゐりました。



よく働はたらいて居ゐりました。所ところが、運うんが悪わるくなるこ仕し様やうの無ないもので、此家このいへにも度たび々々災難さいなんがつゞきますこ、流石さすがの長ちやうじや者しやも段々だんぐ貧乏びんぼうしてしまつて、牛うしも鈴すずも段々だんぐになくなり、果ははたつた一匹ひきに成なりますこ、主人あるじは又また重おもい病氣びやうきにかかりました。その時とき、太郎吉たろうきちにお玉たまと云いふ、二人ふたりの子供こどもは、太切たいじの阿父おとうさんに死しなれては大變へんだこ、一い生しやうけんめい懸命けんめいに看病かんびやうして、出で來きるだけ孝行かうぎやうをしましたが、これも壽命じゆめいであつたこ見みえて、阿父おとうさんはこうくく死しんでしまひました。阿父おとうさんが死しんでしまふこ、二人ふたりは何どうしやうかこ思おもひ

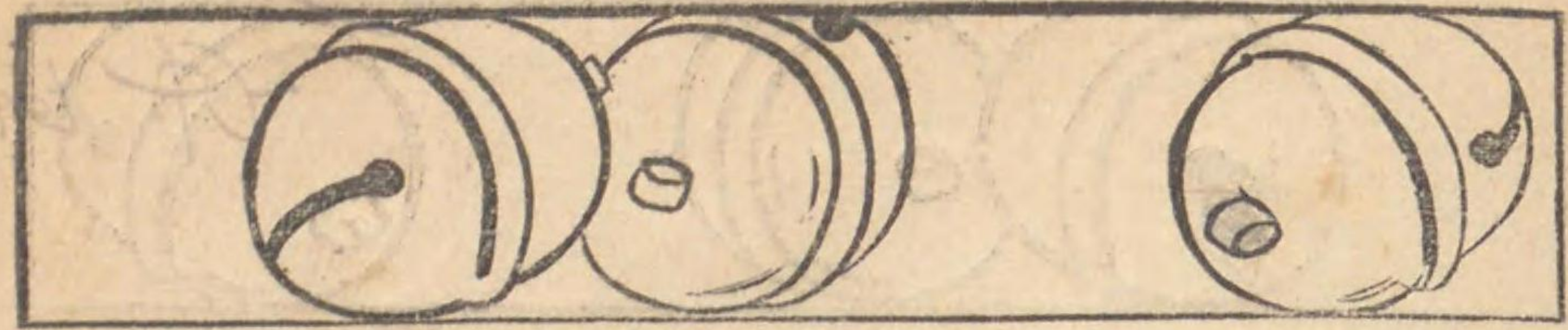






つて、一時は大變哭きましたたが、やつこの事で氣を取り直し、それから後は、たつた一匹残つて居る、源次ご云ふ黒牛を、阿父さんの遺品だご云ふので、一層可愛がつて居りましたが、源次の方でも亦、よく二人になつきまして、一寸見るご恐い様な、大きな軀をして居ながら、まるで猫か犬ころの様に、太郎吉の後についたり、お玉の手に引かれたりして、チリン〜ご鈴を鳴らしながら山や野へ遊びに行くのを、何よりの樂みにして居りました。

ある日の事で、太郎吉ごお玉ごは、例の様に源次を引



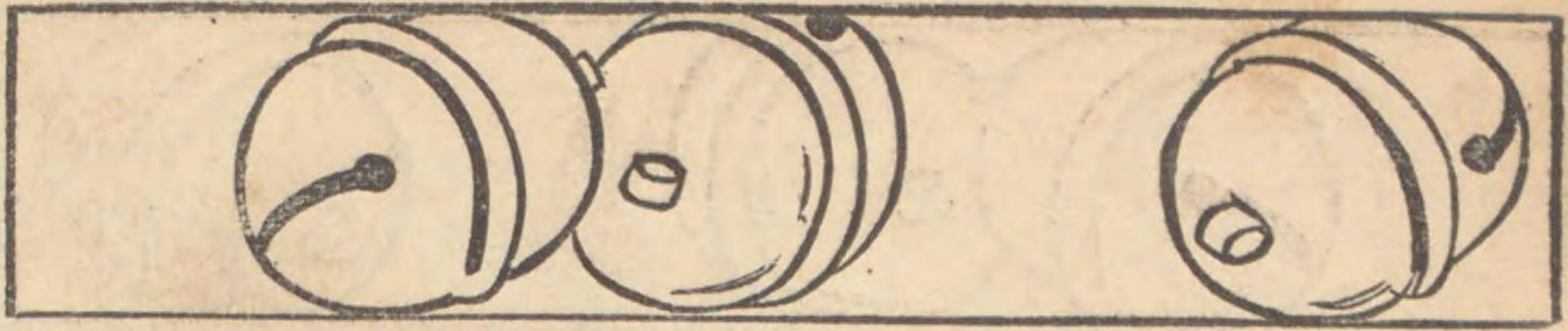
いて、山の上の牧場へ行つて、一日遊んで居りましたが、夕方に成つて歸らうごしますご、彼方から一人の男が、これも牛を一匹引いて來ましたが、やがて太郎吉に向て、「オイ、小僧、その牛はもう直き死ぬせ。だから此牛ご取りかへないか！」

ご云ひます。

直き死ぬご云はれて、太郎吉は驚きましたが、何しろこれは阿父さんの遺品ですから、たごひ死んでも放す事は出来ません。

「そんな事はいやだ。」





こ、云ひすて、行かうごしますご、その男は少し腹を立  
て、

「人が親切に取りかへてやらうツて云ふのに、いやだ  
んて生意氣な小僧だ。」

こ、云ふ中にもう側へ来て、無理に源次の綱を取つて、  
自分で引いて行かうごします。

これは源次の頸の鈴が、金で出来て居るのを知つて居  
ますから、それでこんなに欲しがるのです。

太郎吉は又一生懸命、

「何をするんだ、此人は！」

こ、怒鳴りながら取りかへさうごしますご、

「エイ、黙つてろ！」

こ、蹴飛ばします。

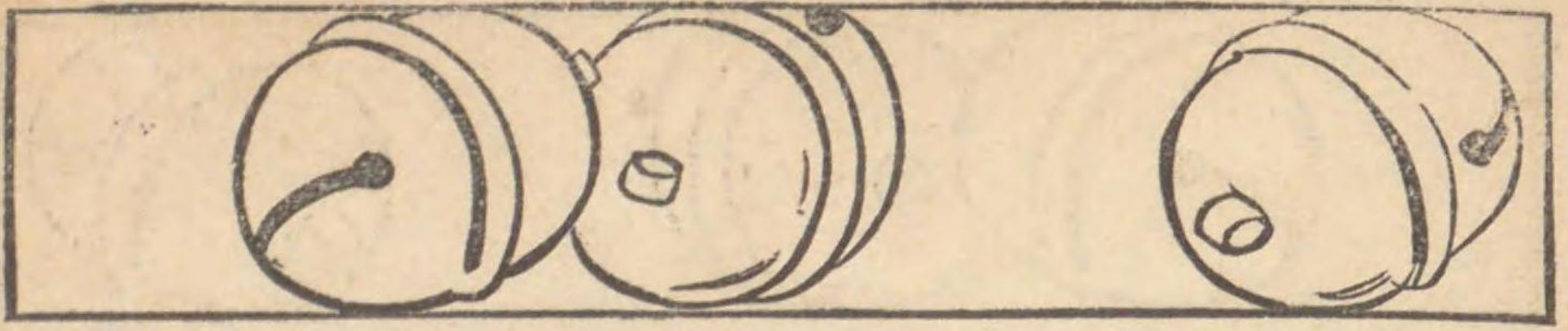
「アレ、盗人く！誰か来て下下さい！」

こ、お玉が傍から聲を立てれば、

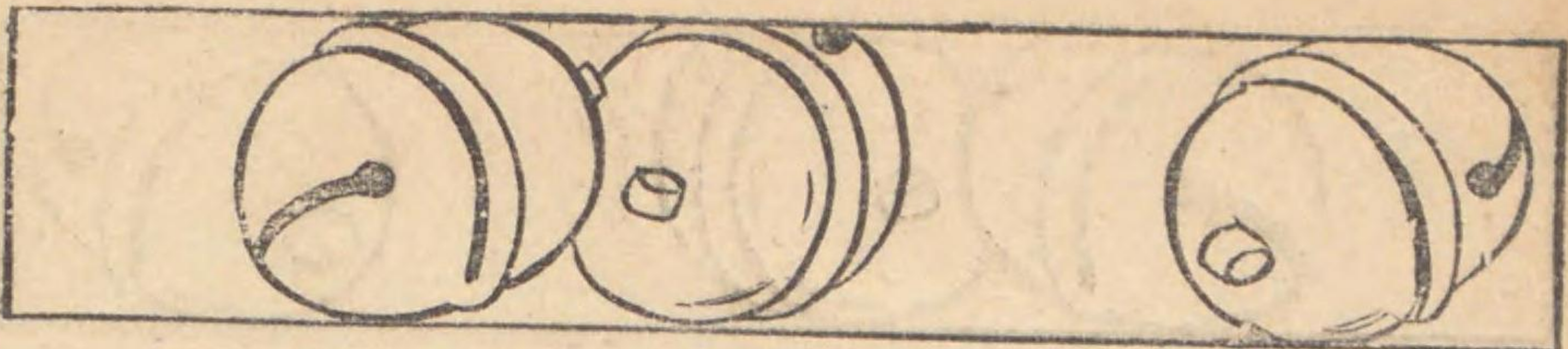
「邪魔するご命は無いぞ。」

こ、亂暴に突き飛ばして、その儘この悪い奴は、源次を  
引いて逃げやうごしました。

所が源次は承知しません。いきなり綱を振り切つて、  
モウご一ご聲申つたご思ふご、角でもつて只のト突、







その男を突き殺してしまひました。  
二人はやつと安心しましたが、見ると先刻の男は、横腹を突き破られて、其場に倒れて居ますから、又肝を潰しまして、

「兄さん、何うしましやう。」

「こりやア大變だ。はやく水を汲んごいでよ！」  
こ、種々に介抱しましたけれども、もう何うしても助からないのです。

するこ、先刻からの騒ぎを聞きつけて、彼方からも此方からも、村の者が出て來ましたが、見ると太郎吉の飼

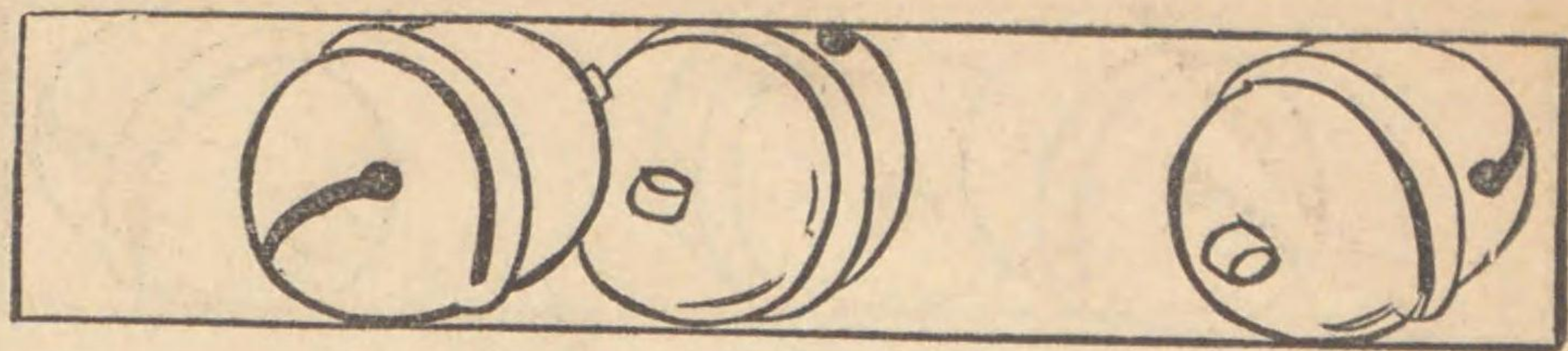
牛が、人を一人突き殺して居ますから、さア只では濟まされません。

やがてお上へ訴へるこ、お上からも役人が出て來て、太郎吉もお玉も源次牛も、皆引立てられてしまひました。

その時太郎吉とお玉とは、初めからの事を皆話しました。が、何しろ相手は死んでしまひ、他に證人が無いものですから、云ふ事が眞實には通らないのです。

こ云つて、二人ともまだ子供ですから、重い罰を受ける事だけは助かり、その代り源次牛は、人を突き殺した科でもつて、そのまゝ撲殺される事になりました。





「二人は嘆くまい事か！」

「何しろ畜生の事ですから、何卒勘辨してやつて下さい！」

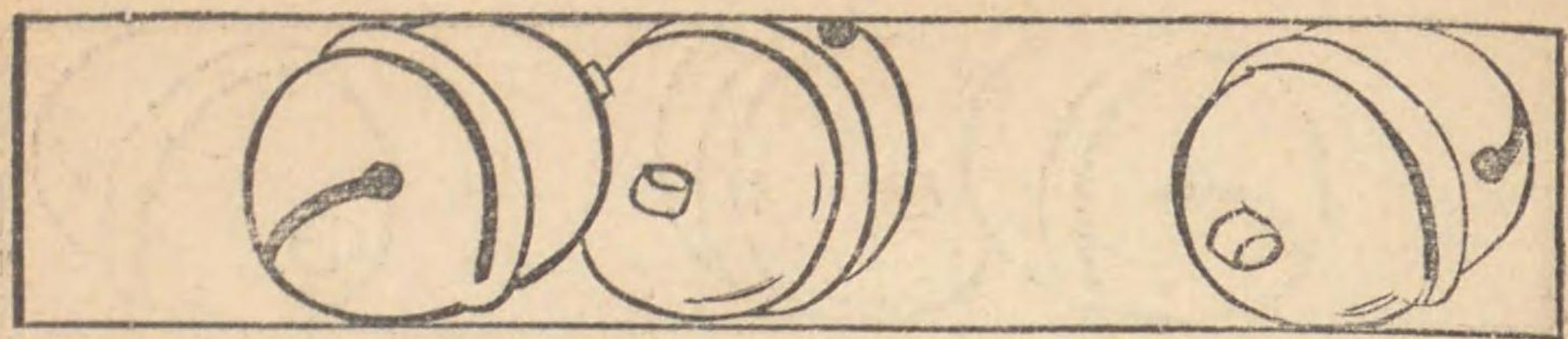
「命乞をしましても。」

「畜生の癖に人間を殺したから、尙の事勘辨成らん。」

「何うしても取り上げに成らず、いよく源次は可哀さうに、役人の手で撲ち殺されました。」

その時太郎吉は、

「せめてその死骸を、頸につけてある鈴は、何卒お下り渡して下さいまし！」

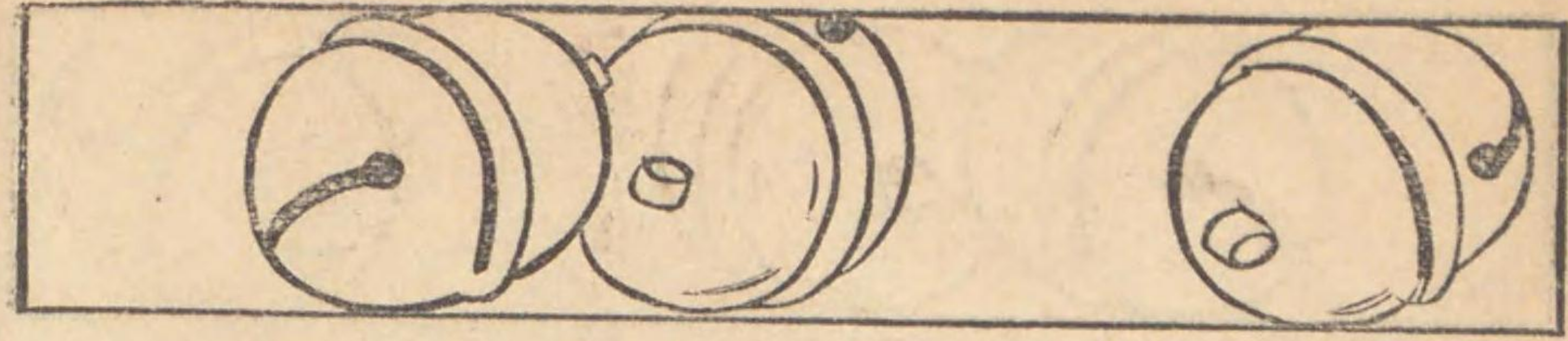


「泣きながら頼みまして、やつと聞き届けられましたから、源次の處刑に成つた後は、その大きな重い死骸を、お玉と二人でウン／＼引きずり、自分の家へお引取りましたが、途々も太郎吉は溜息をつきながら、

「玉ちゃん、ほんごに仕様が無いねエ、折角一匹しか残つて居ない源次を、つまらない事で亡くしてしまつて、阿父さんに濟まないねエ。」

「云ひますご、お玉も涙を啜りながら、  
「ほんごに源次は可哀さうねエ。悪い奴を殺したのに、自分が又殺されてしまつて。……でも源次が殺してくれな





かつたら、私達が殺されたかも知れないわねエ。」  
 「さうごも、さう思やアこの源次は、私達の命の親だよ。」  
 「そんならたごひ死んだつて、麓末にしちやアすまない  
 事よ。」

ご、こんな話をしながら、漸く家へ歸りました。

この重い牛の死骸を、子供の力で引いて来たので、二人はすつかり草臥れましたが、なか／＼休みなどはしません。

直ぐに裏の山の下の、阿父さんのお墓の側に、大きな穴を掘りまして、源次の死骸をそれへ入れ、しづかに土

をかけて、上には杭を立てましたから、立派なお墓が出来ました。

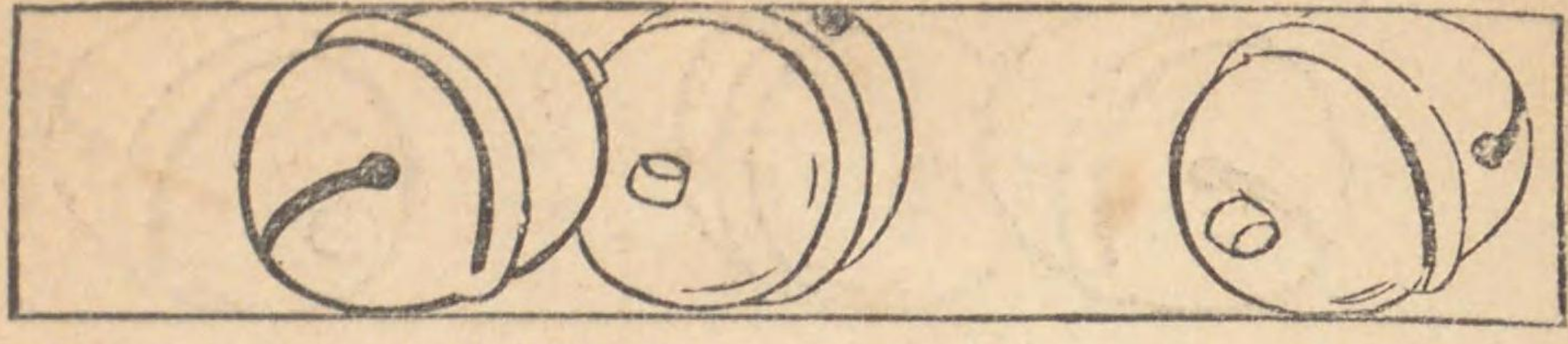
其所へまた二人は、花を立てたり、水を供へたりして、まるで阿父さんのお墓参をする様に、丁寧にお辭儀をしました。お玉は思ひ出しまして、

「兄さん、あの鈴がある事よ。」

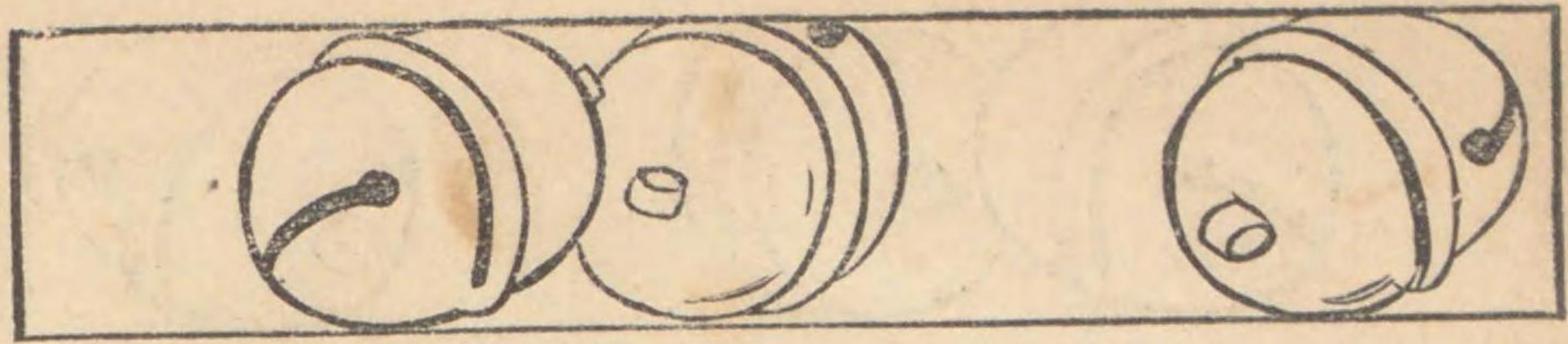
「さうか、それちやア出して鳴らしてやらう。」

「ア、御佛壇で鳴らす様に、此所で鳴らしてやりませうか。」

「吃度源次が喜ぶよ。これ、鳴らして御覽！」







こ、太郎吉はお玉から鈴を受け取つて、チリンと一つ鳴らしました。

するご何所かで、モーと云ふ聲がします。

「ヤア、不思議だ、源次が返事したぜ。」

「まア、さう、私にも貸して下さいな！」

お玉が代つてチリンと鳴らしますと、又同じ様にモーと聞えます。

二人は面白がつて、

「源次がそんなに嬉しがるなら、もつと鳴らしてやらうよ。」



「エ、さうしましやう。」

こ、又代るくチリンく、鳴らせば鳴らすほど、その度にモーく云ふのが、段々近くなつて来て、果はモーと云ふ聲が、つい耳の側で聞えたと思ふと、こは如何に源次牛は、何時の間にか生きかへつて、ちやんと二人の目の前に、さも嬉しさうに立つて居りました。





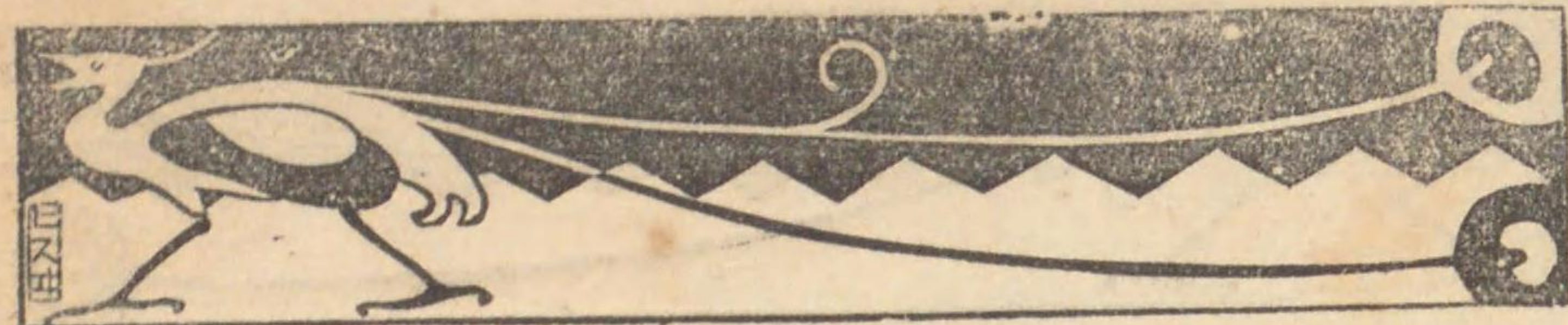
第三 黄金の鳥

むかし大信王と云つて、殊の外信心深い王様が居ら  
つしやいました。

此のお方には、一の宮、二の宮、三の宮と云つて、三  
人の王子が居らつしやいましたが、何れも學問に勝ぐれ、  
武藝に長け、その上立派な男振でありましたから、阿父  
様も大層可愛がつて居らつしやいました。

茲にまたその王様は、或る御願掛の爲めに、九重の塔  
を一つ立てる事になりました。元よりお金は澤山あるの



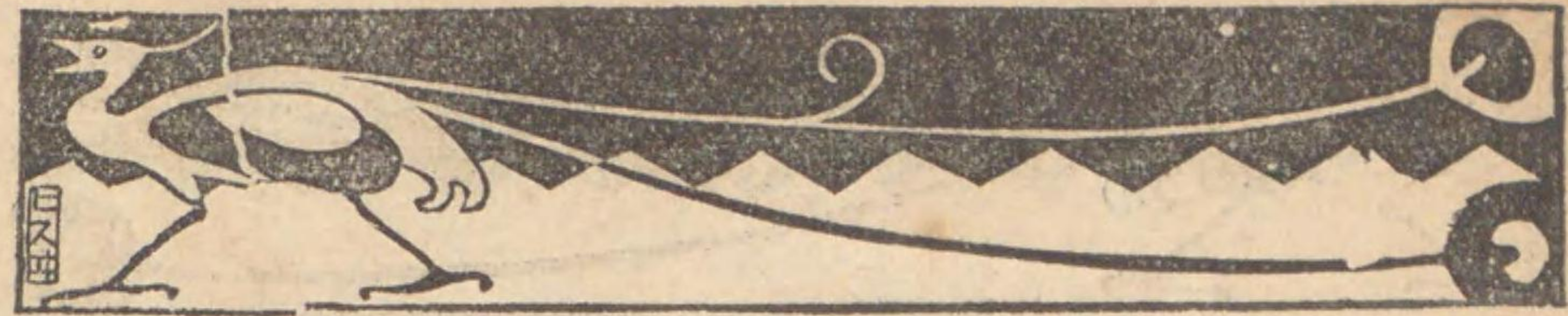


ですから、材木も十分好いを選び、大工も一番上手な  
のを集めて、頻りに普請をお爲せなさいましたが、何う  
云ふものだかこの塔が、立てゝも立てゝも直ぐに倒れて、  
何うしてもほんごに出来上りません。

これも全く御自分の、日頃の信心が足りないからご、  
思ふご王様は御心配で成りませんから、俄かに坊さんを  
大勢召され、御供物を澤山供へて、熱心に御祈禱を上げ  
ましたが、其でも効験は見えませんが、塔は八重まで組  
上げない中に、ガラ／＼と潰れてしまいました。

するご、或晩の事、王様の夢枕に、神様のお使が来て、





「コレ大信王！お前があゝの九重の塔を、滞り無く立てやうと思ふなら、是から遙か西の方の、森の中に住んで居る、黄金の鳥を捉へて来て、その塔の中に飼つて置け！さうすればその塔は、千年が万年経たうとも、決して倒れる事は無い。」

と、云ふかと思ふと、お使は光を放つて天へ上り、やがて王様のお目は覺めました。

王様はこの夢のお告を聞いて、大層お喜びなさいました。が、さてこの黄金の鳥を捉へるには、誰を遣つたらよいだらうと、まづ三人の王子を召して、この御相談をな



さいました、するに御惣領の一の宮は、まづ膝を進ませ

て、  
「それでは私共三人が、是からその鳥を捉へに参りま

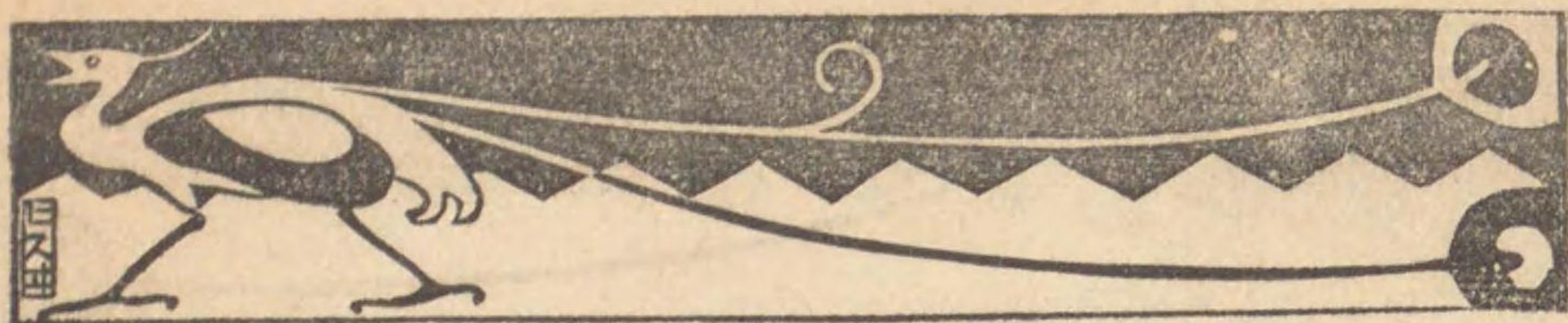
やう。」  
と云いますと、王様は少しお考へに成り、

「イヤ、お前達の行つてくれるのは嬉しいが、三人が三人揃つて行かれては、私がごうも淋しくて困る。それより兄弟順々に、一人宛行つてくれ！で、まづ兄の一の宮から初めて、一の宮が若し捉へ損ねたら、今度は二の宮が代つて行き、二の宮にもそれが出来なければ、また三



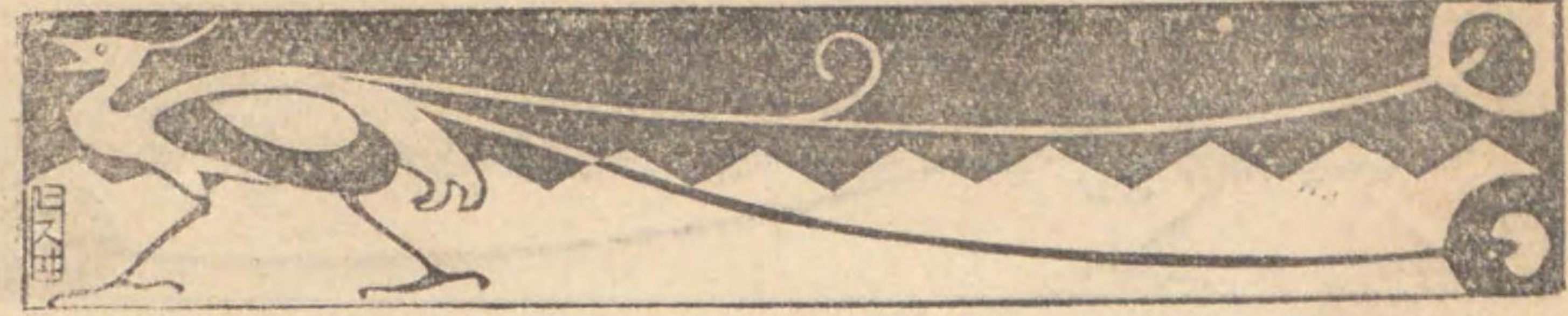


の宮が手傳に行くご、かう云ふ風にしてくれないか！」  
ご頼みますご、一の宮も承知しまして、  
「それではまづ私から参りましやう」  
「あくさうして呉れ！」  
「兄さん一人で追付かなければ私が直ぐにお手傳に行きます。」ご、二の宮も力を添へましたから、一の宮は勇み立つて、直ぐに是から仕度を調べ、  
「それでは阿父様行つて参ります。」  
「兄様氣を付けて入らつしやいました！」  
ご、一の宮は別れを告げて、やがて御殿を出ました。



さて一の宮は段々道を辿つて來ますご、或る日の夕方、大きな森の中へさし掛りました。  
今夜はこの森の中に泊まらうご、木の下に荷物をおろして、その中から用意の食物を出し、枯枝を集めて焚火を初め、それで温めて食べやうごしますご、何處から來ましたか一匹の狐が、一の宮の前に現はれまして、  
「二の宮様、今晚は！……時に甚だ申兼ねましたが、その焚火に當たらせて、そしてその御辨當を、少し分け下さいませんか！」  
ご、馴々しく頼みました。



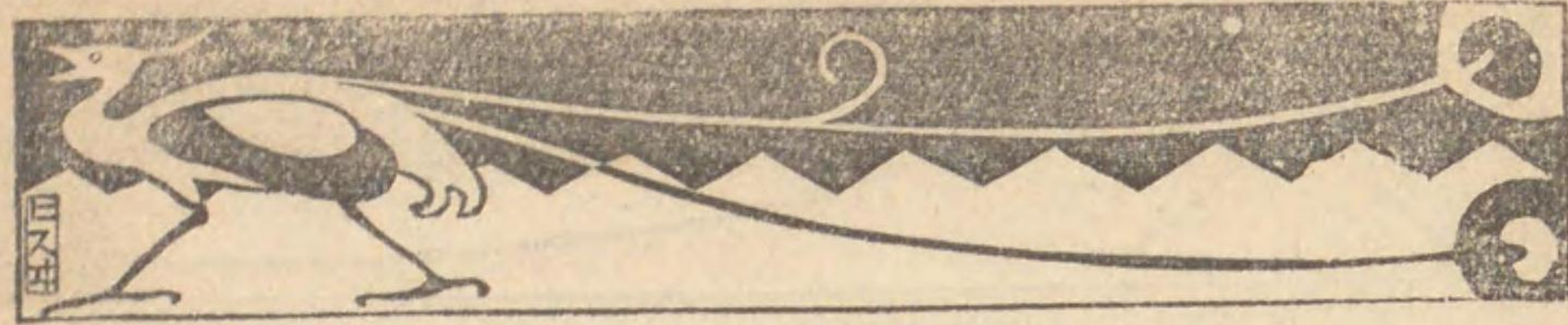


所が一の宮は、つひに見馴れない野狐が、こんな無心を云ひ出したのですから、大層腹を立てまして、

「この畜生！ 蟲の好い事を云ふな！」

こ、大聲で叱り付け、持つて居た鞭を振りあげて、追つ拂はうごしますと、狐は、やくも身を交はして、コーン  
ご一聲鳴きました、不思議やその鳴聲ご一所に、一の宮の人間の姿が、その儘岩に成つてしまひました。

話變つて御殿では、一の宮が御出でに成つてから、黄金の鳥を捕へて來るのを、今か／＼ご待つて居りますのに、何時まで經つてもお歸りの無い許りか、何の音信も



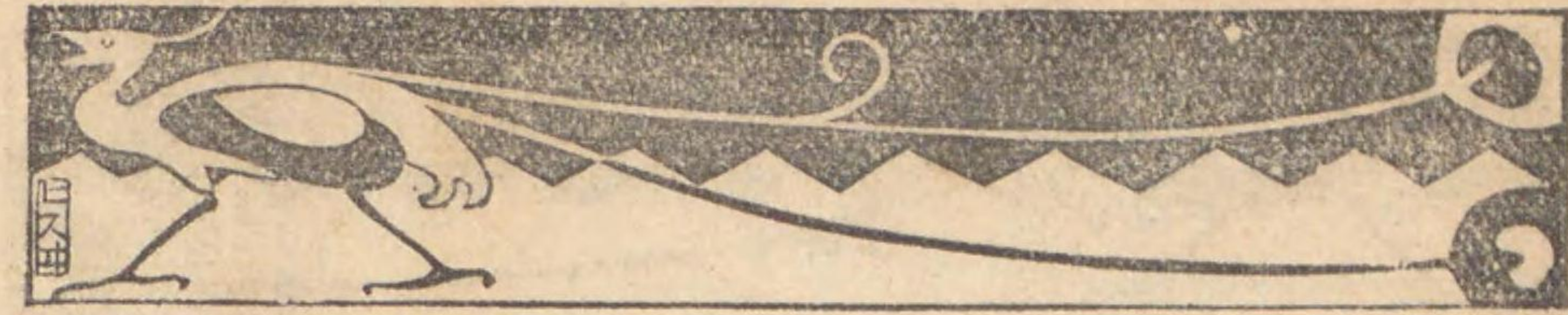
聞えませんか、今度はまた二の宮が、兼ての約束通り、兄様の行方を探し、黄金の鳥を捉へに出かけました。

そこで二の宮も前の通り、仕度をして御殿を出ました、が、或る日の事、一の宮の來た森を通りますと、日が暮れかゝつて來ましたから、まづ木の下に荷物を下ろし、焚火をしてお辨當を使はうごしました。

するごまた野狐が一匹、不意に眼の前に現はれて、

「二の宮様今晚は！ ……時に甚だ申兼ねましたが、その焚火に当たらせて、そしてそのお辨當を、少し分けて下下さいませんか！」





こ、馴々しく頼みました。

二の宮は野狐の頼みを聞くこ、

「何を云ふんだこの畜生！貴様なんぞに遣る物は無いワ。早く退かんと撲ち殺すぞ！」

こ云ひながら鞭を振り上げますこ、狐はヒラリと飛び退きました、其時怪しい身振をして、コーンと一聲鳴きますこ、見る／＼中に二の宮の姿は、其儘岩に成つてしまいました。

かう云ふ鹽梅に、一の宮も二の宮も、森の中の怪しい野狐に、岩にされてしまいましたから、もう御殿えは歸



れません。

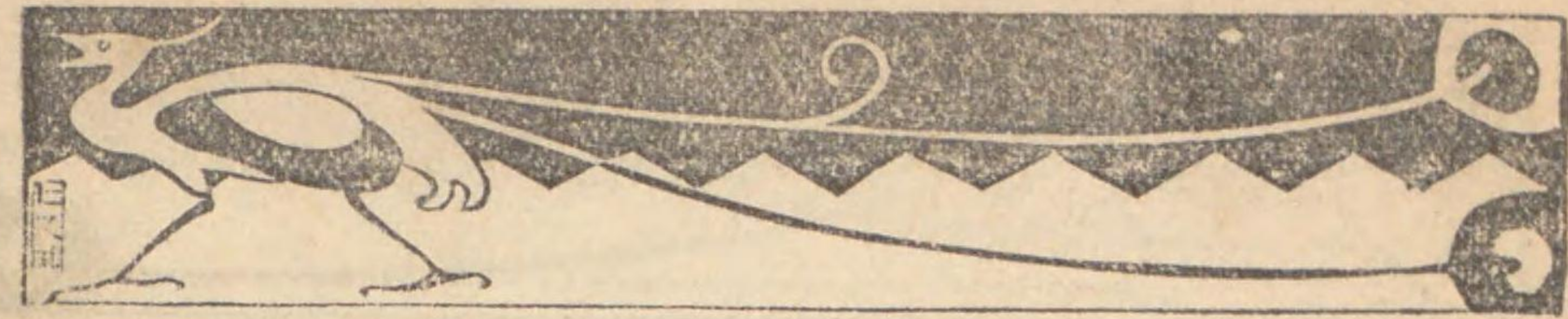
そこで三の宮は、王様の前へ出まして、

「さて阿父様！一の兄様も二の兄様も、此間御殿をお出に成つた限り、いまだにお歸りがありませんから、今度はいよいよ私の番で御座います。で、直ぐに参り度う御座いますから、何卒お暇を頂き度う御座います。」

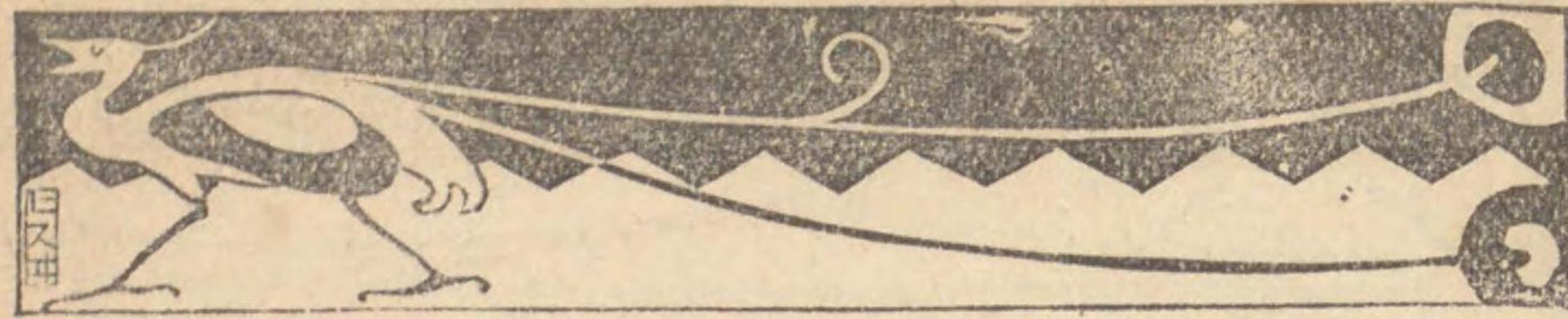
こ云ひましたが、王様は頭を傾け、

「イヤ待つて呉れ！私も此の通り年を取つて、二人の息子は行方知れずに成り、便りに思ふのはお前許りだ。それに今またお前までが、此處を出て行つてしまつては、



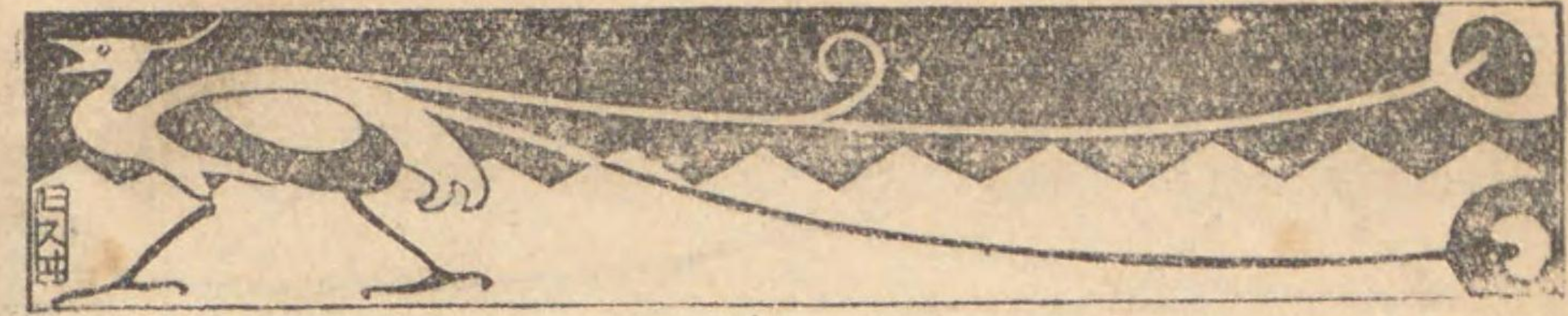


私が淋しくてたまらんから、何卒暫らく待つてくれんか  
！  
ご、容易にお聴きに成りませんでした、  
「いくえ、決してその御心配には及びません。私が参り  
ますからには、黄金の鳥を捉まへます許りか、行方の知  
れない二人の兄様も、屹度探し出してお連れ申しますか  
ら。」  
ご、さも頼もしく云ひましたので、王様も漸く御得心で、  
「それでは萬事お前を頼むから、何卒早く歸つて来てお  
くれ！」



「はい畏まりました。」  
ご、こくていよく三の宮は、二人の兄様と同じ様に、  
黄金の鳥を捉へに出ました。  
所が何う云ふものですか、三の宮も御殿を出た限り、  
何時迄経つても歸つて来ず、また何の音信もありません。  
するご或る日の事、兼て行方の知れなかつた、一の宮  
ご二の宮ごが、不意に御殿へ歸つて来ました。而も一羽  
の黄金の鳥ご、一人の田舎娘ごを連れまして、王様に御  
覽に入れましたから、王様はまづその鳥を御覽に成る、  
まるで金で刻んだ様に、燦爛とした光を放つて、晝





る極樂の鳥を其儘。ごてもこの世界の物ごは思  
ん。

王様は大喜びで、直ぐその黄金の鳥を、九重の塔の中  
で飼ひましたら、その御利益ごでも云ふのですか、塔は  
その日から確乎立つて、少しも壊れない様に成りました。  
それで王様も一ごまづ安心はなさいましたが、その代  
りあの三の宮が、あれ限り歸つて來ませんので、それが  
また悲しく成り、  
「それだから私が留めたのに、………あゝ残念な事をし  
た。」

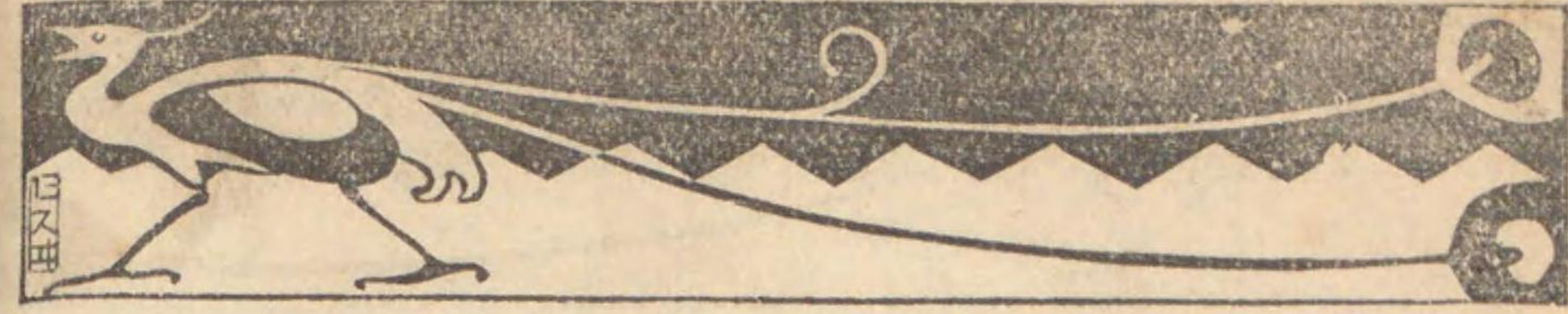


ご、頻りに悔んで居らつしやいました。  
それに又不思議な事には、鳥はそれほご立派でありな  
がら、啞ご見えて少しも鳴きません、只黙つて居る許り  
です。

それをまた王様は、まごごに物足りぬ事に思召し、何  
うかしてあの黄金の鳥を、鳴かせて見る工夫はあるまい  
かご、頻りに考へて居らつしやいましたが、なかく鳴  
きさうな様子がありません。

するご或る日の事、家來の者連速忙しく御前へ來て、  
「王様に申し上げます。只今あの黄金の鳥が、俄かに麗は





しい聲を揚げて、鳴き出しまして御座ります。」  
ご申上げましたから、王様は驚いて、

「ナニ、黄金の鳥が鳴き出したか？それは妙ぢや。」

「イヤ、まだ妙な事が御座ります。——その鳥の鳴きますのも、時刻が極つて居りますので………」

「その時刻は何時だ、何時だ？」

「それがまことに不思議なので御座います。實は昨日から、何所の者とも相知れず、一人の羊飼の少年が、あの御塔へ参りますが、その少年が参りますご、黄金の鳥が直ぐご鳴き出し、またその者が歸へりますご、鳥は直ぐ

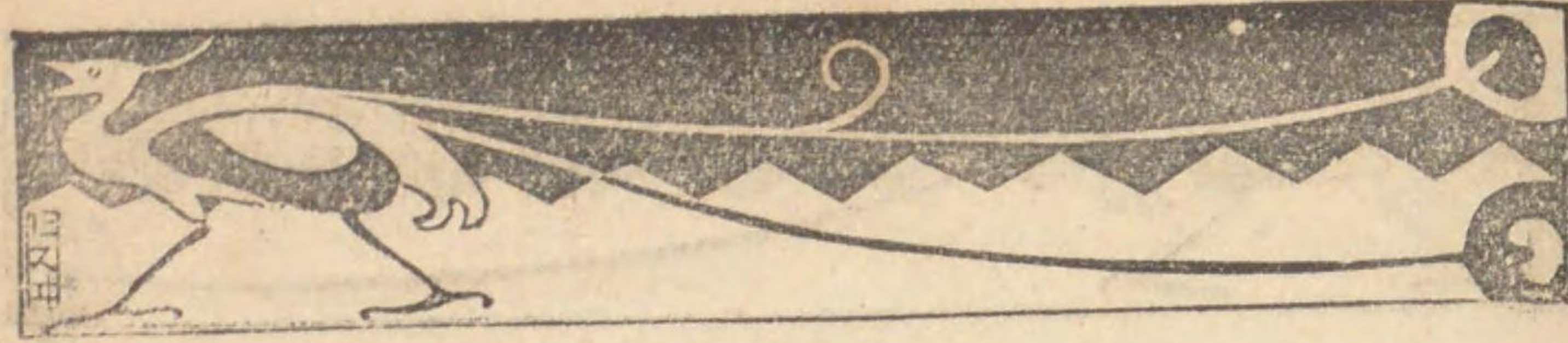
に鳴き止みまして、決して聲を立てぬので御座ります。」

ご、申上げるご王様は、

「それは如何にも不思議の事ぢや。ではその羊飼を連れて来い、く〜！」

ご、急ぎ込んで仰有いましたが、何しろ今日はもう歸つてしまつて、何所の者だか素性さへ知れないのですから、兎も角も明日まで待つて、明日また塔へお参りに來たら、直ぐに引連れて参りませうご、御家來はよくお請合ひ申して、明日に成るのを待ちに待つてました。

さて翌日に成りますご、王様は御自分から九重の塔の







側へお出ましに成り、羊飼の來るのを今かくこ、首を  
伸ばして待つて居らつしやいました。

其中に黄金の鳥が、まるで音樂の様な聲をあげて、美  
しく鳴き初めましたから、さてこそ耳を欬て、居らつ  
しやるこ、お附きの家來はお袖を引いて、

「ソレ、御覽遊ばせ！羊飼が來るこ直ぐ鳴くので御座い  
ます。」

こ申上げますから、」

「ドレ、何所に、羊飼が居る？」

こ、四邊を見廻はして御覽に成るこ、成る程彼方の塔の

陰に、何時の間にか羊飼の小僧が、ちやんこ來て居りま  
すから、

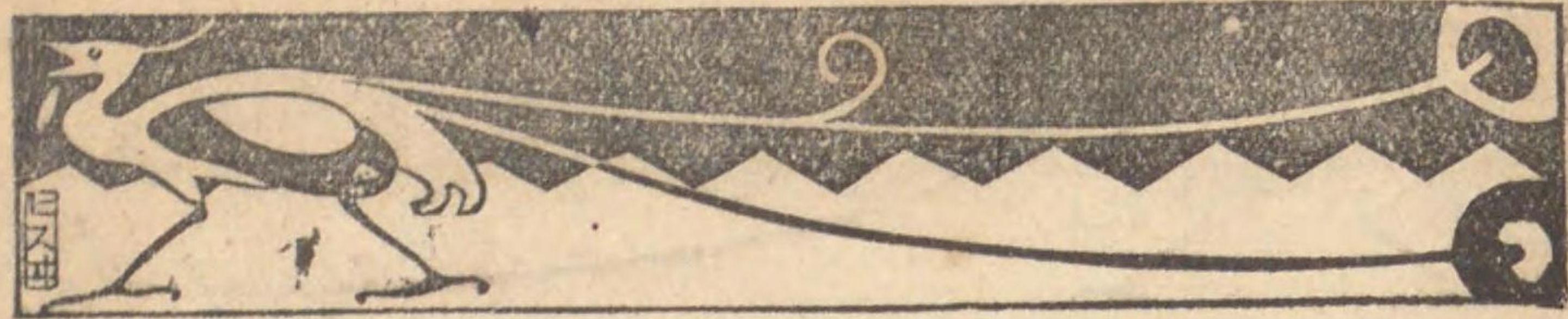
「ソレ、はやく捕へろ！」

「畏まりました御座います。」

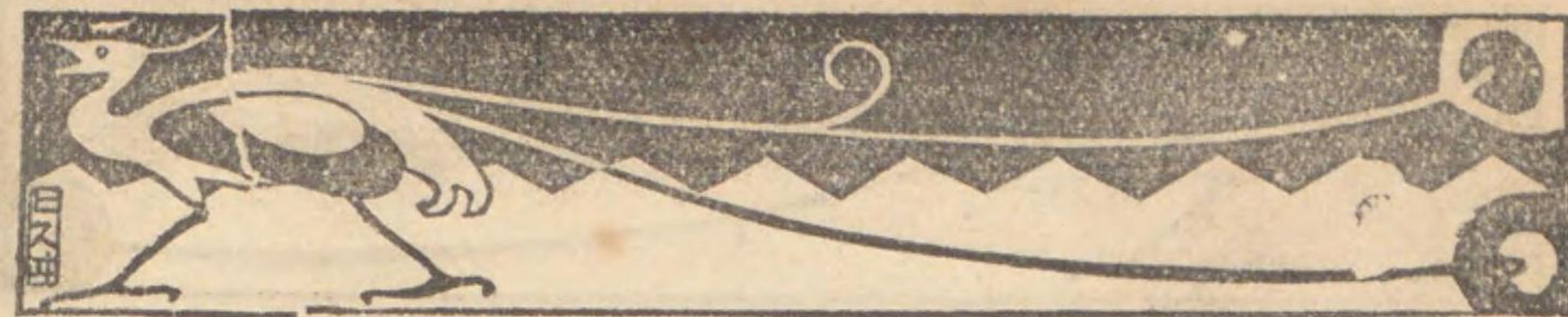
こ、家來はそこへ飛んで行つて、いきなり羊飼の小僧を  
捕へ、王様の前へ連れて來ました。

王様は御覽に成るこ、風俗こそ汚い羊飼ですが、容貌  
の可愛らしい若者ですから、言葉を和らげて、

「コレ小僧——其方は一體何所の者か？親はあるか？そ  
してまた何の爲めに、この塔へ通つて來るのだ？」







「ご、お尋たづねに成なりました。

羊飼ひつじかひの小僧こぞうは叮寧ていねいにお辭儀じぎをして、

「ハイ、お話はなしは長ながう御座ございますが、仰あふせの通とほり私わたくしには、兩りゆう親しんも御座ござりますれば、また兄弟きょうだいも御座ございます。で、お尋たづねご御座ございますれば、私わたくしが此所こゝへまゐります譯わけを、お話はなしし申まをしてもよろしう御座ございますが、何分なにぶん今日こんにちは、もはや時刻じこくも御座ございませんから、明日あしたは朝早あさはやくから、御殿ごてんへ參まゐ上じやうじた致いたしまして、殘のこらず申まを上げるご致いたしましやう。」

「よし、それでは屹度きつど待まつて居をるから、明日あしたは早はやく來こいよ！」

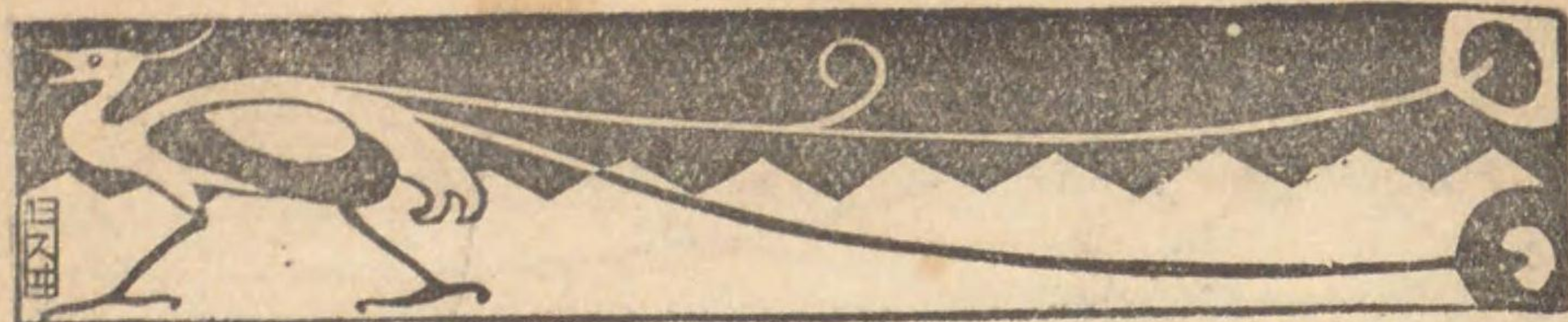
「畏かしこまりましたございます。」

「ご、こゝで御約束おやくそくが出來でて、その場ばは御別わかれに成なりました。

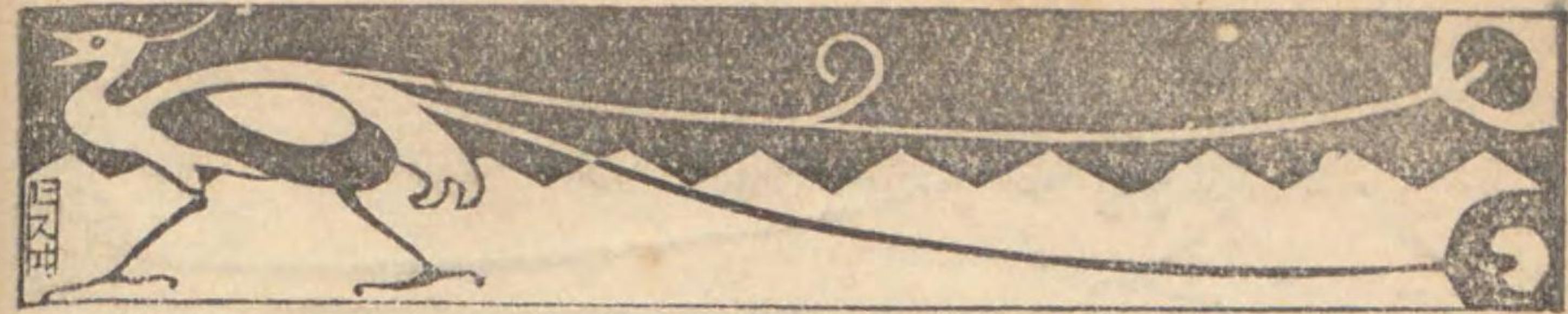
さて又次またつぎの日ひに成なりますご、まだ夜よも明あけはなれない中うちから、王様わうさまは御寢間おねまを出でて、ちゃんご待まつて居をらつしやいます。

所ところへ羊飼ひつじかひが參まゐりましたから、

「さ、今日けふは殘のこらず話はなしして聞きかせい！あの塔たふの黄金こがねの鳥とりが、其方そちが參まゐるご快こころよく鳴なき、其方そちが歸かへるご直すぐに鳴なき止やむ。あれは全體ぜんたい何なにう云いふ譯わけぢや？」



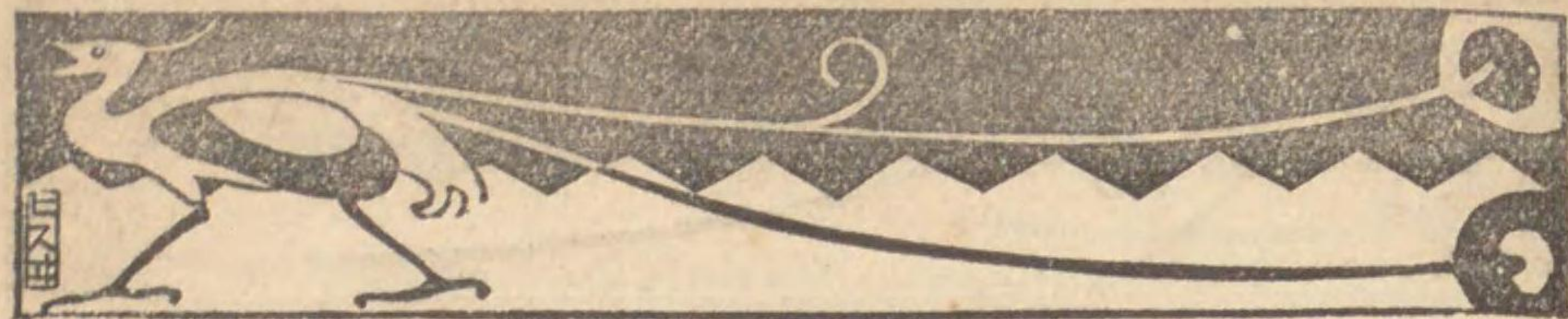




ご、お尋たづねがありました。

羊飼ひつじかひは此時このとき進すすみ出でて、

「それでは委くましく申まう上げましやう。——昨日きのうも一寸ちよつと申まう上げま  
した通りどほ私わたくしには一人ひとりの父ちちと、二人にんの兄あにとが御座ございます、  
その父ちちの依たの頼みによりまして、否いや、その父ちちを喜よろこばせやうと  
存ぞんじまして、或ある時とき私わたくしは宅たくを出でて、遠とほい他國たこくへ参まゐつたので  
ございます。或ある日ひの事ことでございました。大おほきな森もりの中なか  
へさしか、りましたが、折をりから暮方くれがたでもございましたの  
で、用意よういの辨當べんたうを使つかはうと存ぞんじて、木きの陰かげで焚火たきびを致いたし、  
それにあたつて居をりますご、不意ふいに私わたくしの眼めの前まへに現あらはれ



た者ものがございます。何所どこから何なにうして参まゐりました者ものか、兎う  
に角かく其所そのこに居をりますのは、一匹ひきの古狐ふるきつねでございましたが、  
私わたくしに申まうしますには、「ごうも寒さむくてたまりませんから、ち  
ご火ひに當あたらせて下さい」ご、かう云いふ依たの頼みでございますか  
ら、「さア、當あたるがよい」ご申まをしますご、狐きつねは側そばへよりなが  
ら、又また私わたくしに頼たのみますには、「ごうもお腹なかがすいてたまりませ  
んから、そのお辨當べんたうを少すこし下くださいませんか！」ご、かう申まをす  
ので御座ございます。そこでまた私わたくしは、持もち合あ合せの辨當べんたうを半はん  
分ぶんわけて、この狐きつねに食たべさしましたら、大層たいそう喜よろこびまして、  
それから兩方りやうほうとも懇意こんいになり、いろくな話はなしを致いたしたの





で御座います。」

「フン成る程、ではその狐に食物を與へて、仲好く話をしたご申すのぢやナ。」

「左様で御座います。」

「シテ、それは何う云ふ話をした？」

「まづ私が父の用で、遠くへ參る事を話し、ごうしたらこの用が仕遂て、父を喜ばす事が出来やうかご申しますご、狐の申しますには、「それは御安心なさいまし！ 私が手傳つてあげますから。で、明日夜が明けたら、直ぐに一所に出かけましやう」と、かう云ふ事でございませうから、私も不



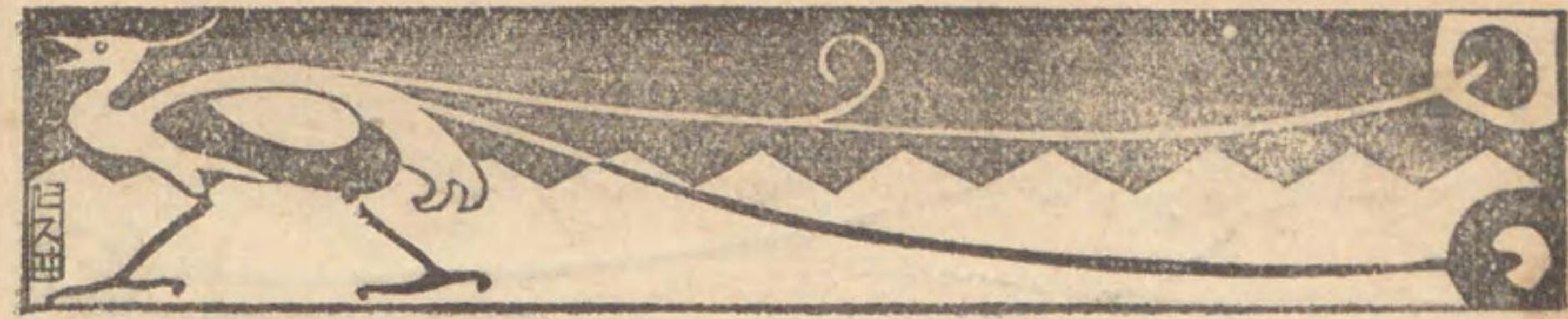
思議に思ひながら、「では何分頼む」と申しますご、狐は「大丈夫です」と請合つて、やがて「お休みなさい」と云ひながら、何所へか行つてしまひました。さて其晩は草臥れまぎれに、その木の陰でグツスリ寝込んでしまひまして、やがて翌朝目を覺まして見ますご、何ご不思議では御座いませんか！ 自分の四邊にある捨石が、まるで二人の人間の様に見えるので御座います。」

王様は驚いて、

「ナニ捨石が人間に見えた？」

「ハイ、まるで人間が生きながら、石に成つたごでも申

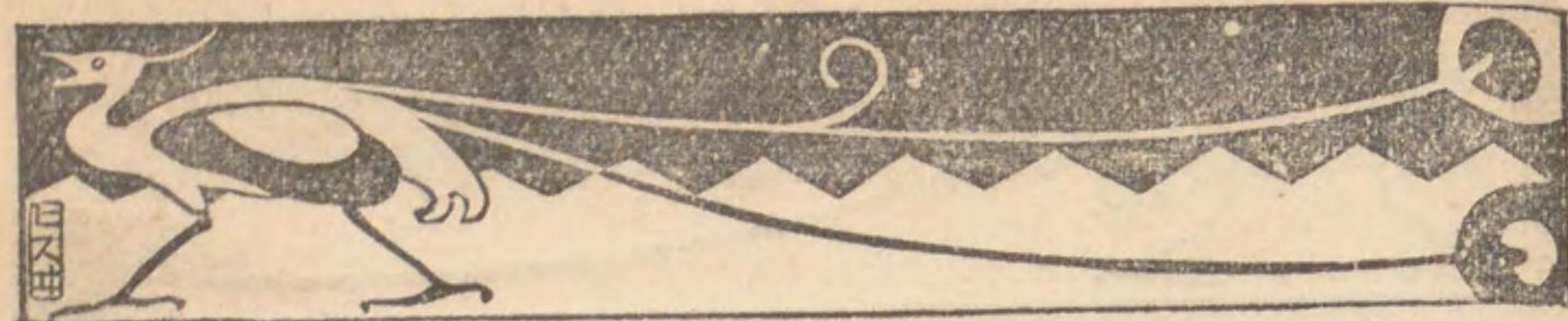




す様に！」

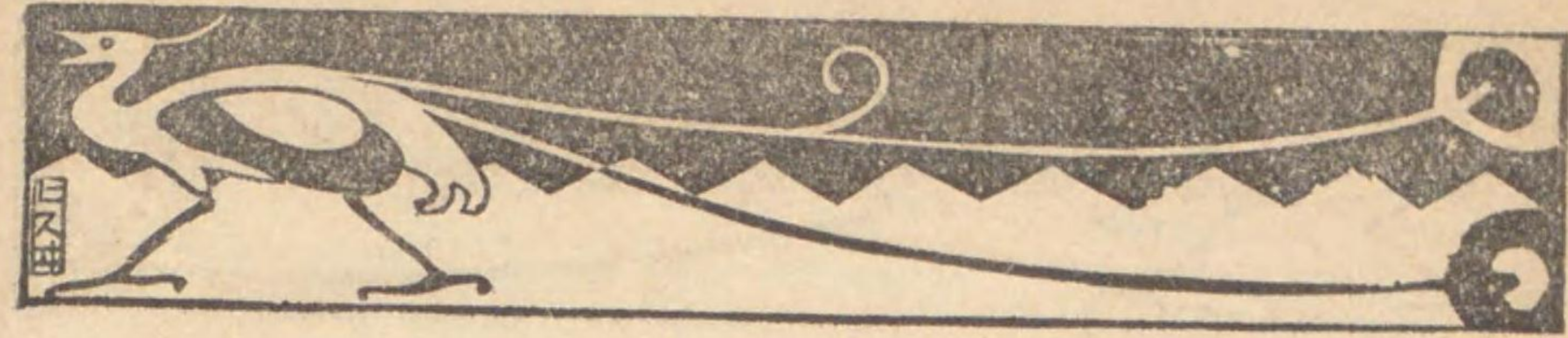
「それは妙ちやナ。——それから何う致した？」

「所へ昨夜の狐がまゐりましたが、それがまた不思議でございまして、私の前へ参りますと、三度クル〜ツと廻つたと思ふ中に、立派な人間の、而も強うな武士に成つたので御座います。私は吃驚致しまして、「これは何うしたのだ？」と申しますと、「實は私は狐では無い、元はこの通り人間で、この邊の地面は、皆私の領分なのだが、或る罪科を犯した爲に、悪魔の神に呪はれて、暫らく狐の姿に成つて居たのだ、それでこの罰を免れるには、情深い人間に、



火と食物の恵を受けなければ成らんのだが、ごうも今まで来た者に、一人もさう云ふ善い人は無かつた。それにお前は、昨夜私の依頼を聞いて、火と食物を恵んで、私を元の體にしてくれたから、それでそのお禮に、是からお前の加勢をするのだ。さア一所に行かうと、かう申すので御座います。私は大きに安心しまして、それからその武士の一所に、段々道を参りましたが、その中に大きな山の上の、廣い野原へ來かかりますと、その武士の申しますには、「此所はもう龍の國と云つて、恐ろしい龍の住んで居る所だが、お前がお父さんを喜ばせる爲めに、持つて歸へ





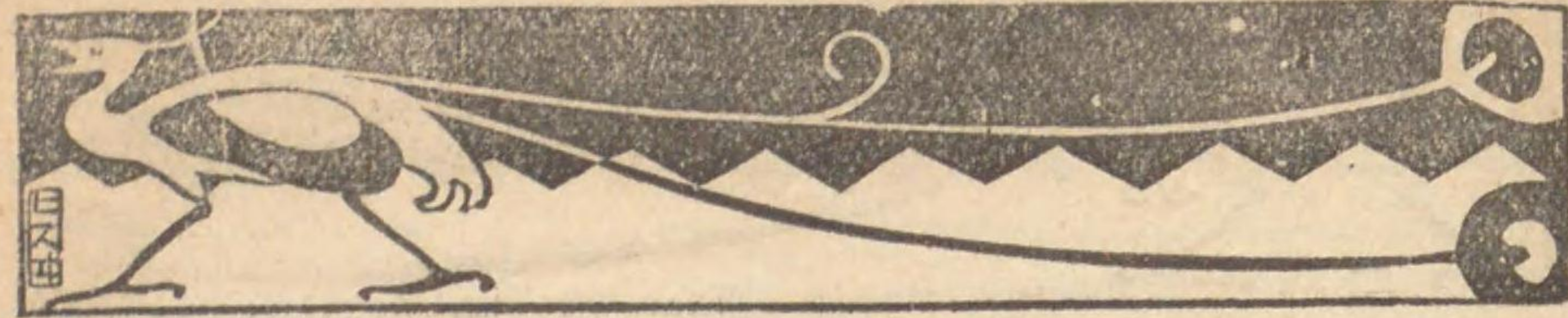
らうと思ふものは、此の國にあるに相違ない」と、かう云ふ話で御座いますから、私も大きに喜びましたが、さて龍の國だご聞きますご、また少しは氣味も悪うございまして。

「それは成る程恐しい所ぢやナ。」

「その中に私共は、もう龍の城に参りました。イヤ、そのまた奇麗な事ご申したら、ごても口では申上げられませんが。」

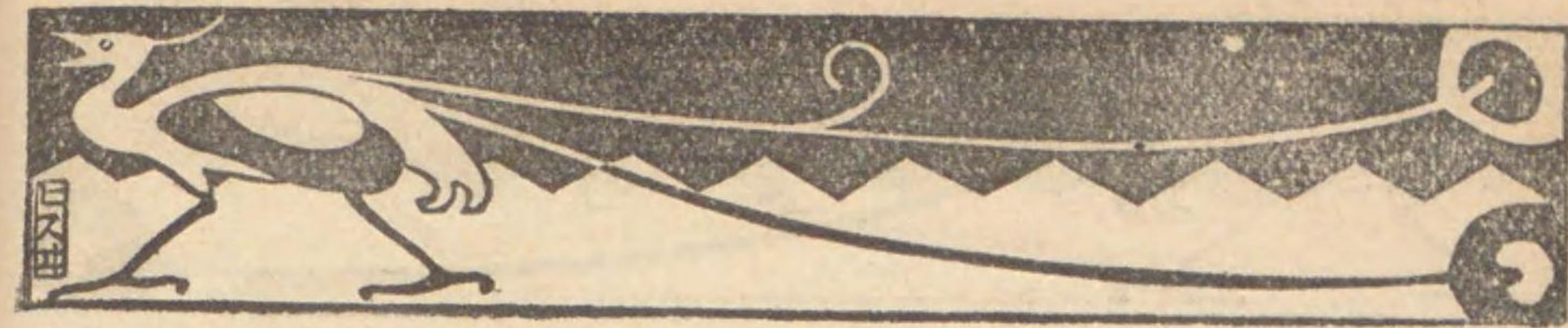
「なるほど。」

「所が幸にも、其日は龍が留守でございましてから、私共



は遠慮なく、中へ入つて参らうご致しますご、丁度その玄關の所で、美しい娘に出會ひました。聞けばこの女は、龍に攫はれて参つた者ださうで、私共を見ますご、大層懐かしがりまして、嬉し泣きに泣きましたが、また私共に、「今に龍が歸つて来るご、屹度貴君方を食ひ殺すから、決して此所へは入るな」と申すのでございます。そこで私は、此所へ参つた理由を話し、私の父の望む者は、全體何所にあるだらうご申しましたら、その女の申しますには、「それは屹度此の隣の、弟龍の所にありますから、そこへ行つてお取りなさい！其代り首尾好くそれを持つ





て、お國へ歸ると云ふ時には、何卒私を連れて行つて下さい！」と、かう云ふ依頼でございますから、私は承知致しました。そして、それからまたその隣の、弟龍のころへ急ぎました。

「それで龍には會はなかつたか？」

「幸ひ出會はずに済ましてございます。」

さて私共は、その次の朝早く、弟龍の國へ参りますと、このまた弟龍の城が、前に見ました龍の城より、一層見事な物でございました。而もその城の窓に、立派な鳥籠が掛つて居りまして、その中には黄金の鳥が、美しい聲で唄

つて居りました。

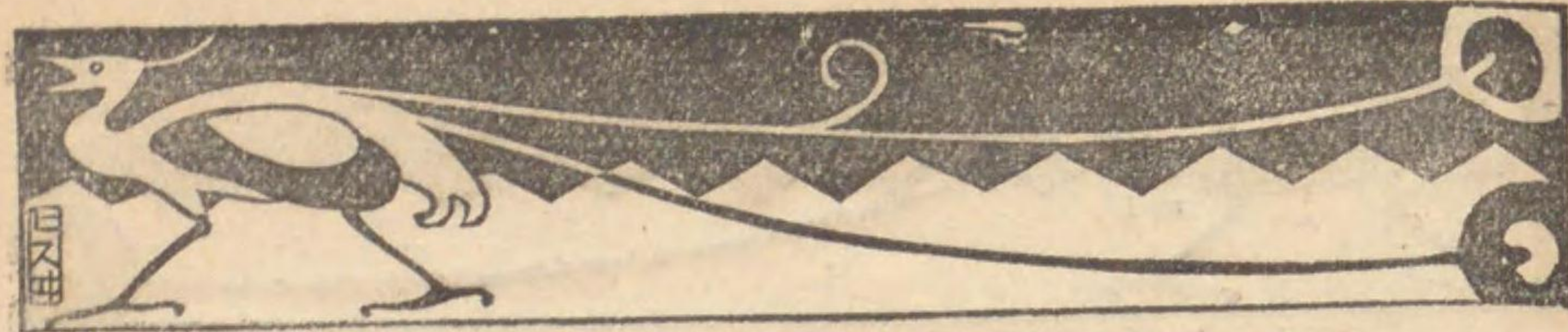
「ナニ、黄金の鳥が？」

「ハイ、黄金の鳥が居りました。而もその黄金の鳥こそ、父の望んで居る者で御座いますから、私は直ぐに参つて、その鳥を取つてしまひました。」

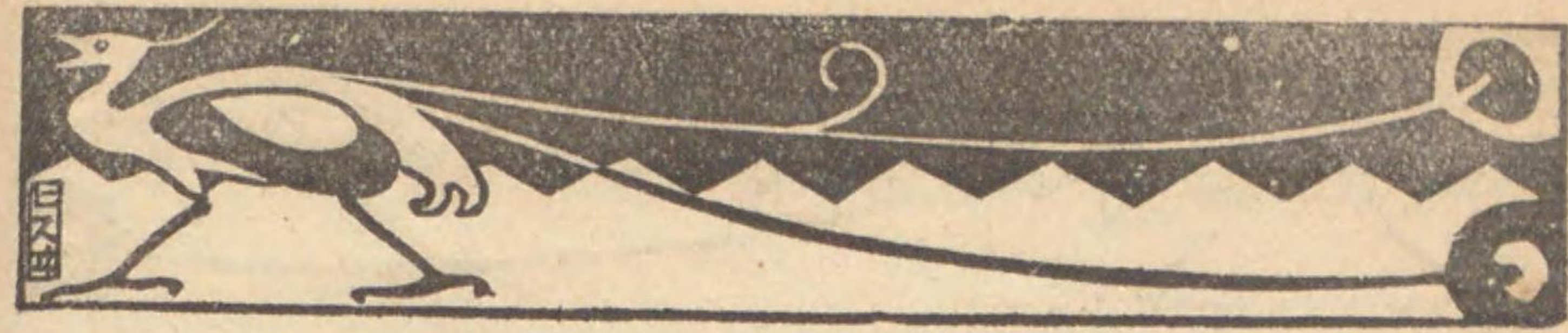
「ナニその黄金の鳥を……父が望むハテ似た事もあるものぢやなア。」

「似た所では御座いません、今は何を御隠し申しませう、私こそ、阿父様！貴君の三の王子で御座います。」

「えッ、さてはお前は三の宮であつたか。ヤレなつかし







や!

「こ、王様は我知らず御座を立つて、この羊飼の小僧……  
ではもう無い、三の宮の手を取つて、暫らく顔を眺めて  
居らつしやいましたが、

「成る程三の宮に相違無い。今まではあまり變つた姿に、  
少しも氣の付かなかつたのは、我ながら恥かしい。——然  
しまたこの姿は、全體何う云ふ理由なのだ。早く話して  
聞かせてくれ!」

「こ仰有いますと、何思つたか三の宮は、

「其のお話を致します前に、何卒お願で御座いますから、

兄様達の連てお歸りに成つた、あの田舎娘に會はして下  
さいまし!」

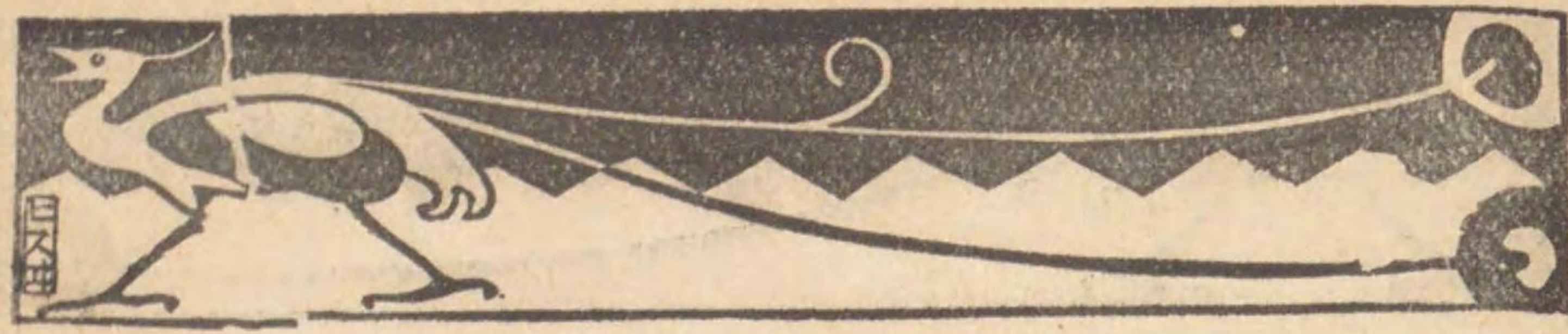
「こ云ひますから、王様も點頭いて、

「オ、あの田舎娘なら、臺所に雞の番を致して居る筈  
ぢや。直ぐにこれへ呼んでやらう。」

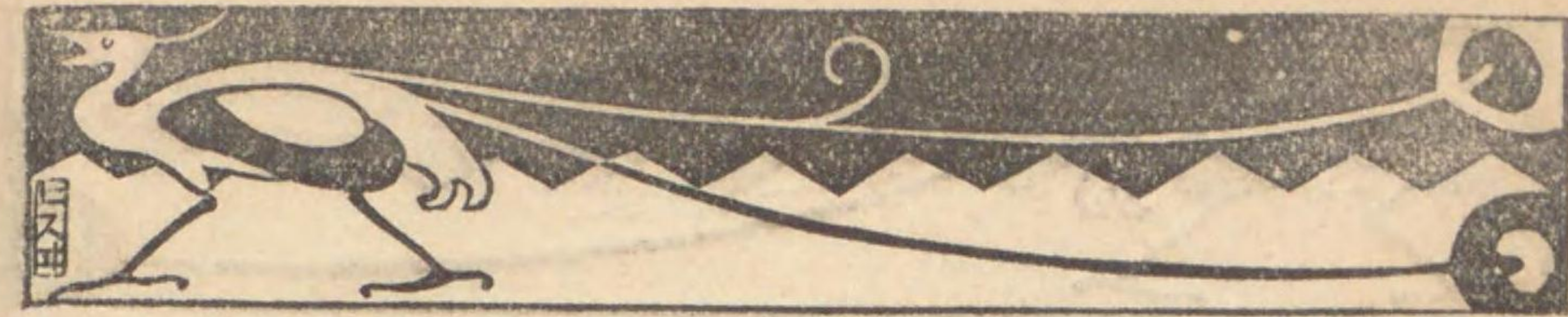
「こ、お側の御家來に云ひ付けなさいましたから、御家來  
は直ぐに御臺所の方へ、田舎娘を連れに参りました。

「程なく例の田舎娘は、御家來の者に導かれて、王様の  
御前へ参りました。

「それを見るに三の宮は、







「これこそ先程申上げました、龍の城に居た女で御座います。」

「ご云ひますから、王様は驚いて、」

「それがまた、如何してかやうな姿に成つたのぢや?」  
「ご云ふお尋ねです。」

「けれど三の宮は、」

「其の仔細は私も存じませんので、これは本人からお聞き下さいまし!」

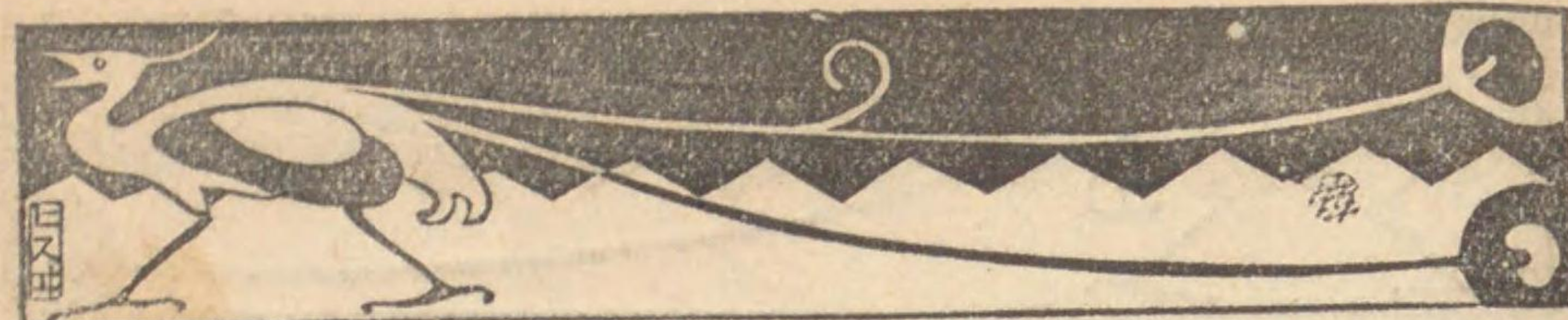
「それでは後に聞くとして、まづお前の話を続けぬか!」  
其の龍の城へ参つて、首尾好く黄金の鳥を取つて、それか

ら何う致したご云ふのぢや?」

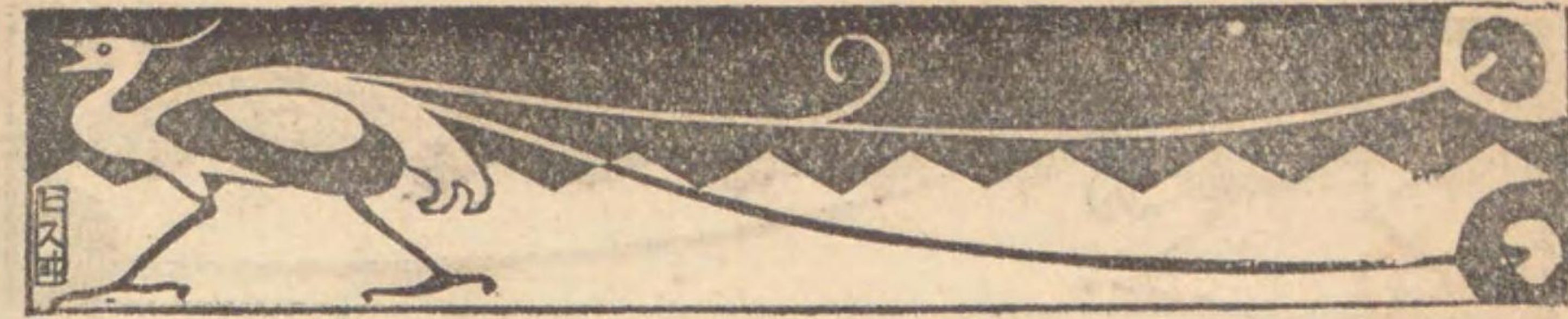
「ハイ、それから私は、其の黄金の鳥を捉まへた儘、急いで歸らうと致しますと、さア大變で御座います。——何時の間にか主の龍が、城へ歸つて來たものご見えまして、恐ろしい角を振り立て、口から火を吹きながら、私を追ひかけるでは御座いませんか?」

「ヤレあぶない! シテ何うした? 鬪つたか?」

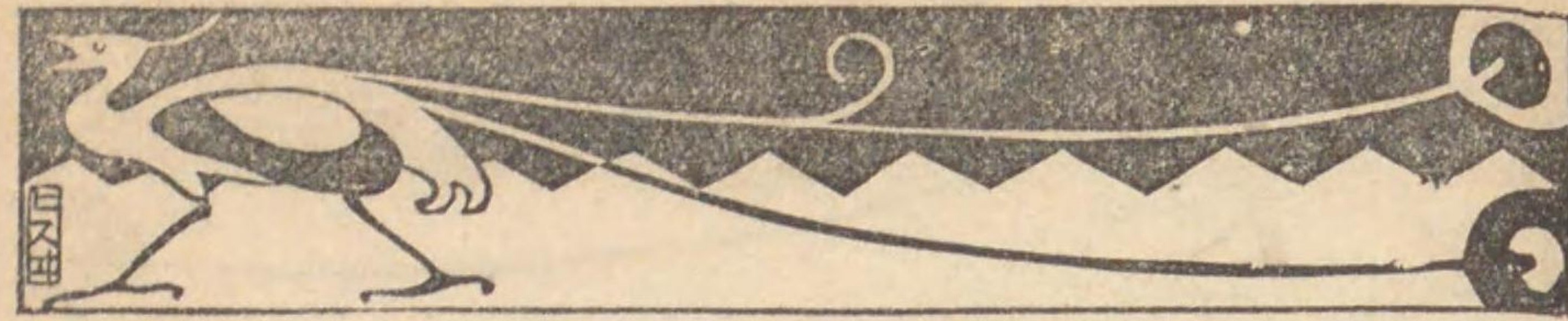
「鬪つてはごてもかなひませんから、私は一生懸命逃げました。——逃げてく、やつご同伴の居る所へ参りました。……ハイ、同伴ごはあの野狐であつた武士です。……」





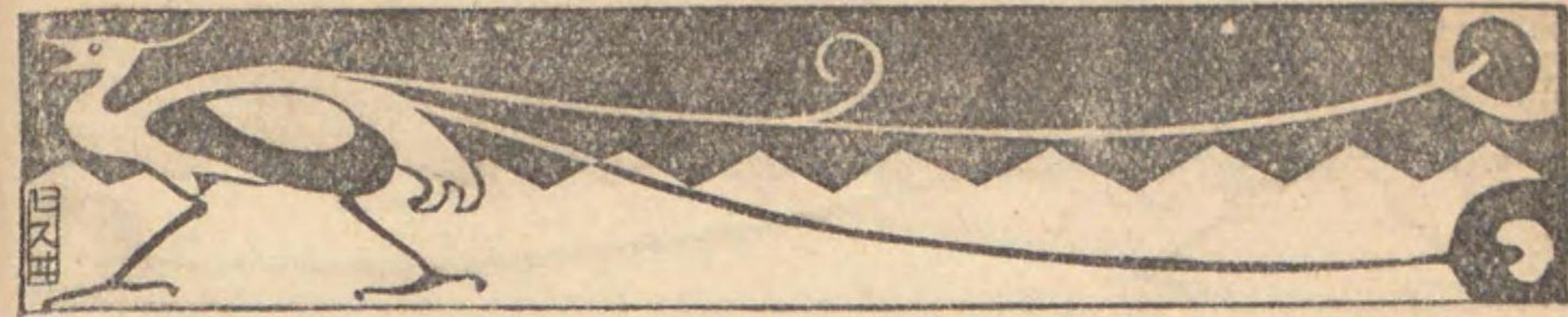


尤も後からは例の龍が、まだ追つかけて参るので、私は  
生きた心地も御座いませんでしたが、其の同伴のころ  
迄参りますよ、此の男は急に進んで来て、いきなり其の  
龍に向ひ、「止れッ！」と一聲叱つけたよ、思ふよ、急に静  
に成つた様ですから、變だと思つてふり返つて見ました  
ら、こは如何に其の龍は、其儘石に成つて居りました。」  
「はアて、龍まで石に成つてしまつたか。」  
「左様で御座います。其處でまア私は、命拾ひを致しま  
したから、この武士に禮を云つて、又一所に歸つて参り  
ましたが、其中に來かゝりましたのは、以前に通つた兄龍



の城で御座います。するよ其の門の處に、この娘がまた  
立つて居りました、私共を見るよ大層喜び、「オ、まア  
よく歸つて居らつしやいました。そして其の黄金の鳥も、  
よく捉へて來られました事！それでは此の間のお約束通  
り、私を連れて行つて下さいますか。」それは連れてつ  
てあげるよも「ご申しますよ「まア嬉しい事！それでは  
もう此所に用は無いから、いつそかうして仕舞ひまじや  
う」と、云ひながら鞭をあげて、ピシリと一つ鳴らした  
ご思ひましたら、何よ不思議では御座いませんか、今ま  
であつた立派な城が、小さな林檎に成つてしまひまし





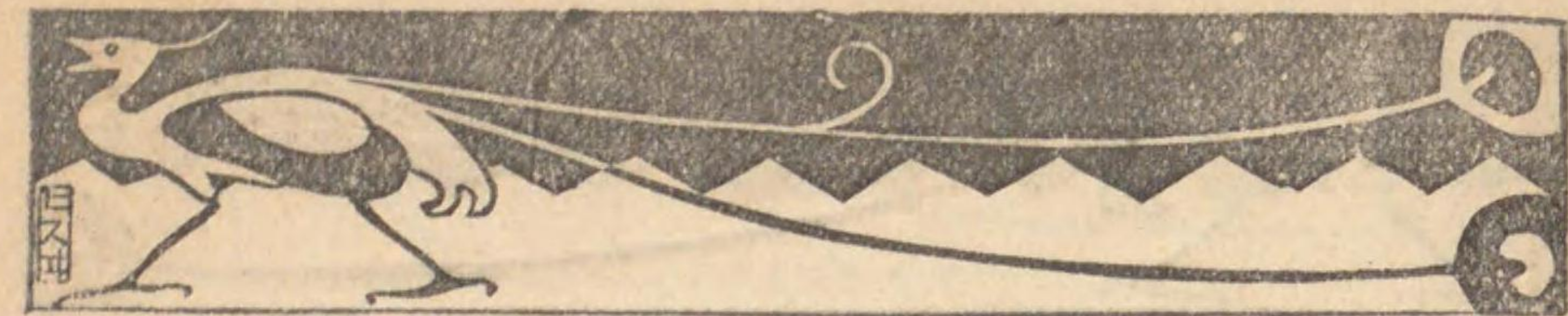
た。

「それは不思議だ、シテ其の林檎は何うした？」

「この娘が直ぐ取つて、懷中へ入れて仕舞ひました。」

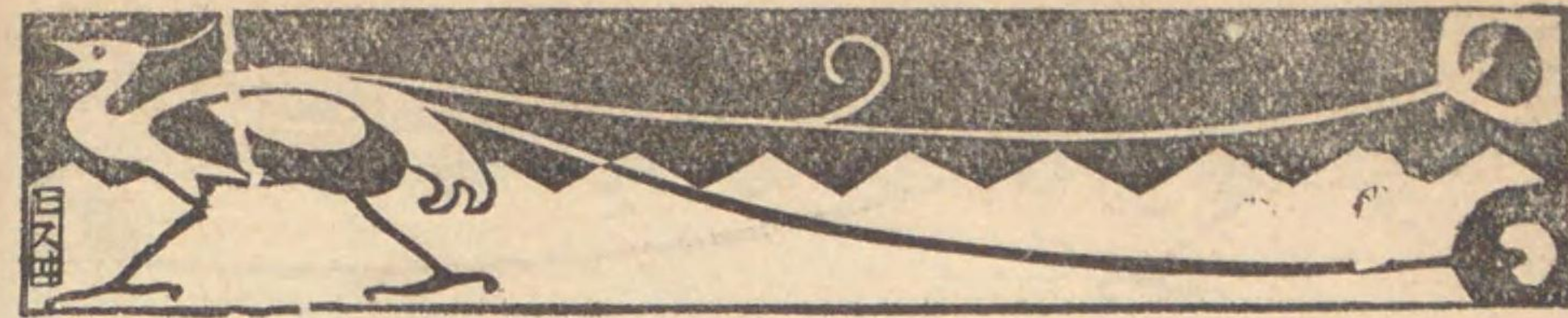
「はアテナ」

「そこで私は、この娘を一所に連れまして、また道を急ぎます中に、程なく初めに休みました、あの森に来かかりました。森は即ち同伴の武士の、野狐に成つて、出て来た所で御座います。するさ矢張り此間の通り、人間の形をした捨石が、其所に二つ御座いますから、私は武士に向ひまして、「全體これは何です？」と聞きましたら、



武士は笑ひながら「これこそお前の兄さん達だ」と申します。「エツ、何うしてまあ私の兄さん達が、こんな石に成つたんです？」と聞きますと、「それは皆な意地が悪くて、私に火も食物もくれなかつたから、それで石にしてしまつたのだ。」と云ひますから、「それでは私があやまりますから、何卒元の人間にして下下さい！」と頼みましたが、「イヤ、そんな事をするさ、後でお前が酷い目にあふから、いつそ此儘にしておくがよい。」と、なかく聞い  
てくれませんのを、私は漸く頼みまして、また元の人間にして貰ひました。尤も其人間に成るには、また妙なお呪

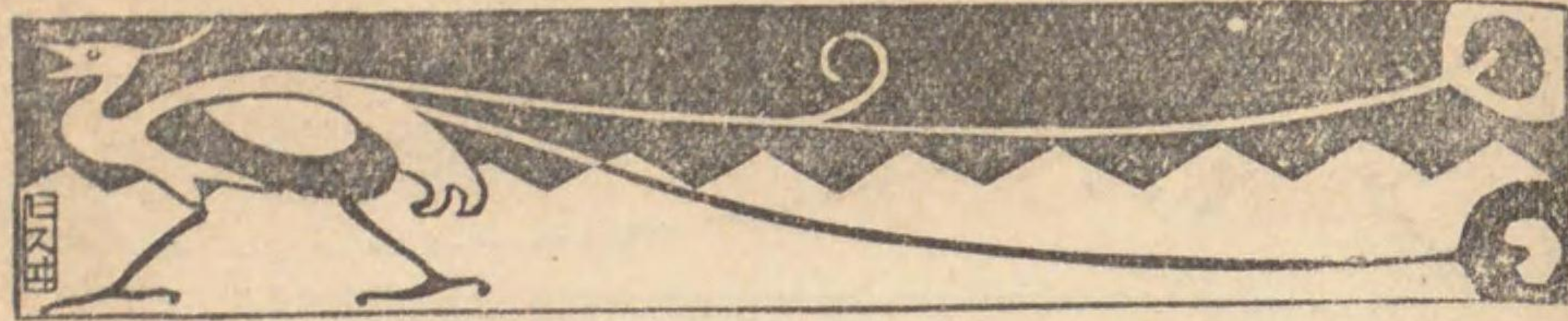




咀があつたのです。」

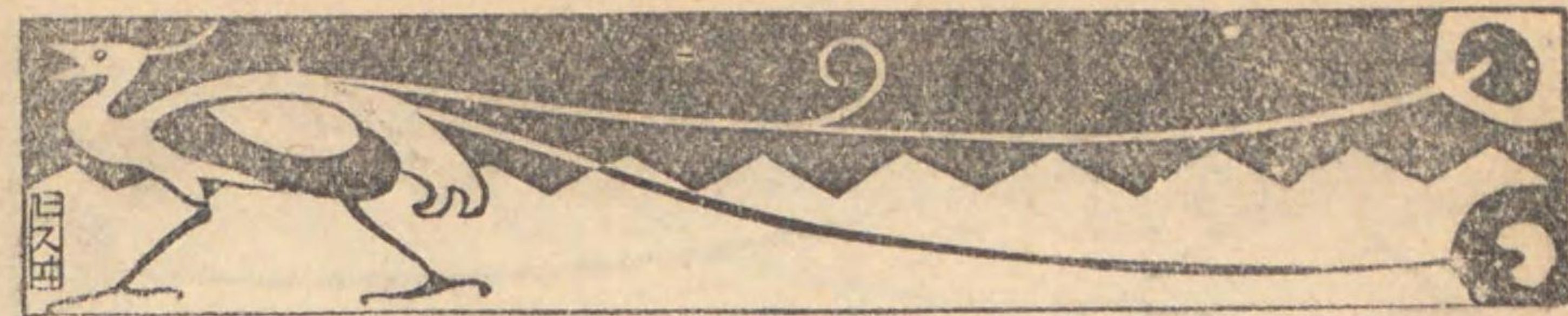
「それでは兄二人は、石からまた人間に戻つたのか？」

「はい。けれども初めは夢のさめた様で、只呆れて居りましたが、其中に理由が解りましたので、蘇生つた様に喜びまして、頻りに武士に禮を云ひましたが、武士はそれを耳にもかけず、私に許り挨拶して、其儘別れて仕舞ひました。——さてそれから私は、兄さん達二人と一所に成つて、又道を急ぎましたが、其時の私は、黄金の鳥は首尾よく捉へたし、兄さん達も捜しあてたし、こんな嬉しい事は無いので、只此上は一時もはやく、阿父様にお目



にかゝり、お喜びのお顔を見度いものだこ、その事はかり考へて、少しも他には氣が付きませんでした。するこ兄さん達は、其間に何か相談して居りましたが、やがて私を呼び止めて、先刻からあんまり急いだら、息が切れてならないから、何處かで水を飲まうぢやないか。こ、そこらをさがして池を見付け、その水を三人して、代るく飲みましたが、やがて私の番に成りましたから、池の側へ行つて四這になり、水に口をつけて飲まうこしますこ、だしぬけに足が痛く成りましたから、何かと思つてふり向きますこ、兄さんたちは亂暴にも、私の大切な二本の





足を、刀で切り落して仕舞ひました。」

「エツ、お前の足を斬り落した？そ、それは酷い事をしたもんだなア。」

こ、王様は吃驚なさいましたが、見るこ三の宮の二本の足は、ちやんと満足に付いて居りますから、また不思議に思ひまして、

「だが、その足は何うしたのだ？」

こ、お聞きに成りますよ、三の宮は答へまして、

「それで阿父様！私は二本の足を斬られました、何うする事も出来ませんから、三日三晩の間云ふもの、その池

の岸に倒れて居りました。——ハイ、兄さん達二人は、その間に黄金の鳥と娘を連れて、何所へか行つて仕舞つたので御座います。」

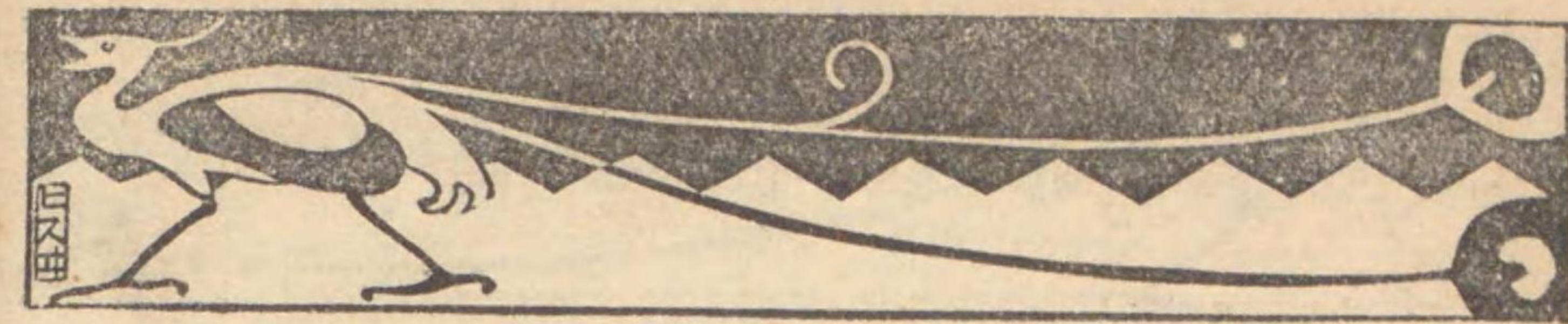
「ヤレ、酷い事をする奴等だなア！」

「するこそその四日目に、一人の盲人が來かゝりました。」

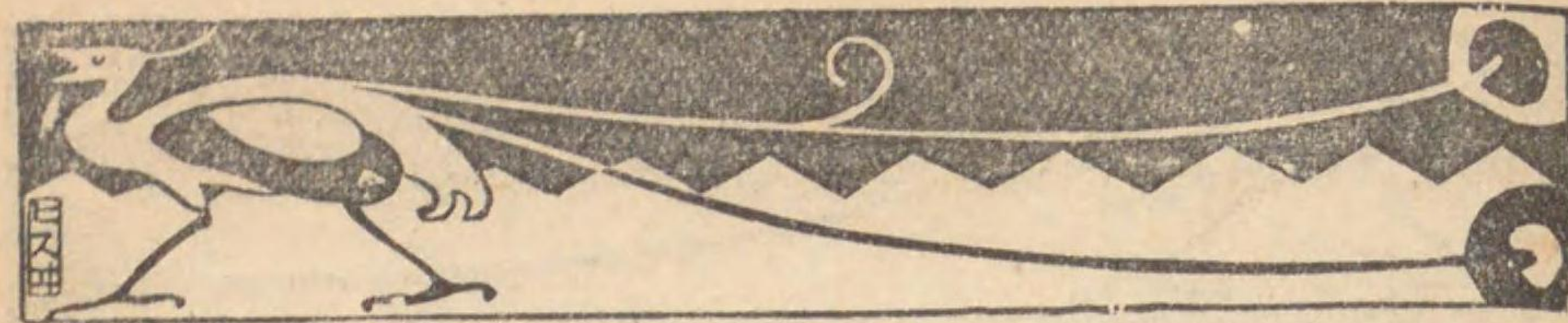
私は二本の足が無し、その人は二つの目が無いのですから、矢張り氣の毒に思ひまして、何うしたのだと聞きま

すよ、その人は話しますのに、矢張り悪い兄が居りました、自分より弟の伶俐なのを猜んで、眼を突き潰したと云ふ事です。」





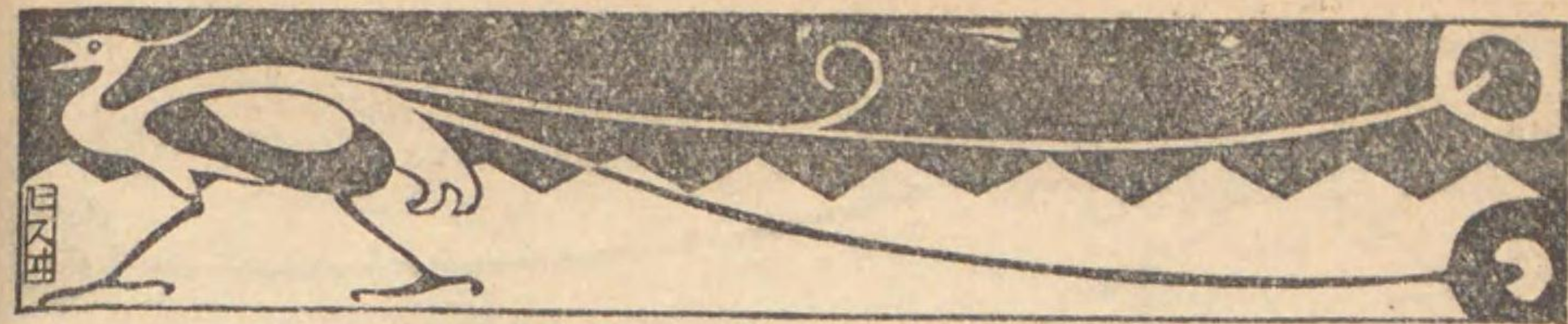
「世間には悪い兄弟があるものだなア。」  
「するこそその盲人は、また私に向ひまして、「なんぞ足無しさん！それではお前と私と、是れから兄弟分に成らうぢや無いか。で、お前は足が無いけれども、眼はぢやんご開いて居るし、また私はこの通り、眼こそ潰れて居るけれども、足は此通り達者だから、私がお前を負つてあげやう。さうすれば二人して、丁度一人前の働きが出来るぢやないか。所でこの池の近所には、大きな蟹が住んで居るが、其蟹の血で瘡を洗ふと、お前の足も元の様に立てれば、私の眼も初の様に見えるのだから、これから



その蟹の所まで、二人して出かけやうぢやないか」と、かう云ひましたから、私は喜びまして、直ぐ是から此盲人に負ぶさり、自分の眼で方角を極めて、まづ蟹の住所へ行つて見ました。所が初めは留守でしたから、先戸の側に隠れまして、今に蟹が歸つて來たら、突然切りつけてやらうと云ふので、其所に待伏せて居りました。所へ主の大蟹は、ノソく歸つて來ましたから、私は一生懸命に成つて、蟹の頭に切り付けますと、キヤツと云つて倒れました。」

「それはなかく強かつたナ。」





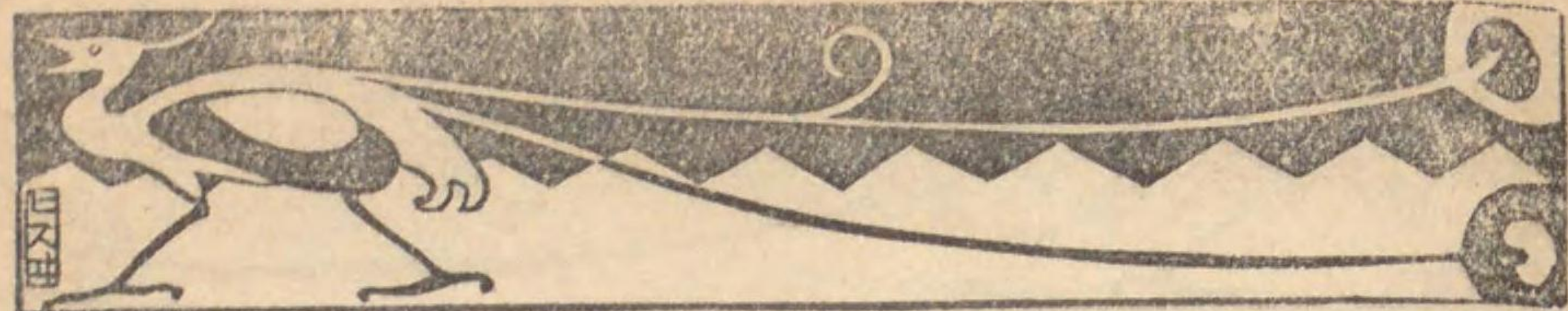
「イヤ、随分切を経た大蟹でしたが、思ひの外弱う御座  
いましたので、首尾好く斬り倒してしまひ、それからそ  
の眞赤な血で、一人こもよく瘡を洗ひましたら、何ぞ不思  
議では御座いませんか。その盲人は眼が見える様に成り、  
私も亦足が出来て、ちやんご立てる様に成つたのです。」  
「オ、さうか。それは何よりめで度かつたす。シテ、  
それから何うした？」

「それから私は、直ぐに歸らうと思ひましたが、何しろ折  
角捉へて來た黄金の鳥を、兄さん達に持つて行かれて仕  
舞つては、もう何うする事も出来ませんから、そこでこの

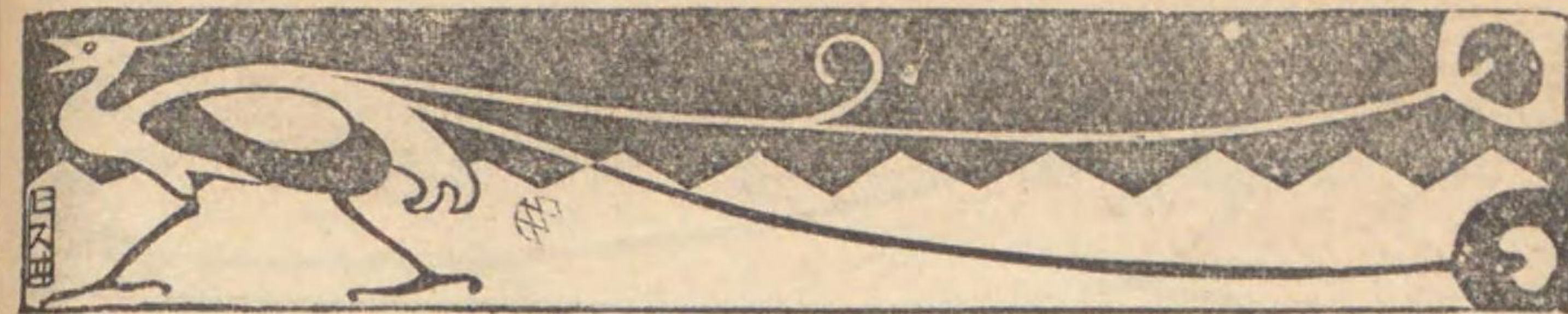
盲人であつた男と、一所に羊飼に成つて居りましたが、  
其中に黄金の鳥が、九重の塔に居る事と聞きまして、さて  
はあのまゝ、兄様達が、自分達の捉えた様な顔をして、家  
へ持つて歸つたのだナと、尙念の爲めに昨日も今日も、  
わざ／＼見に參つたので御座います。」

と、委しく話しますと、田舎娘は此時進み出て、涼しい  
聲で云ひますには、

「其後は私が、恐れながら申上げませう。さてお二人の兄  
様方は、この三の宮様の二本の足を、無残にも斬落して  
おしまひなさると、其儘鳥と私とを連れて、直ぐに御殿へ



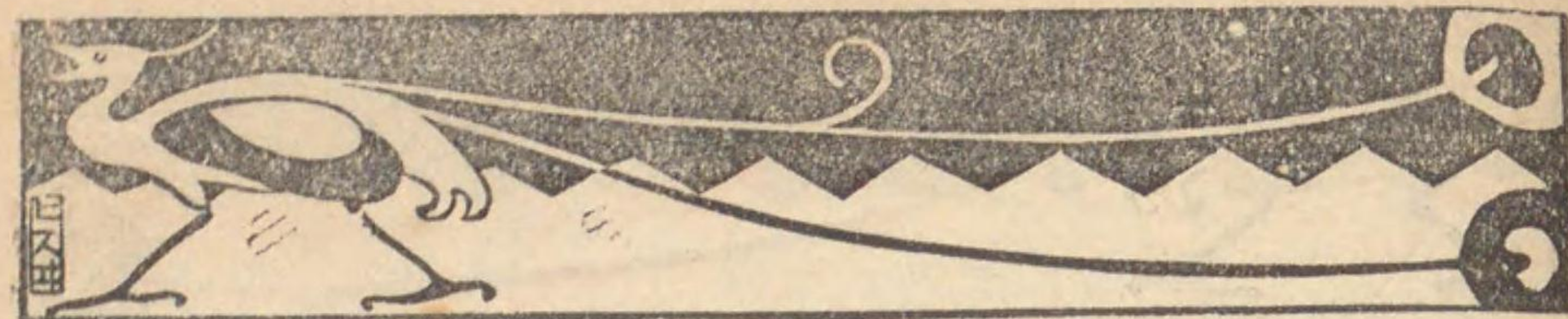




お歸りに成り、御自分達の悪い事は、まるで棚へ上げて仕舞つて、この黄金の鳥は、さも御自分達が捉えた様に、阿父様に申上げ、また私には、途中であつたいろくな事を、決して喋つては成らないと、厳しくお云ひ付けなさいましたから、仕方が無しに私は、かうして田舎娘の風に成つて、御奉公を致す事に成つたので御座います。ご申上げましたから、王様はまた、それではあの龍の城に居たのは、お前に相違無いのだナ？」

「はい、相違御座いません。その證據にはこの通り、先日

日の林檎を持って居ります。」



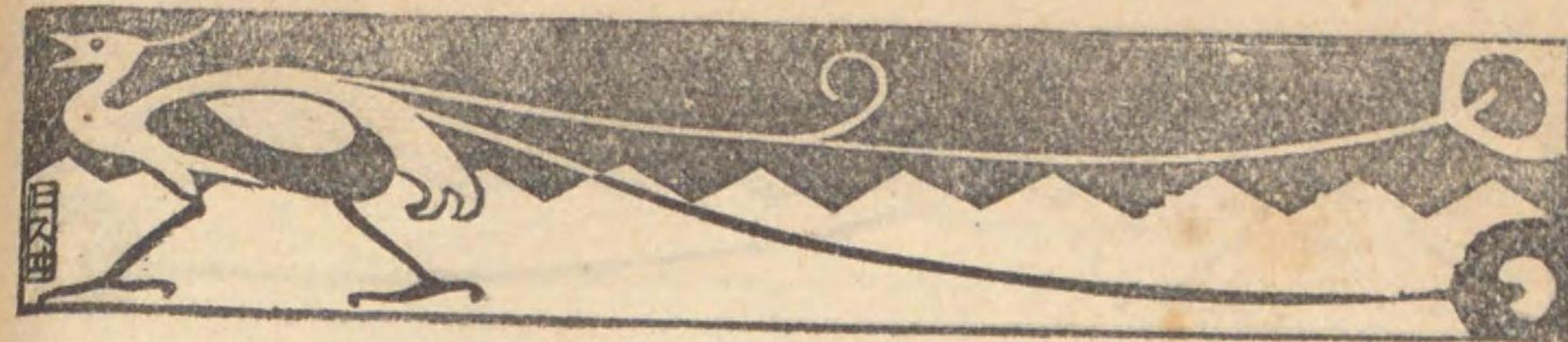
と、云ひながら懷中から、此間の林檎を取り出し、

「若しこの林檎を見付かりましたら、これも矢張り兄様達に、取上げられたかも知れませんでした。」

と、云ながら林檎に向つて、二度息を吹き掛けますと、こは如何にその林檎は、またもや以前の立派な城に成つて、王様の御殿の隣に、煌々として現はれましたから、王様は感心なさいまして、

「成る程これはよい土産ぢや。それでは三の宮！お前は此儘この娘を、お前の嫁に迎へ取つて、一所に此の城に住ふがよい。」





ご、有り難い仰せでしたが、また兄様達には、殊の外の御立腹で、

「其方達の様な、慈悲も知らず、弟の手柄を奪つて、親に偽を云ふ様な奴等は、もう此所に置く事成らんぞ。」

ご、厳しいお小言の揚句、ごうく御殿を追ひ出して、二度ごお側にお寄せなさいませんでした。

#### 第四 地上の天使

至つて貧しい寡婦ではありましたが、子供ばかりは

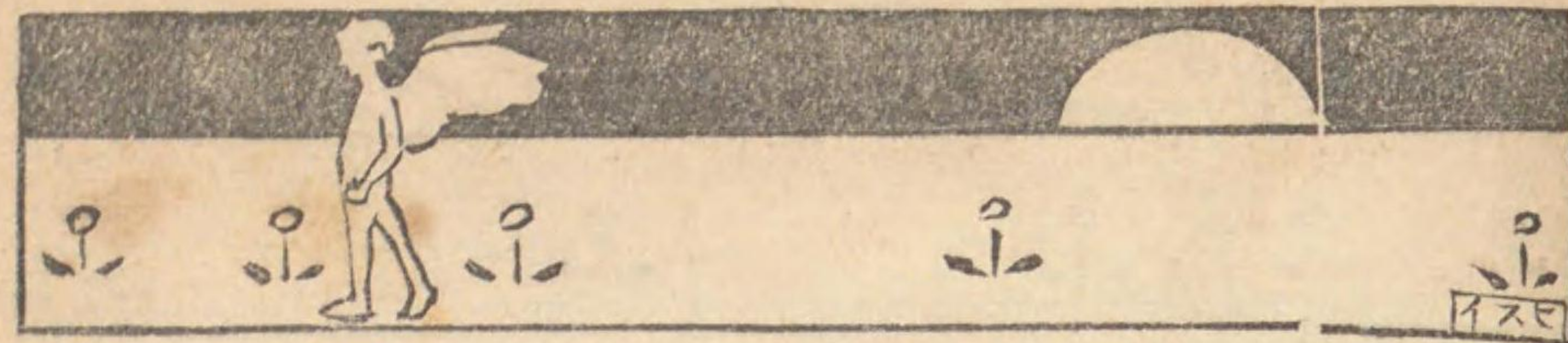
澤山あつて、やつご自分の手助けが出来のから、まだ乳離れもしない位のまで、都合七人も居りました。

所がこの寡婦は、急病で死んでしまひましたから、さアあごは大變です。

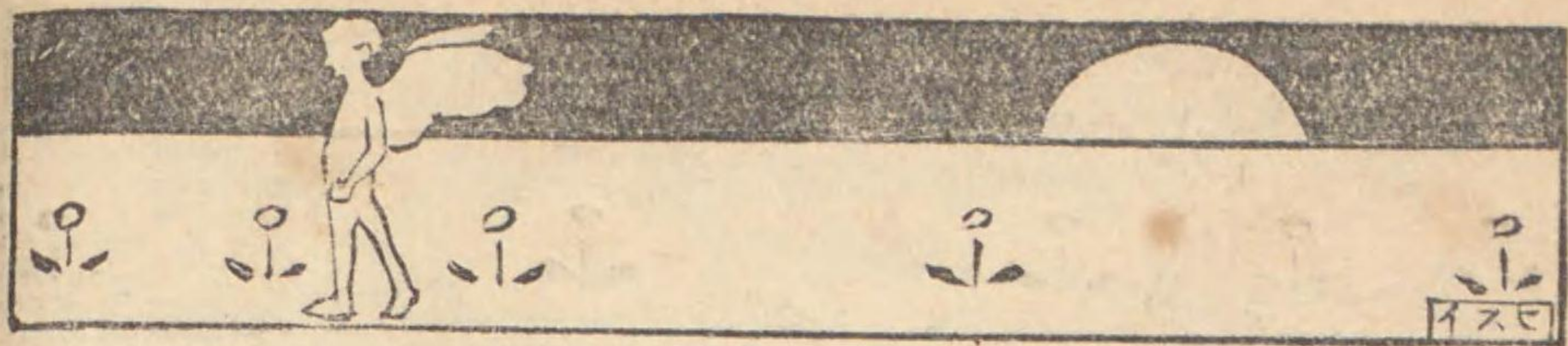
七人の子は、母の死骸を取りまいて、

「お母さん死んちやアいやだア。」

「死なゝいで生きてこくれよウ！」







「起きなくちやいけないよウ！」

「ほんごに死んぢまふなら、あたいたちも連れてつこくれよウ！」

と、肩にすがつてゆすぶるやら、手を取つて振り立てるやら、いろくくにして騒ぎましたが、母の眼は二度と明かず、躰は少しも動きません。

はては七人が七人とも、まるで狂人の様に成つて、ワア〜ワア〜、聲を限りに泣き立てました。

するご、此聲が天國へも聞えましたから、神様は一人の天使をお召しに成り、

「コレ〜太郎！彼所に寡婦が死んで居る様ぢや。お前は是から急いで行つて、あの魂をうけ取つて来い。そして残る子供達にも、よろしく恵をかけて来い！」

と仰有いました。

太郎と呼ばれた天使は、ハイと答へて其場から、可憐らしい羽根で飛んで、直ぐご下界へ降りました。やがて寡婦の所へ来ますご、汚らしい小屋の中で、七人の子供が、母の死骸に取りつき、正體も無く泣いて居ります。

太郎はそれを見るご、直ぐには中へ入り兼ねまして、しばらく戸口で聞いて居りましたが、中では子供達が又





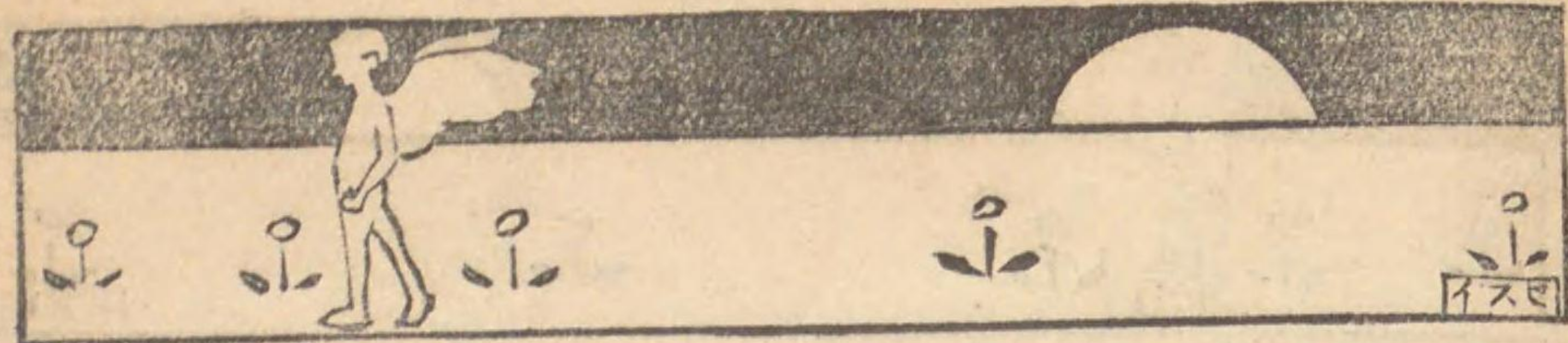
しても、

「お母さん死んぢやアいやだ。」

「もう一度生きかへつておくれよウ！」

と、口々に云つて居ります。

「さてはこの子供達は、今お母さんに死なれると、あ  
こで大變に困るのだな。私は實はあの寡婦の、魂を受取  
りに來たんだが、今魂を持つて行つてしまへば、再び此  
世に生きる事は出來まい。それに又神様は、この子供達  
に恵を施せと仰有た。恵を施せとは何の事だらう？……  
何しろあの子供達は、お母さんに死なれてしまふのを、あ



の通りいやがつて居る。して見るさあのお母さんを、も  
う一度生きかへしてやるのが、子供に取つては何よりの  
恵だ。さうだ、それが一番だ。」

と、かう思案を極めますと、急いで小屋の中へ入りまし  
た。

「コレ／＼子供達！もう決して泣く事は無いよ。私は神  
様のお使だが、お前達のお母さんは、また元の通り生か  
してあげるよ。」

と、云ひながら手をかざして、

「立てよ女！生きよ寡婦！そしてこの子供達の、心を安





めよ母親!

「三度ばかり聲をかけましたら、不思議や寡婦の閉つた眼は、またパツチリと明きまして、身を軽々と起すこ見れば、

「オ、皆おこなしく待つて居たねエ。」

「まるで餘所から歸つて來た様に、子供達を一々抱いてやりました。子供達は喜んで、

「ヤアお母さんが生きかへつた。」

「嬉しいなく!」

「また狂人の様に飛びまはりました。この有様にエン

ゼルも、

「ア、ほんごに善い事をした。子供達に施すには、この上の恵が又ごあらうか。これなら定めし神様も、御満足に相違無い。」

「得意に成つて其所を立ち退き、そのまゝ天國へ歸つて來ました。」

天國の神様は、太郎の歸りを待ちかねて、

「何うちや、寡婦の魂は受取つて來たか? 子供に恵を施して來たか?」

「お尋ねになりますから、







「ハイ、その魂は持つて参りませんが、その代りに子供達には、恵を十分施して参りました。」

「一旦死んだ寡婦をば、また其場で生きかへらせて、子供達を喜ばせた事を、さも手柄顔に話しました。」

「するご神様は、褒めて下さるご思ひの外、急に御機嫌が悪くなり、

「馬鹿奴！」

「ご、お叱りになりますから、太郎は驚いて、

「へッ、それでは間違ひまして御座いますか？」

「間違ごも大間違ぢや。たごひ母親は亡くなつても、こ



の神が居るからは、子供達の一生涯は、決して困る様にはせぬのぢや。見よ、空を飛ぶ小鳥、地を匍ふ虫殻に至るまで、皆それぐに住所を與へ、食物をも取らせるものを、何であの子供等ばかり、私が見すて、おくであらう。又あの寡婦の死んだのは、元より私の心である。母に死なれた子供等が、一旦深い悲嘆に沈むのは、神の心を知らぬからぢや。それぢやからお前をやつて、死んだ者の魂はうけ取り、生きる者の心は慰め、神の心のある所を知らせ、私の恵の及ぶ様によく取り計らはせる積りであつたのに、なまじ鼻先の小細工で、取るべき魂をか

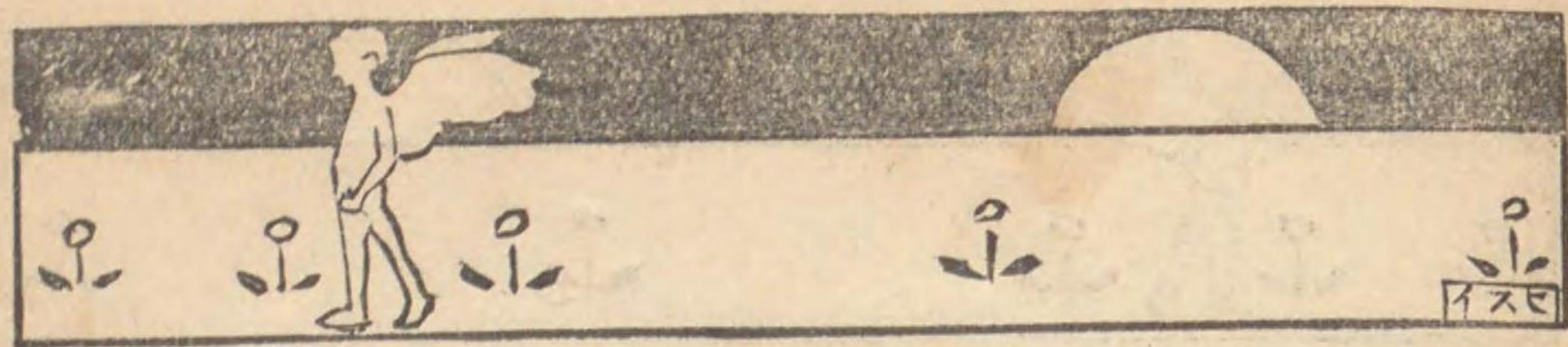




へすなぞこは、以ての外の大白痴ぢや。神の側に居りながら、神の心も知らぬ様な奴は、もう天國に用は無いら。天罰として今日からは、人間界に落してやる。さア直ぐに降りて行け！」

こ、太郎はとうとう神様から、背の羽根を取りあげられて、その儘天國を追ひ立てられました。

太郎は仕方ありませんから、其儘下界に降りましたが、間も無くその足で、ある牧師の所へ来て、僕に使つてくれと頼みました。これは今まで天國に居て、神様に使はれた縁がありますから、同じ事なら神様の教を説く、



牧師の側に居やうと思つたのです。

牧師は好い僕が出来たのを喜んで、

「何か給料に望みがあるか？」

ご聞きましたか、太郎は頭を振つて、

「給料も何も要ませんが、唯だお断り申しておく事があります。第一私は變り物ですから、ごんな人の前へ出て

も、決して帽子を取りません。第二にごんな事があつても、決して唾を吐きません。第三に如何なる場合があり

ましても、決して笑ふ事を致しません。それ丈何卒お含み下さい！」





と云ひます。

妙な癖の男だとは思ひましたが、別に差支える事もあるまいと、牧師はそのまゝ、使ふ事にしましたが、太郎は至つてよく働きますので、大きに重寶がつて居りました。所がある日の事、牧師は太郎を連れて町をあるきますと、彼方から立派な女が來ました。これは兼て知つて居る、大家の奥様でしたから、牧師は丁寧に帽を取りましたが、太郎は帽子に手もかけず、却つて脇の方をむいて、ペツ、と唾を吐きました。

今度は料理屋の前へ來ますと、中で大勢の客が聲をそろへて、さかんに讚美歌を唄つて居ります。牧師は眉を顰めて、

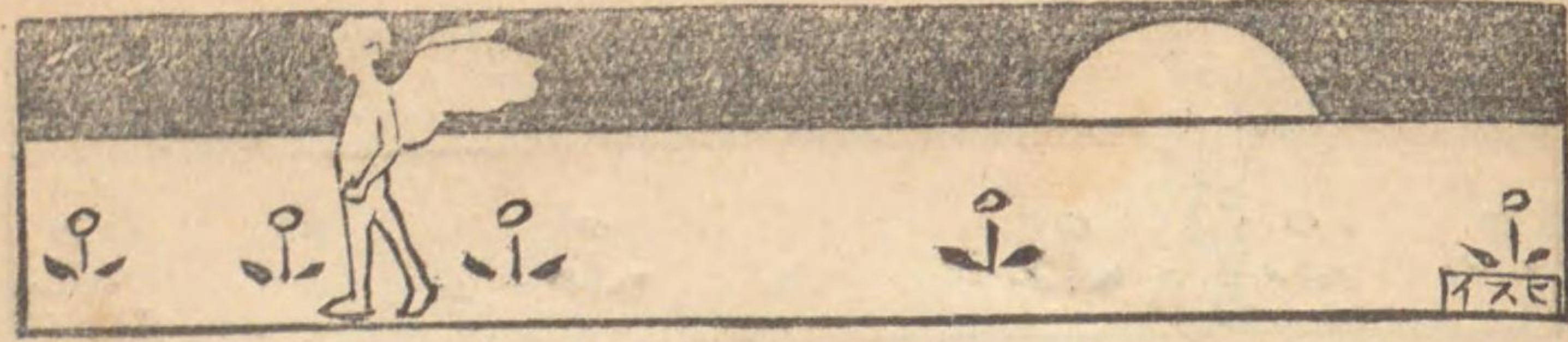
「教會でも無い所で！」

と、口の中で呟きましたが、太郎は却つて帽子を取つて、料理屋の方を向いて辭儀をしました。

變な事をする奴だと、思ひながら別に咎めず、牧師はやがてある靴屋へ來て、

「七年保つ靴をこしらへてくれ！」  
と詔へました。

これを聞いて居た太郎は、何故か急に腹を抱へて、ア







ハ、くご笑ひ出しましたから、牧師はごうく腹を立て、

「コレ太郎！お前は先刻から約束を破つて、唾を吐いたり、帽子を取つたり、又笑つたりするでは無いか。それは何うしたのだ？」

ご聞きますご、太郎は又眞面目に成つて、

「でも初に會つた奥様は、風俗は成る程立派でしたが、心が腐つて臭いから、それでつい唾を吐きました。次に聞いた讚美歌は、場所は成る程料理屋でしたが、歌は心から出て居ましたから、それで帽子を脱ぎました。又今の

靴屋では、貴君が明日も知れない身で、七年も保つ靴を誂へるから、つひ笑はずには居られなかつたのです。」

ご云ひますご、牧師はますく腹を立て、太郎を其場から追ひ出してしまひました。

するご天國の神様は、はやくも此事をお聞きになつて、「オ、太郎よく云つた。もうそれでよい歸つて来い！」ご、直ぐご勘當を免されて、又天國へお召し返しになりました。







第五 極樂園

昔々或る處に、一人の王子が在つた。此王子は誰も其右に出られぬ位、美しい書物や畫を澤山に持て居て、世界中のあらゆる事柄は、其書物や畫で、一つも残す知るところが出来た。然し只一ツ——極樂の有様だけは、皆無知るところが出来ず、これがまた王子には、一番残念に思ふ處であつた。

王子がまだ幼稚かつた頃、そして是から小學校へ上らうと云ふ時分、お祖母さんが手枕のお伽話に、極樂と云ふ







處は、實に善い處で、奇麗に咲き亂れて居る花は、皆な  
甘味いお菓子、又其葢から出る露は、皆な旨いお汁。右  
の方を見れば、讀本や歴史が開いて居り、左の方には、  
地理や博物の本が明けて在つて、其甘味いお菓子を喰べ、  
旨いお汁を飲みながら、ちやんと坐つたまゝで、學校の  
事も勉強が出来て、實に結構な處だ、こさも眞實らしく  
咄して聞かせた。それを王子は又堅く信じて居た。  
然し段々成長なつて、書物も讀み智恵も進むに隨つ  
て、まさかそれ等の事は虚構であらうと考へたが、また  
更に、他の結構な事があるに相違無いと、堅く執て動か







なかつた。

「さて其結構な處に、吾等の先祖は生れて出ながら、何故神様の禁制を犯して、智慧の果物を喰つたのだらう。若しそれが乃公であつたなら、そんな馬鹿な事は、怪我にも仕なかつたらうものを……先祖が失策つたばツかりに、吾々子孫が、罪の重荷を背負はされて、夢にも極樂を見るここが出来ない。こんなつまらない事はない。ト、常に此のみ嘆息して居だが、さて如何かして其極樂を、見たいと云ふ熱心は、日増しに熾んに成るばかり、はや十七歳に成つても、實に片時も忘れなかつた。

或る日王子は、只一人森の中に遊んで居た。蓋し王子は、森が一番好きなのである。

やがて日が暮か、つて來るこ、今まで晴れて居た空は、一面に墨を流したかと思はれ、見る／＼中に、雨は樋口を破つたやうに、降りか、つて、森の中は黒闇地獄、更に方角も解らなくなつた。

これには流石の王子も途方に暮れ、右へ行つては草葉にすべり、左へ寄ては岩角に蹠いて、只手さぐりで進んで行くこ、忽ち怪しげな洞穴の前へ出た。——見れば中には怪しげな一人の老婆が、焚火をして當つて居り、其上に







は鹿の片股が、串に刺して燻つて在る。此體態に王子も少し驚いて、只入口に亅んで居るこ、老婆はくやくもそれを見つけて、

「今の夕立はさぞ難義であつたらう。遠慮には及ばぬ、此家へ這入つて、其衣服でも乾かしなさい！」

こ、物和かに聲をかけた。

然し王子は尙遠慮して、

「此處で宜敷う御座います。」

こ云ひながら坐らうとするこ、老婆は又、

「イヤ其處に居ては、今に悴達が歸つて來た時に悪い、

何を隠さう、此處は風の神の洞で、私は風の神の母親、

また私の四人の悴は、此の世界を吹いて廻る、東西南北の

四方の風ぢや。」

云はれて王子は又驚いたが、さあらぬ體で、

「シテ其お兒さん方は、今は何處に居らつしやいます？」

「されば、今は何處ぞ吹き歩行いて居るこことであらうが、もうおつゝけ歸つて來やうと思つて、斯して鹿の肉を燻りながら、待つて居る所なのぢや。今に悴達が歸つて來れば、世界中の方々の話を、土産に咄して聞かせるであらう。お前が來合はしたは丁度幸ひ、其話を聞いて行く







がよい。随分面白いところもあるぞエ。……また悪戯をして  
 来た忤は、あれを御覽、あの袋の中に入れて、一日彼處  
 へ釣つて置くのぢや。これはお前達を母親が、云ふ事聞か  
 ぬ時の罰に、土藏へ入れること同じ事。そんなに暴れ廻は  
 った風の神でも、私の前ではグーの音も出はせぬ。……イ  
 ヤ噂をすれば影ごやら、アレ〜一人歸つて来た。」

云ふ間もあらず、寒氣肌に迫つて来て、雪を飛ばし霰  
 を散らしながら、忽然として現はれたは、是ぞ所謂る北  
 風の神。其行装を見てあれば、熊の毛皮の股引に、同  
 物の上着、水豹の皮の帽子耳まで掩ひ、髯には氷柱の瓔



珞を掛け、襟には霰の珠玉を綴つて、見るからが如何に  
 も寒さうなありさま。成る程これが北風かご、王子は感  
 心して打ち守つて居たが、やがて聲を掛けて、

「さぞお寒うございましたらう。サ早く此火にお當りな  
 さいまし！」

ご、云へば北風は、カラ〜ご笑つて、

「ナニ寒い？その寒いのが此方の快樂ぢや。シテお前さ  
 んこそ……ついに見慣れぬ小僧さんだが、一體何うして此  
 風穴へ來なすつた？」

ご、不審を入れるご、例の老婆は傍から、





「イヤ見慣れぬは道理。此は今夜初めてござつたお客様ぢや。無禮をするご前こそ、此袋へ入れるぞよ。何かの事は後にして、早く途中の物語をしなさい！」

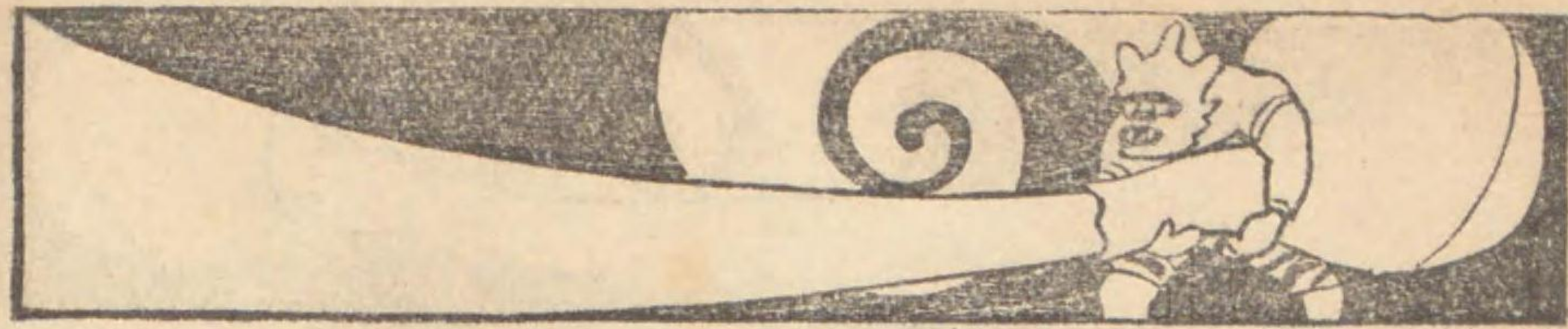
北風はまづ冷たい咳拂ひをして、さて云ふには、

「まづ私は、最初獵虎漁師の群に混つて、北氷洋の邊へさまよひ、其獵船の梶を枕に、暫時假寐の夢を結ぶ處へ、嵐鳥が大勢飛んで來たのでごうくその羽根の音も、折角の夢を起されては、又諸共に駈け出して、藁地に北極の氷の山へ吹き昇り、四邊の景色を見渡せば、聳ゆる峯は水晶の塔の如く、平らな谷は硝子の皿か疑はれ、草も木



も此處には無い故、更に緑の色は見られぬ。又彼方の谷間を見れば、雪を穿つて洞として、其處に白熊が棲んで居れば、又此方の岸邊には、氷の間に巢を作つて、中に水鳥の雛も見える。此等の景色を眺めながら、暫時息を入れて居る中、やがて向ふの海岸で、多くの人の呼ぶ聲が聞える。何事かと駈けつけて見れば、これこそ丁度一匹の海馬を、漁師ごもが打ち取つて、鳶口を其咽喉に掛けエイク掛聲をしながら、陸へ引き揚げて居る處故、此處ぞ一番野次馬に飛び込み、漁師共を驚かしてくれんぞ、やがて岩角を飛んで下り、一ト聲叫んで横合から吹きつける





ご、其勢に岸の浪は、高く揚つて氷を碎き、又山からは雪崩を卸して、見る／＼中に漁師共の、頭の上から掩ひかゝるに、漁師共は周章狼狽へ、海馬も鳶口も打ち捨て、蜘蛛の子を散らすが如く、右往左往に逃げ出した、其有様の面白さ！

ご、得意に成て物語るご、母は忽ち横合から、

「コレ／＼／＼、又其様な悪戯を。」

ご、云ひながら其手を取らうとするに、北風は周章て、拂り放し、

「まア阿母さんお待ちなさい、今のはほんの串戯。此外



によい事は澤山して來ましたから、何卒袋は御勘辨！」  
ご、云ひ紛らして居る處へ、西風が又歸つて來た。北風は喜んで、

「彼是する中に、ソレ西風が歸つて來た。今度は西風が

咄す番ぢや。西風も私と同じ様に、荒海や荒野を通つて

來て、嚙面白いことがあつたらう。」

ご、巧く胡魔かして、自分は袋の苦難を逃れた。

處へ徐々ご這入て來た若者は、是ぞ北風の弟西風、頭巾を以て頭を包み、亞米利加産のマホガニー(木の名の枝で作つた、棍棒を片手に提げながら、母に向つてまづ一





禮をした。

母はやがて聲を掛けて、

「西風、お前は何處から歸つて來た？」

と尋ねた。西風は居直つて、

「されば私は、人も住まぬ南亞米利加の、深林の中を吹

き廻り、漸く只今歸りましてゐります。」

「シテ、其深林の中で、お前は何をして來ました？」

「さて其深林の中を、彼方此方と吹き廻る中、只見れ

ば溪流の淺瀬に、多くの鷺鳥が戯れ居ること、一匹の水牛

それと見て、取つて喰はんこと泳ぎ寄れば、鷺鳥は恐れて



傍の、樹の枝へと飛んで上る。尙も下から水牛が、頸を

伸ばし脚を爪立て、角に掛けんことあせつても、所詮届か

ぬ可笑しさを、鷺鳥共は樹の上から、聲を揃へて嘲弄す

る、其有様の小面憎さに、此處ぞと突然梢の上から、ド

ツと許りに吹き下りること、不意を打たれて鷺鳥共、一羽

も枝に溜るものなく、皆バラ／＼と吹き飛ばされ、又水

牛に追ひ立てられて、右左へ逃げ廻はり、ガア／＼云つて

泣き叫ぶ面白さ！……」

と、咄し終つて誇り顔に、一坐の者を見廻はせば、母は

却て不興さうに、





「又しても其様な、悪い事許り……然しそれは鳥獸故、北風かせは罪も軽いが……シテ其外には如何な事を？」

「また其外には、荒れまはる野馬を吹き鎮め、好く熟した椰子の實を吹き落とし、其外種々の善い事をして、人に利益を與へたことは數知れず。それは今更云はずとも、皆お母さんが御存じぢや。」

こ云ひながら、母の膝へ取り付いて、

「ネエお母さん！」

こ甘へるに、母も小言の腰を折られ、其儘西風の頭を撫でて、居た。



斯る處へまた一人、土耳古帽子を阿彌陀に被り、亞刺比亞風の上着の裾を、左右に翻へしながら、勇ましく駈け込んで来た南風、門口から這りさまに、

「オ、寒いく、馬鹿に寒いく……イヤ寒いこそ道理、

北風奴がちやんと歸つて居よるワ。」

こ、云ひながら薪を取つて、頻りに火の中に燻べるこ、北風はまた身を除けて、

「オ、熱々！南風が歸つて来た所爲か、コリヤ熱くてたまらぬわい。此熱さでは白熊が焼けてしまふワ。」

「ハ、、、さては貴様は白熊か。」





「何を……」

ご、血氣の兩個は摺り寄つて、敦圀荒く争ひ合ふに、母は其間へ割て入り、

「コレ南風、何ぞしたものでや、歸るご直に喧嘩なぞして、お前は袋へ這入りたいのか、つまりらぬ喧嘩は廢止にして、お前の見て來た其事をば、早く話してしまふがよい。」

ご、母の警戒に南風は、其儘物語に取り掛つた。聽て南風は傍の、岩角に腰を掛け、熱い息をホツと吐きながら、

「私は今まで亞非利加内地に居て、土人の獅子狩を見物



して來ました。彼處は名にし負ふ熱帶國、緑なす草木は日光に照らされて、見下せばさながら油を湛へた如く。

又此方には例の大砂漠、見渡す限り茫々として、灰を撒いたに異ならず。其上を走り廻る駝鳥は、矢を射るやうに速いけれど、私はまたそれよりも速く、彼地此地吹き歩行く中に、只見れば向ふから、一群の商隊(隊伍)を組む商人が遣つて來た。私は暫時立ち止まつて見て居るご、彼等は咽喉でも渴いたご見えて、やがて一匹の駱駝を屠り、其水を取て呑み初めた。日は上から照りつけ、砂は下から焼きたて、其熱氣云ふ許りなく、彼等は堪え兼





ねてゐて居るのを、一つ驚かしてやらんものご、不意に立ち上つて砂を巻き揚げ、恐しい伸聲を立て、其商隊を巻き込みにかゝるご、彼等は驚き周章ながら、砂の中に顔を摺り込み、又は駱駝の腹の下に隠れて、只一心に念佛を初めた。私はいよく笑壺に入つて、何障える物も無い砂漠の中を、足にまかせて飛び廻り、躍り廻り、跳ね廻はる。其の面白さ心地好さは、中々今咄す位ではありません。」

ご、輿に乗じて物語るご、母は忽ち其手を捕へ、

「さてこそ容易ならぬ悪戯を仕よつた。堪忍ならぬ袋へ

這入りましやう。」

ご、云ひながら引き立て、詫び入る南風を袋の中へ、

無二無三に押し込でしまつた。

王子は此體態を見て、

「さてもく、皆恐ろしい息子さん方ぢや。」

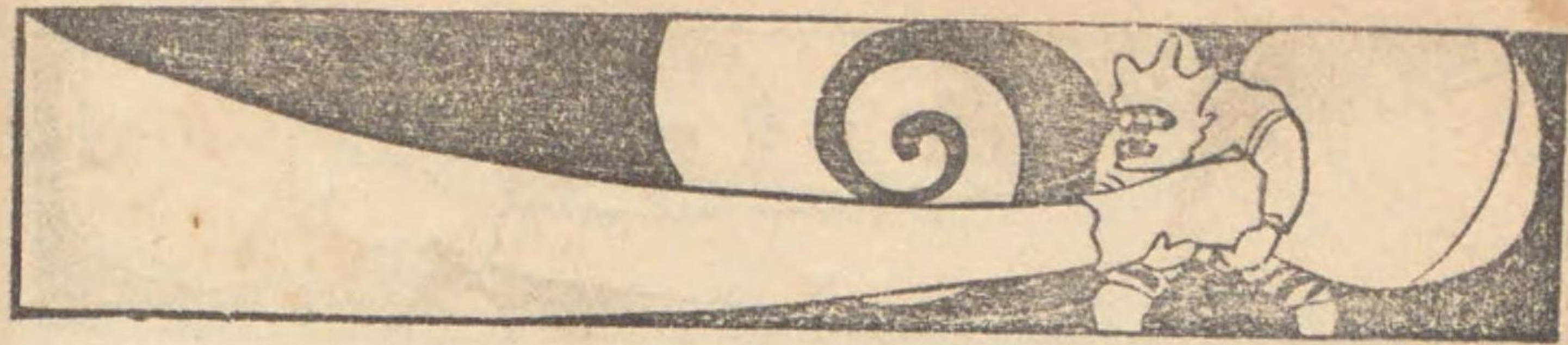
ご、舌を捲けば、老婆も額の皺を撫で、

「これも是も悪戯者で、世話許り焼かせて困ります。然し只一人の東風、彼許りは至つて温和しうて、此の婆々

の一番の氣に入り……。如何して今夜は遅い事か、早う歸つて來ればよいに。」







ご、つぶやき乍ら待つて居る處へ、第四番目の秘藏息子、東風はやがて歸つて來た。見れば頭から足の先まで、まるで支那人かと思はれる行装。顔も優しく姿もきやしやに、見るから温和しさうな美少年。王子も吾知らず膝を進めて、早く其近親に成りたく思はれた。

東風は徐かに進んで來て、まづ母に一禮をするご、母は、や眼を細くして、

「オ、東風、お前の歸りが晚いので、私は何の位案じたか知れませぬぞ。そしてお前は、一體今まで何處に居たのちや。大方樂園に遊んで居たのであらう。」

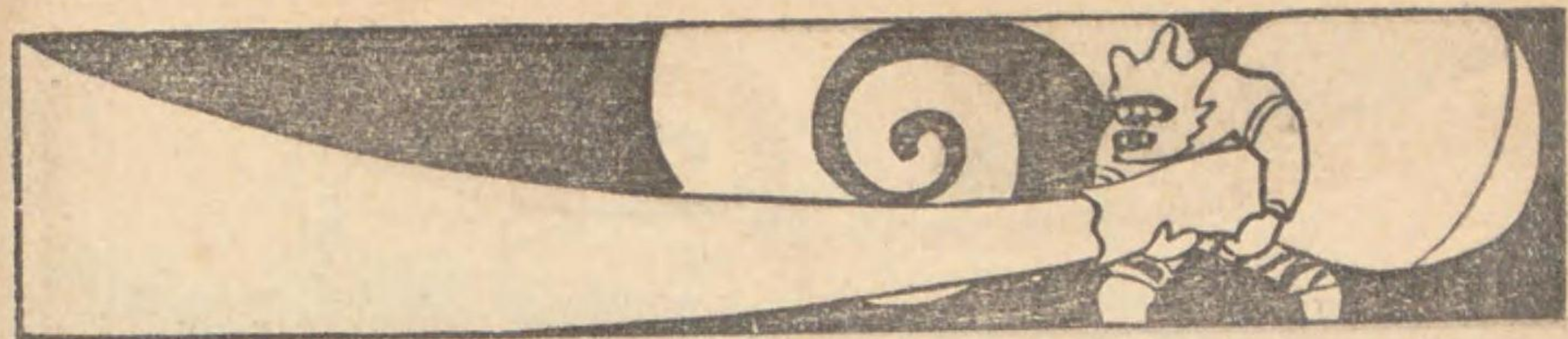
ご云へば、東風は首を振つて、

「イ、エ、其樂園には明日参ります心算で……今日は支那から参つたので御座います。」

ご、云ひながら坐を構へて、

「又支那許りでは御座いませぬ、日本ご申す國へも渡りました處、東洋にも名高い美術國だけに、三府五港の結構は申すも更なり、まづ山には富士、川には利根。松島、橋立、宮島は、日本でも三景ご稱へられる名所。日光には東照宮、伊勢には大神宮、是等は皆よい土産で御座いませう。」





「シテ其國では何の様な事をして来た。」

「まづ春の初めの事ゆる、霞を四方に吹き棚引かせ、それより山々の雪を吹き解かし、梅を咲かせ櫻を笑はせ、鶯を鳴かせ蝶を舞はせました程に、彼處の人々浮き立つて、昨日は東の山に杖を曳き、今日は南の川に舟を浮べて、それはく面白事許り。春の日永も飽くここでは御座いませぬ。」

「さも面白さうに物語るこ、母は手を拍つて嬉しがり、流石は東風、よい事をして来やつた。それに引かへ北風にも、西も南も皆悪戯許り、實に愛想が盡きた腕童共



「ちや。」

「皆々を尻目に掛け、やがて又東風に向ひ、

「さてお前は明日樂園へ行くとお云ひか。」

「さうでございます。」

「樂園へ行つたなら、何卒私にあの智慧の水を、土産に

取つて来て下されや。」

「ハイ畏まりました。ほんに土産と聞いて思ひ出しました。私は日本から、お母さんのお土産にご存じて、よい茶を取つて参りました。」

「云ひながら腰に附けた袋を取つて渡せば、母はますます





す喜んで、尙も東風を褒めそやし、至つて機嫌は好く見えた。

其時東風は、彼方に釣つてある袋に目をつけ、

「お母さん、あの袋には誰が這入て居りますか？」

「あれには南風が入れてある。亞非利加の沙漠で悪い事をした罰に、今ま入れてやつたのぢや。」

「如何な事をしたのか知りませんが、何卒勘辨して遣つて下さりませんか。」

「ウン勘辨しがたい奴ぢやけれど、お前の依頼なら許して遣りましよう。」

と云ひながら母は立ち上つて、南風を袋から出して遣れば、南風は嬉しさうに、再び以前の席に直つた。

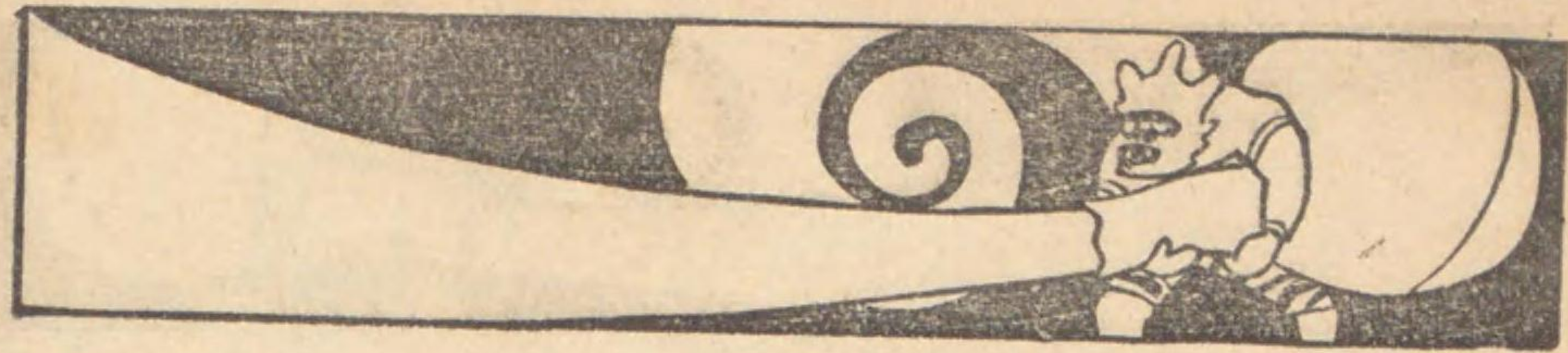
茲に兄弟四人が揃つた故、母は先刻の鹿の片股を、皆にわけて取らせ、また東風の土産の茶を入れて、睦ましく晚餐を喰ひ初めた。

王子は東風の談話の様子を、耳引立て、聞いて居たが、其の言葉の間に、明日は樂園へ行くこあるので、王子は羨ましくて堪へられず。果は吾から擽り寄つて東風に向ひ、

「卒爾ながら東風さん、今お咄しの樂園と云ふ處は、一







體如何な處で御座います？私は常から噂に聞て、一度は  
 行て見たいと思つても、何うも其便宜が無いのですが。」  
 と云へば、東風は聞いてニツコリ笑ひ、

「ハ、ア、郎君は樂園へ行きたいとおつしやるのか。な  
 るほごそれは殊勝なお志。幸ひ明日は私が行きます故、  
 一所に連れて行て上げましよう。然し彼處は御存じの通  
 り、アダムとエバが墮落した以來、人間と云ふ者は一人  
 も居ぬ故、其心算で行かなければなりません。尙難有  
 い事や立派な事は、中々談話に盡きないが、今夜は何分  
 疲れて居ますから、御免蒙つて眠るごしませう。郎君も



お寝みなさいまし。」

と、云ひつゝはや横に成るに、王子は後を聞き度いな  
 がらも、餘義なく其處へ草枕、夢はもう樂園へ浮れて行た。

\*

\*

\*

\*

\*

頬を掠める朝風に、王子は不圖眼を覺ませば、こは如  
 何に！何時の間やら吾身は、東風の背に負はれて、中  
 空高く舞ひ上り、東をさして走り行き。見下せば山も川  
 も、樹立も草原も、町も畠も皆眼の下、まるで地圖でも  
 見るかの様だ。

此時東風は王子を顧みて、

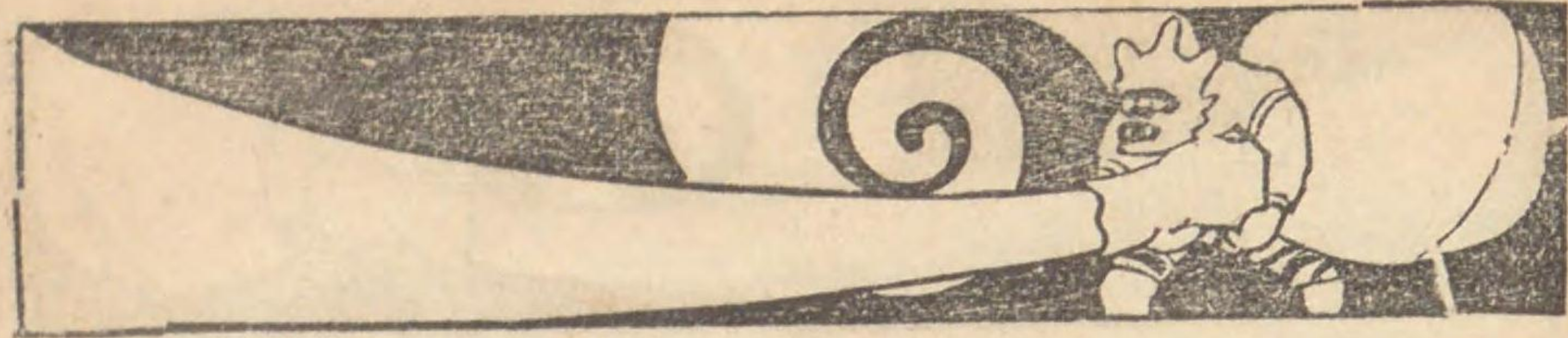




「もうお目覚めですか。お早う御座います。然しこんな處でお目覚めに成ても、まだ面白くも何ともありませんもう少し寝て居らつしやい！今に面白い處へ來たら、私が起して上げますから。」

「イ、エ、私はもう眠むかアないが、先刻は知らない間に此様な處へ來てしまつて、皆さんにお暇乞ひもせず、誠に濟まない事をした。」

「なんの郎君、寝て居る間は人も神、そんな事を誰が咎めるもんですか。安心して私の背中につかまつて居らつしやい。」



この間に少し脚を速めれば、空を行く事矢の如く、梢の鳴るに森を知り、浪の響きに海と思ふ。鳥は後じさりに飛ぶかと思はれ、船は浪にへばり付くかと思はれる。面白いやら氣味悪いやら、王子は只夢心地。

さて其日も漸く暮れて、四面も薄暗くなる處に、忽ち向ひの方に當て、螢の群を袋に入れた様に、キラ〜輝く火の光り、王子は見るより手を打つて、

「ヤア奇麗！奇麗！高い處へ來るこ、アレ星が皆な下の方に見えるワ。」

こ、身を躍らせて喜ぶに、東風は急いで制し、





「モシ／＼郎君、そんなに躍るご落ちますぞ！あれは星  
ごは違ひます。此處は印度の或る都、あの光りは皆燈火  
です。」

「ナニ都？燈火の光り？それでは星ちやア無かつたか、  
なんだつまらない。ハ、ハ、。」

「此處等で落ちては大變です。今が丁度ヒマラヤ山。郎君  
も地理書で讀んだ通り、亞細亞中で第一の高山、此處さへ  
越ればもう直です。確乎つかまつて居らつしやい！」  
ご、云ふに王子も一生懸命、もう直きに樂園か、此處で  
落ちてたまるものかご、東風の肩に確乎り取りつき、今

や遅しご待ちかまへて居た。

其中に東風は、ヒマラヤ山を越えたご見えて、稍下へ  
降りて南に向ひ、脚を少し緩めて進むほごに、何處ごも  
なく妙なる香の、徐かに王子の鼻を撲ち、胸も何ごなく  
清々ごして、云ふに云はれぬ心地好き。さてはいよく／＼  
樂園に來たなご、王子は飛び立つ胸を押し鎮め、まづ四  
面を見廻せば、名も知らぬ花、名も知らぬ木、錦の如く  
綾の如く、右に茂り左に咲き亂れ、又其間には、美しい  
葡萄の房が、滴りさうに實つて居るなご、聞しに優る其  
結構に、王子は只茫然たる許り。





東風は此處に脚を止め、まづ王子を背より卸して、  
「さア参りましたよ。」

こ、云ひながら其手を執り、徐々に進み行くに、王子は  
小聲で東風に、

「此處が樂園なの？」

こ、問へば、東風は答へて、

「イ、エまア少しお待ちなさい！もう直に來ますから。」

あれ御覽なさい。あの石門を！あの先は洞に成つて、葡  
萄の房が暖簾の様に下つて居ます。それから郎君上衣を  
よく着て居らつしやいよ。此處は此様に暑いけれど、今

に又寒くなりますから。」

「では此處は樂園へ行く道だね！」

「左様！」

聽て次第に洞の中へ進んで來ると、なるほど其寒いこ

こは！まるで氷室の中へ這入つた様。然しそれも霎時の

間。東風が此處ぞこ一生懸命に、温い息を吹くにつれて、

やがて其寒氣も薄らいで來た。

其中に洞は段々狭く成て來て、手足を縮めて匍はなけ  
れば行れぬかと思ふと、又次第に廣く成て來て、果は高  
い廣々とした場所へ出た。此時王子は又東風の袖を引い





て、  
「此様な處へ出て、今に樂園へ行かれるの？」  
と、氣遣はしげに尋ねた。

然し東風は別に返辭もせず、只前の方を指して示す故  
王子は其儘前面を見るに、さても其美しい事は！

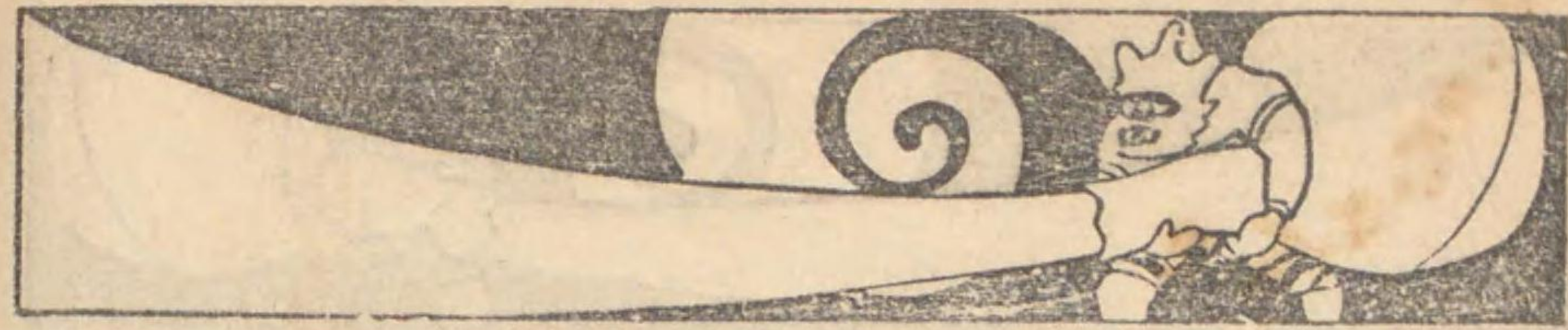
何とも云はれぬ立派な雲が、畫に書いた様に棚引き渡  
り、何とも云はれぬ美妙な香が、其間から風のまにまに  
送られて、其快よき魂も消える許り。また此方の泉水の  
中には、金銀の魚心地好けに波間に躍り、また彼方の山  
の上には、紅白の花今を盛りと咲き亂れて、其美しさ眼



も眩む許り。實に錦繡も及ばず、七寶も敵はぬ程の、此結  
構の中を、又少し進んで行くに、大理石で拵へて、雪を欺  
く橋があつて、それを渡ればいよく樂園の中心、所謂  
幸福島へ行ける様に成て居る。

兼て想像して居たことは、更に雲泥の差のある結構に、  
王子は夢路を辿る心地。魂魄も身に添はず、うろくくこ  
して四邊を見廻して居るのを、東風は勵まして其手を取  
り、やがて大理石の橋を越へて、幸福島へご案内した。  
此處は又以前に増して、目に觸れ耳に聞ゆるもの、一つ  
として娑婆では見聞きのならぬもの許り。鶯が一番聲の





美しい鳥と覚えて居たに、此處にはそれより聲の美しい鳥が澤山居り、牡丹が一番綺麗な花と思つて居たに、此處にはそれより綺麗な花が何程も在る。實に地に轉げて居る小石まで、瑪瑙か珊瑚許りである。また此外に眼を驚かす事は、あの恐しい獅子や虎が、此處ではまるで猫か小犬の様に、花に戯れ鳥に狎れて、牙も爪も何處にあるかご訝かる位。王子は只うつこりご見惚れて居た。

處へ此の樂園の神女は、何處にもなく現はれ出て、徐々々王子の前へ進み寄つて來た。見れば、年また若く、緑の黒髪背に垂れて、雪の肌花の顔。外面に無限の愛嬌



溢れて、内部に自然の威嚴備はり。背より御光を現はして徐かに歩行を運ぶ姿は、いかさま是ぞ生如來、有難味總身に染み渡つて、自づこ頭も下る様に思はれた。

神女はやがて近づいて來て、まづ東風に一禮をし、又王子に向つて、

『ようこそ來てくれた。』

と云ひながら、嬉しげに片頬笑んで、其儘其手を取り、やがて宮殿へ導いて行つた。

扱て王子は導かれるまゝに、宮殿に上つて四面を見渡すと、七寶の樓臺、珊瑚の廻廊、柱は金銀を鏤はめ、天井





は珠玉を刻んで、其結構畫にも盡されず。王子は只呆氣  
に取られるばかり。

と見れば、向ふの水晶の窓の外に、一本の樹があつて  
其下に、兼て本で見たアダムとエバが立て居る。王子は  
驚いて神女に向ひ、

「あれは私達の先祖、アダムとエバではありませんか。  
未だ此處に生きて居るのですか？」

と、訝かしさうに尋ねると、神女は少し笑ひながら、

「イエ、あれは眞實のアダムやエバでは無い。あの硝子  
は皆鏡で、お前達の世界中に、往昔から在つた事柄は、

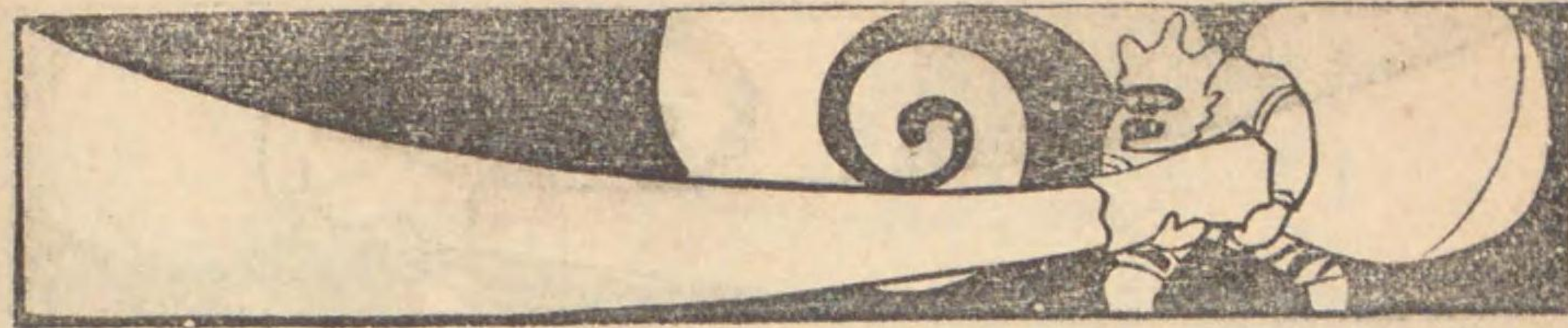
皆ちやんと寫つて居る、また此他に何程もある。此方の  
窓を一寸御覽！」

と云ふまゝに、次の窓を見るに、是は平常聖書の中で讀ん  
で居る、ヤコブの夢が其儘寫つて居り。天に架けたる階  
梯の四邊に、神使が嬉し相に飛び廻る處から、ヤコブが  
餘念無く寝て居る様子が、手に取る様に見えて居る。王  
子は思はず手を拍て、頻りに感心して眺めて居た。

(ヤコブの夢とは、聖書の中にある故事で、ヤコブと云ふ人が、ある時  
夢に天國へ昇る階梯を見た。是がキリストの世に出る前表で、キリスト  
は、即ち此世の人を天國へ上らせる階梯だと云ふ、皆西洋の口碑に傳は







つて居る事です。)

やがて又神女は、王子を立派な大廣間へ連れて來た。見れば其大廣間の中央に、枝の茂つた一本の林檎の木があつて、青々とした葉の間には、黄金の鈴の様な實が、今を盛りと熟して居て、それから桃色の露が滴り、さも甘味さうに見えて居る。例のアダム夫婦が、神の嚴命を犯して取て喰ひ、遂に墮落の罰を蒙つた、智慧の果は則ち是であつた。

神女は又王子を導いて、池の畔へ來て、

「是から船遊をしやう。今妾しよ一所しよに船ふねに乗のつて來れば、

世界中の國々は、何處から何處まで一時に見えて、好きな處へ遊びに行かれる。」

こ、云ひながら王子わうじと一所しよに、一艘そうの小舟こぶねに乗り移り、池の中程まで漕ぎ出すと、不思議にも池の岸は、見る／＼中に廻はり初めて、いかにも神女の云ふた通り、印度の海岸になるかと思ふと、亞非利加の森林に成り。埃及のピラミットが見えるかと思へば、やがて巴里の凱旋門が見え。ナイヤガラナイヤガラの瀑布ばくふが來れば、アルプスの高山も來る。北氷洋ほくひやうになるかと思へば、地中海ちゆうかいに成り。椰子やしの樹きが見えるかと思へば、氷塊こほりの山やまが見え。まるで走馬燈まはりとうを







見る様に世界中の名所古跡は、瞬内に眼の前に集まつて  
 来た、何處の博覽會へ行ても、何のパノラマへ這入ても、  
 所詮是ほどの名所は一度に見られず。縱令ひ風船に乗り、  
 鷺の背に負はれても、斯う方々へは廻はれまいと、王子  
 は一人興じて居たが、やがて神女に向つて、

「私は面白くつてく堪りませんが、何時まで居ても可  
 うございますか。」

と尋ねると、神女は笑ひながら、

「それはお前の心次第。アダムの様に嚴命を破つて、あ  
 の林檎を取りさへしなれば、何時までも此處に居られ



るのだよ。」

「では決してあの林檎を取りませんから、何時までも此  
 處に置いて下さいな。」

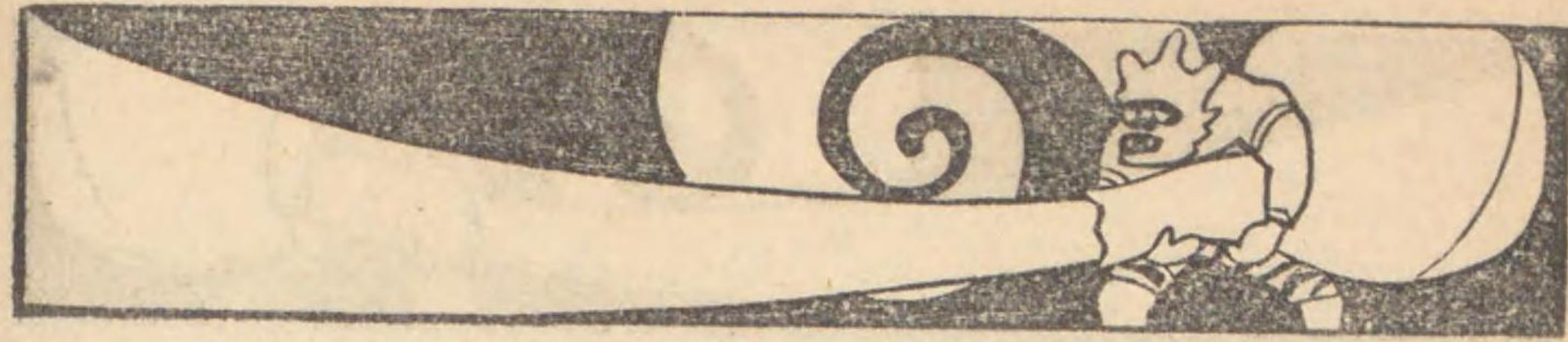
「それは何うでも可いけれど、歸るならば今歸らぬと、

もう東風が行つて仕舞つて、また百年経つた後でなけれ  
 ば、再びこの樂園へは來ないよ。また今から此處に居る

時は、度々試験を受けなければならぬが、それが皆辛抱  
 出来るか。出来るならば居ても可いが、もし其辛抱が出

來ないで、假りにも慾に目が眩み、其試験に負ける時は、  
 忽ち此處は荒野と成て、寒い風冷たい雨、それはく苦





しい目に會ふ。それでもお前は此處に残つて、其試験を  
受けるつもりか。」

こ、云へば王子は暫時も逡巡はず、

「それは何様な試験があらうとも、私は此處に居たうご

ざいます。」

こ、思ひ切つて云ひ放した。傍で聞いて居た東風は、靜  
かに其前へ進んで來て、

「それでは郎君はお残りなさるか。私はお先へ參ります  
ぞ。また百年目にお目に掛りましやう。御機嫌よろしう、  
さらば〜。」

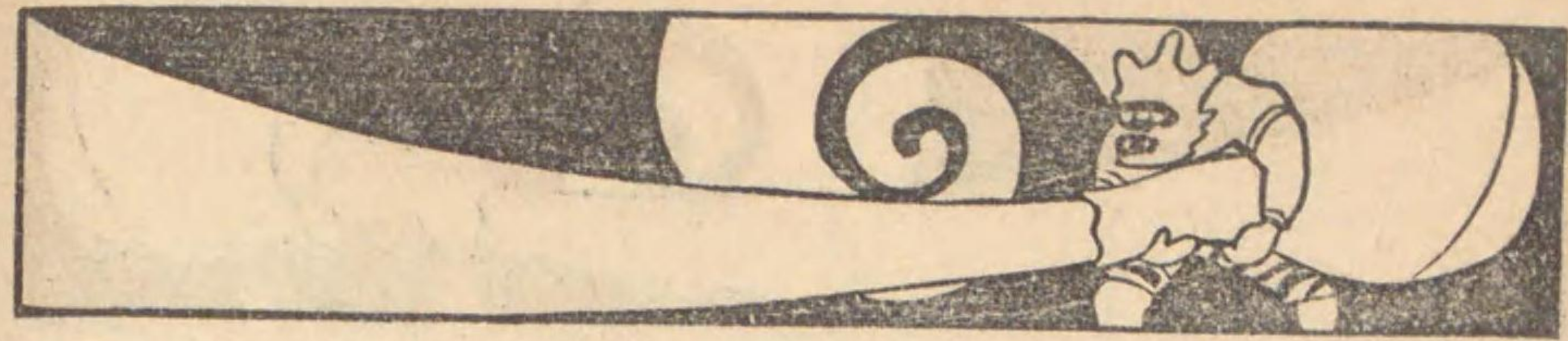
こ、云ひながら神女にも會釋をし、其儘翼を廣げたと思  
ふ間に、姿は消えてはや見えなかつた。

さて東風の歸つてからは、王子は只神女の後に尾いて、  
或ひは花壇を見物し、又は小鳥の群に混ぢつて、現の如  
く遊び廻はるほごに、其日も漸く暮れてしまつた。

さて夜に成つて見ると、夜の景色は又一入、美しい燈  
火の光は四面に映じて、實に眼も眩むほごであつた。

頬の肉も落ちる許りの晚餐の馳走に、王子は腹の破れ  
るまで喰て、立居も自由ならぬ程に成つて居るのを、神  
女は引立て、以前の大廣間へ導き、鐘を鳴らして侍姫を





呼び集め、王子一人を中へ取り込めて、面白い音楽につれて、やがてさかんに舞踏を初めた。

王子も初めの程は、音楽の面白さに浮かされて、侍姫共と一所に躍り廻はつて居たが、先刻飲んだ酒の酔が發して、果は足元もしごろに成りて、其場に堪えずドツカご伏せば、其儘前後も知らぬ高軒、揺り起されても一向正體は無かつた。

稍々あつて王子は不圖目を醒まして見ると、神女を初め侍姫共は、何處へ行つたか一人も居らず、自分は大廣間の真中の、例の林檎の樹の下に倒れて居るに、これは

と驚いて立ち上つたが、最前あまり躍り過ぎたのこ、一つは酒の醒め掛るのこで、咽喉が渴いて堪らぬに、何處ぞ其邊に水は無いかと、キヨロ／＼四邊を見廻はす時、誰とも知らず後から。

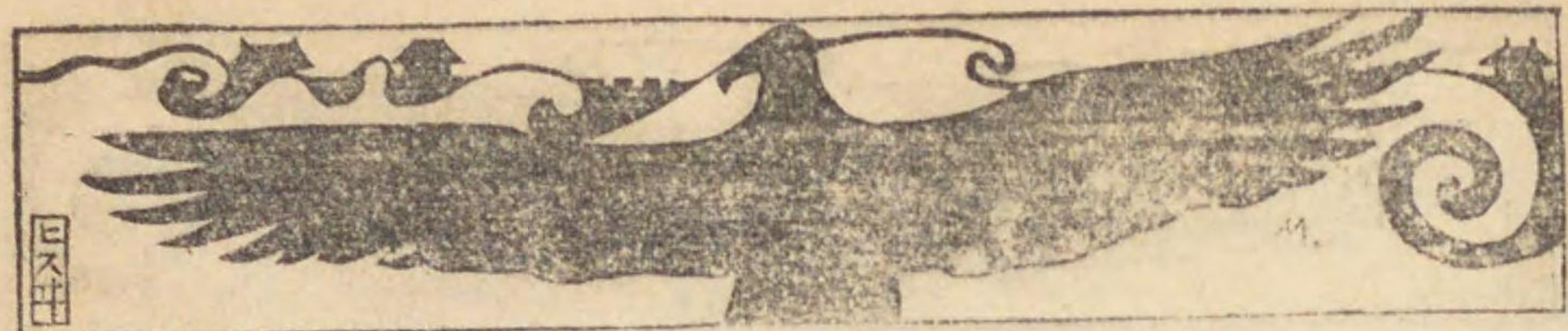
「オ、よい兒ぢや、水は私が上げやう。」  
と、云ふ聲に又驚き、振り返つて見れば人影は無く、只例の林檎の實が、自ら動いて招いで居る。王子は思はず引き返して、その林檎を見上る途端。ホロリと垂れた一滴、王子の開いた口に這入れば、其味甘露も何とも云はれぬに、今は神女の言葉も忘れ、飛掛つて一個もぎ取





り、一口齧めばあら不思議！大廣間は哦羅々々！哦羅々々！見る見る中に、粉微塵に碎け落ち、雨は盆を覆へし、風は地を捲いて、其物凄さ云はん方なく、王子は忽ち何者にか攫まれて、奈落の底へ投げ込まれた。

「ア、誤つた。さてはアダムの二の舞か。」  
 こ、云ひながら頭を起せば、自分は先きの森の中の、只ある木の下に雨宿りしたま、——さてこそ今のは夢であつた。



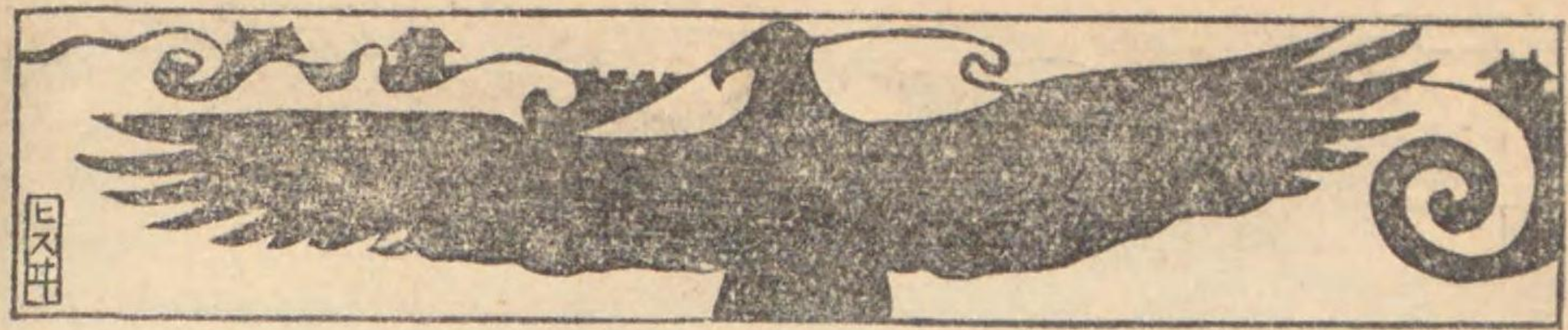
第六 三郎 鷲

ある山奥に、一羽の大鷲と、三羽の子鷲が棲んで居りました。

大鷲は毎日巢を出て、方々獲物を漁つて居りましたが、ある日何所で撃たれましたか、頸筋に大きな鐵砲瘡をうけて、片息に成つて巢へ歸つて來ました。三羽の子鷲は驚いて、

「モシ阿父さん何うしたんです？」  
 こ、三方から寄つて介抱しますと、親鷲は苦しい息を吐





きながら、

「今途中で樹に止つて、うつかり晝寝をして居た所を、獵師に一發やられたんだ！」

と云ひます。

「ナニ、獵師に撃たれたつて」

「憎い奴め、親の仇だ！」

「直ぐに行つてこの恨を……」

と、三羽の子鷺は羽叩をして、直ぐにも飛び立たうとあせりましたが、元よりまだ孵つた許りで、羽根もろくに利かない身の、何うして仇なんぞ討てましやう。只大き

な口をあけて、ギヤア〜啼き立てる許りです。

しばらくすると親鷺は、三羽の子鷺をジツと見まはして、

「イヤさう騒ぐ事はない。これと云ふのもこの鷺が、これほごよく利く羽根を持ちながら、人間の足の届く様な、低い山に棲むのが悪いのだ。と云つてもう私は、こんな深瘡を負はされて、とても生きては居られないが、せめてお前達三羽は、これからよく羽根を馴らして、何でも人間の手も届かなければ、鐵砲の弾も来ない位な、高い所へ巢を移してくれ！これがこの親の頼だ。」







こ云ふかと思ふ親鷲は、さうく死でしまひました。後に残つた三羽の鷲は、親の死骸に取りついて、暫時は只泣き崩れて居ましたが、漸うの事で氣を取り直し、やがて親鷲の死骸を、山かげの岩の下に埋めて、手あつくお葬をしました。

さて子鷲共は、これから親鷲の遺言の通り、毎日巢を出ては、山を越えたり、谷を渡つたり、しきりに羽根を馴らしましたが、ある時三羽は一所に成つて、親鷲の埋めてある岩の所へ、お墓参りに來た序に、いろくお話をはじめました。



まづ兄の太郎鷲から、

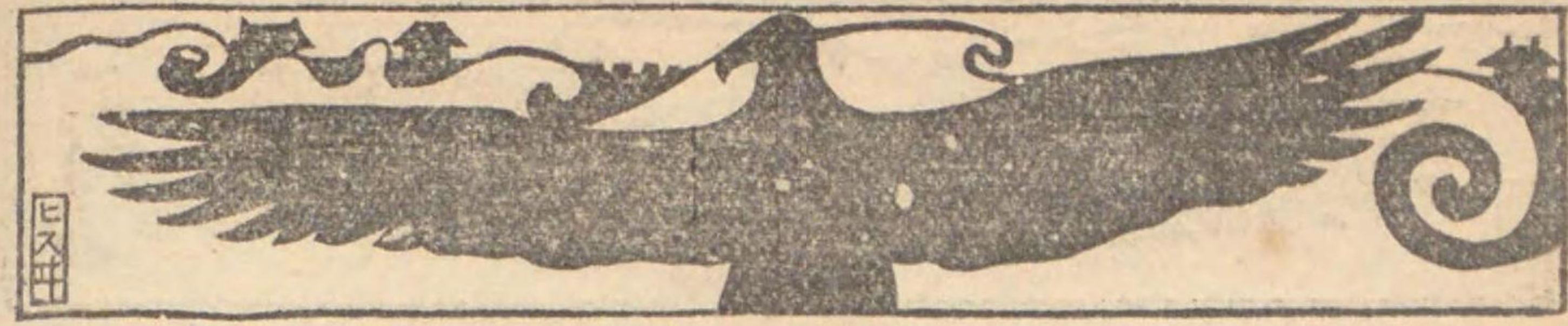
「時にお前も、もう大分達者に成つた様だが、これからお父さんのおつしやつた、人間の手も、鐵砲も届かない、高い所へ引越さうぢやないか。」

と云ひ出しますと、

「さうだく。私も此間からさう思つてたんだ。付いては兄さん、お前は何所が可いと思ふ？」

「人間の手の届かない所なら、今まで居る木よりも、もつこく高いく、それこそ世界一の高い木をさがして、その木に巢をくふのが一番だ。」



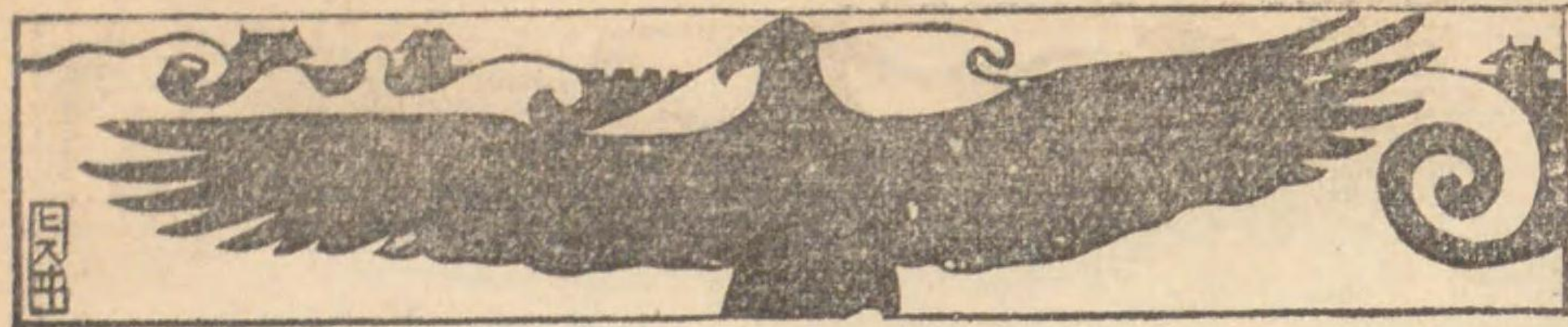


「そりやア駄目だよ、いくら高いくご云つたつて、木の生へてる所なら、人間だつて来られない事は無い。それより私は、木なんそのもう生へない様な、高いく山の<sup>上</sup>……それこそ世界一の高い山へ行つて、その頂邊に巢を作<sup>つ</sup>るんだ。」

「イヤそりやア駄目だよ。なんぼ高い山だつて、山なら人間が登つて来られる。木の頂邊には登れない。」

「なアに、木なんぞ低くつて駄目だ。山の方がよつぼご高い。」

「ご、こんな事を云つて喧嘩をはじめました。」



「お前何を笑ふんだ？」

「お聞きますご、三郎鷺は進み出て、

「だつてをかしいぢやないか。いくら高いの低いのご云つたつて、山や木はまだこの世界だ、この世界なら人間の足で、もう何所へでも来られるよ。」

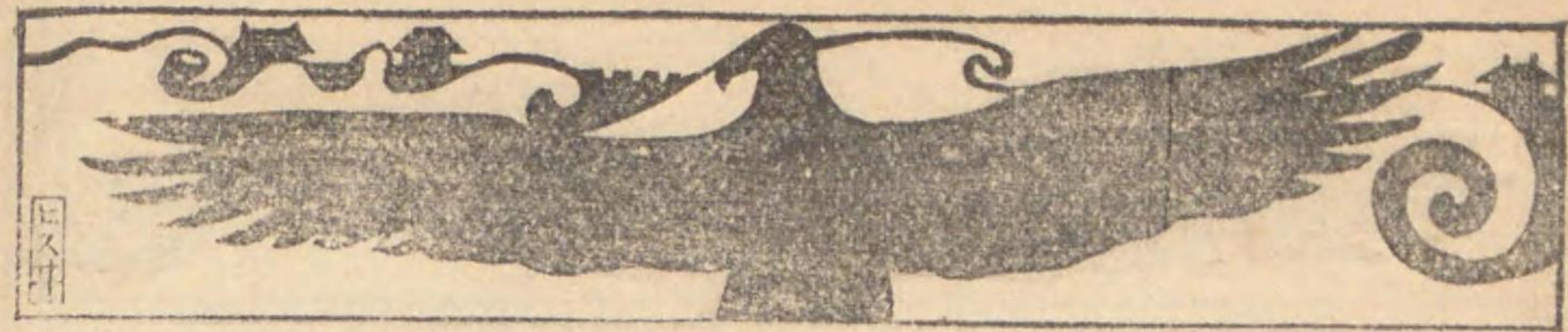
「そんならお前は何所へ行かうご云ふんだ。」

「私は人間の来られない、天へ行つて巢を作るつもりだ。」

「ナニ天へ？」

「馬鹿な事を！」





「こ、今度は二羽の兄の方が笑ひましたが、三郎鷺は眞面目なもので、

「何がそんなにをかしいんだ？」

「だつてあんな天なんぞへ、何うして登つて行かれるんだ？」

「此方の羽根さへ丈夫なら、天でも登れない事があるものか。」

「馬鹿な事を云ひなさい！天は何千里あるか何萬里あるか、數も知れない程高い所だぜ。」

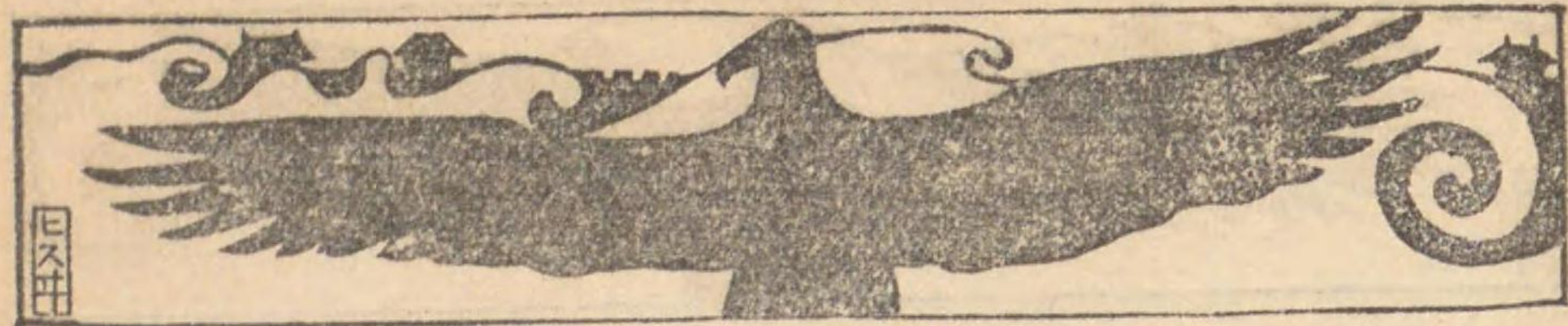
「ごんなに高い所だつて、行かうと思へば行かれるさ。」

「こ、兄達がいくら云つても、三郎鷺は登る氣で居ります。その中に相談が極まつて、

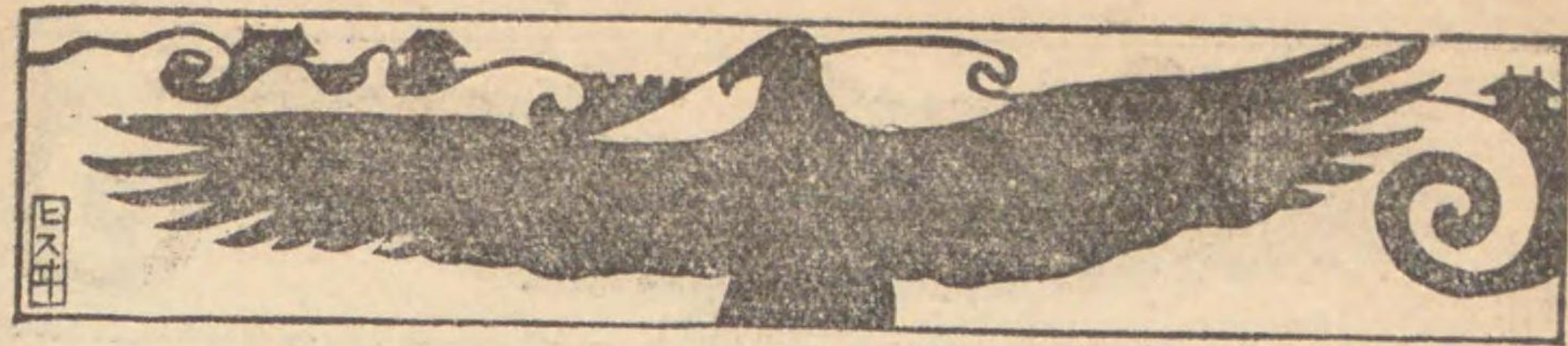
「そんならこれから斯うしやうぢやないか。兄弟三羽が別々に、高い木こ、高い山こ、それから天の三方にわかれて、誰でもはやく巢をつくつた者が、眞の兄になる事にしやう。」

「こ、これから三羽の兄弟鷺は、別れ／＼に飛んで行きました。」

「さて太郎鷺は、何でも世界中で一番高い木を探して、一番先に巢を作らうと云ふので、それからは毎日／＼、



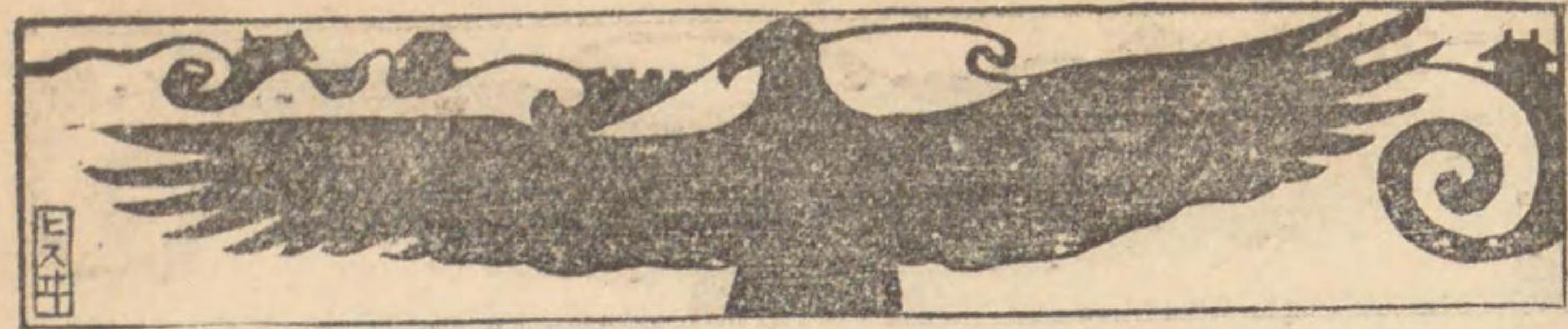




四方を飛んでまはつた揚句、やつこそその百日目、一番高い木を見つけ、その木の一番上の所に、自分の巣をこしらへて、大きに得意になつて居りました。

次に二郎鷲は、何でも世界で一番高い山へ行つて、その一番の頂邊に、巢を作らねばならないと、それから八方を飛んでまはつて、これも百日目には、やつこそ一番高い山を見つけ、その頂上の岩に止まつて、これも鼻を高くして居りました。

この時三郎鷲は、何でも羽根さへ丈夫なら、天まで飛べない事は無いと、上の方を志して、毎日く飛んでく、



はや百日も飛びました。

けれど天には届きません。

その時雲の間から、不圖下を見おろしますと、遙く

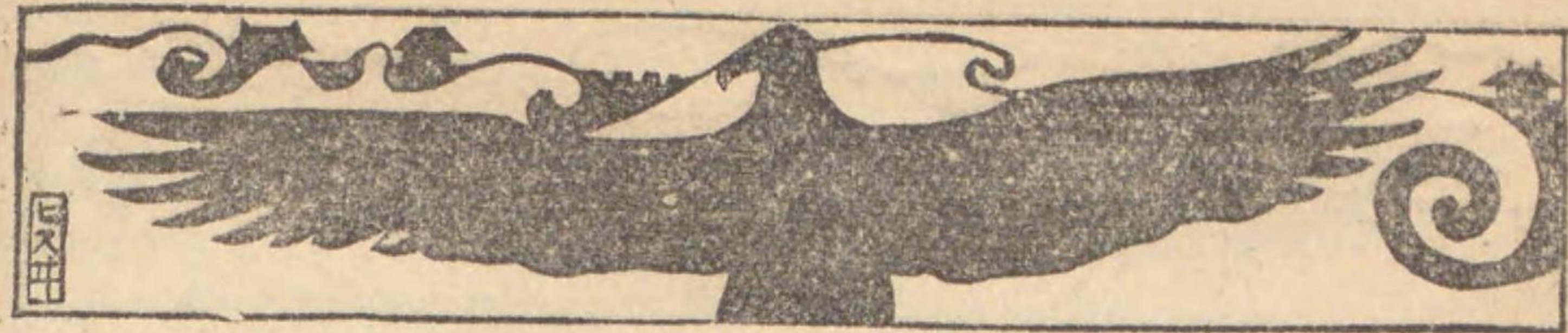
下の方の、木の頂邊には太郎鷲が居り、又此方の山の頂

上には、二郎鷲がちゃんこ止つて居ります。

それを見るに三郎鷲は、

「何だ兄さん達は意氣地が無いなア。あんな低い所に居て威張つてらア。それから思ふとおれなんぞは、よつばご高い所に來て居る。よし、そんなら天まで行かないでも、此邊の雲に居て澤山だ。」





ご、獨語を云ひながら、側にあつた雲の上へ来て、羽根を休めて止まらうごしますご、雲は忽ち底がぬけて、アツミ云ふ間に三郎鷺は、まるで線の切れた凧同様、眞逆様に地上へ落ちて、その儘氣絶してしまひました。その物音を聞きつけて、太郎鷺ご二郎鷺は、急いで飛んで来て三郎鷺をおこしそれからいろく介抱して、やつご息を吹きかへした所で、

「それ見なさい、云はない事か！及ばん事を思ひ立つて天なんぞへ登らうごするもんだから 罰が當つて落こちたんだ。」



「もうそんな馬鹿な眞似はしないで、おれ達の巢へ來るがい。食客に置いてやらう。」

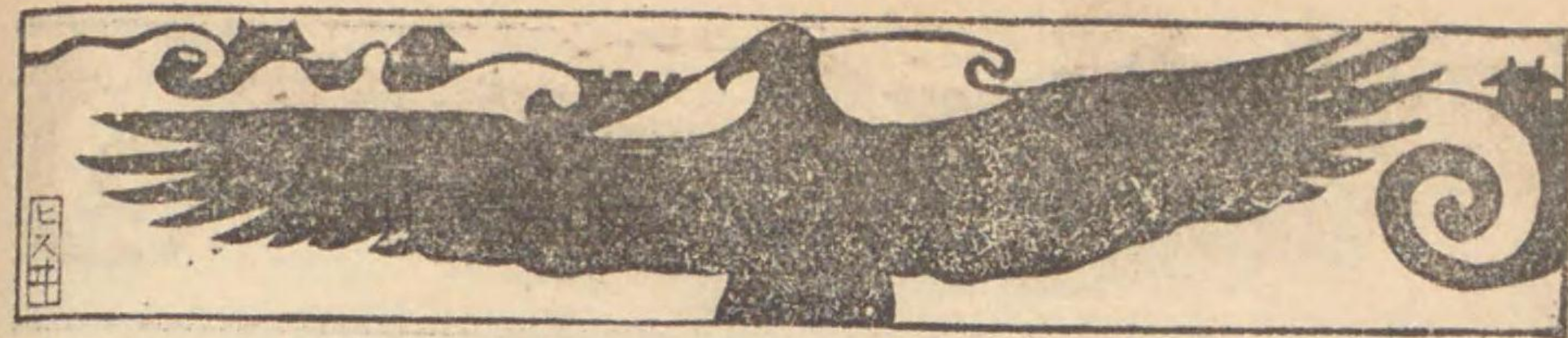
ご、馬鹿にしなから云ひましたが、三郎鷺はまだ聞きません。

「イヤ、うつちやつて置いてくれ！私は何でも天へ登るんだ。」

「まだあんな事云つてるな。こんな目に會つても懲りないのか。」

「ナニ、懲りない事はないが、それは側見をしたから悪かつたんだ。今度は何んでも一生懸命、上ばつかりを目





的にして、きつと天へ登つて見せる。」

「アレ、まだあんな強情を云ふ。そんなら勝手にするが

い。」

こ、兄鷺二羽は行つてしまひました。

その後で三郎鷺は、十分羽根を直した上で、また天へ登りはじめましたが、此前は天へ登るのに、なまじ途中で下を見て、あゝ高く来たなと思つたものだから、忽ち油断をして落ちてしまつたんだ。目ざす所は上の天、そこさへ一圖に見て居れば、下なんぞ見る用は無いのだこ、一心不亂に上を見つめて、しきりに羽根を動かしました。

所が天はなかく高く、行つてもく届きません。けれども三郎鷺は一生懸命、まだかくこ我を勵まし、飛んでく飛び通しますこ、さうくその百日目に、立派な金色の門の前まで来ました。

するこそその門の中から、可愛らしい子供が出て来て、

「オ、三郎鷺よく来たナ。」

こ、手を取つて迎へまして、そのまゝ神様の前へ連れて行きますこ、天の神様も三郎鷺の、今までの苦勞を賞めて、御褒美を下さいましたが、それから後は三郎鷺は、此所に巢を作る事を許され、二羽の鷺の兄ばかりか、鳥仲





間の王として、天と地の間をば、自由に飛びまはれる様になりました。





其七 法螺旅行

私も今までは色々諸方へ行って見たが、其中に月の世界へ行つたところが二度ある、今日は其話を仕やう。

私が土耳其に居つた時、土耳其の王様から、蜜蜂の番人を仰付かつた。蜜蜂には能く色々な虫が付いたり、又獸類が食べに来るが、殊に熊は甘い物が好きだから、能く蜜を取りに来る。其番人を私が吩咐つたので、力が強いものだから、王様から銀の立派な斧を授けて下された。それを持つて私が番をしてゐるこ、或日果して大き



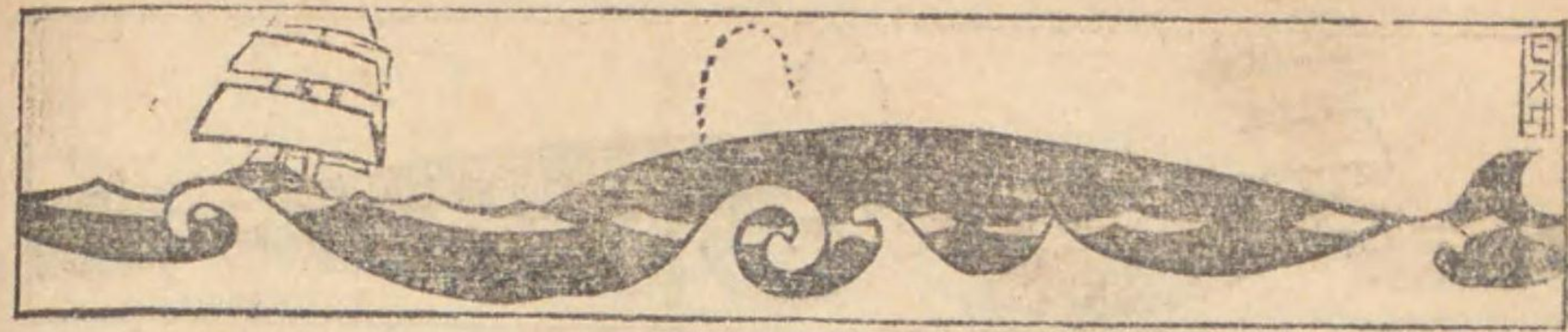


な熊が、蜜蜂を盗みに来た。處が生憎其時は、大分間が隔つてゐたから、私が駈けて往つたら、熊の方が逃るに違ひない。ソコで持つて居た斧を、一杯に熊に抛付けた。抛附ると、宜い鹽梅に熊の背中到的中つたものだから、熊は驚いて逃げて仕舞つた。所が餘り私の力が強いので、熊の背中へ當つた弾力に、斧が何處へか飛んで仕舞つた。それから一生懸命になつて探したが、何うしても分らない。何時まで経つても知れないから、これは愈々もうこの世界には無い。そこで考へて見るに、地球に一番近いのが月の世界。彼處へ行つたに違ひないから、是は月の

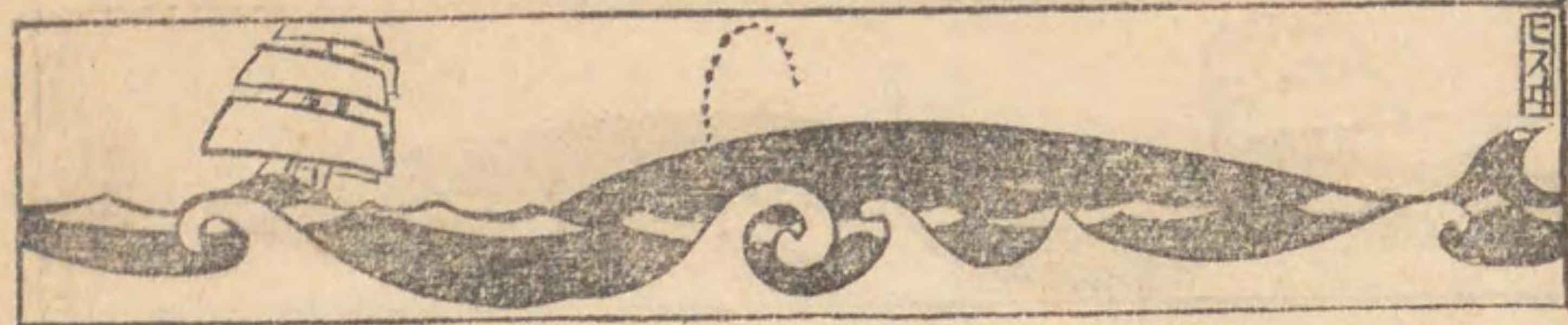


世界まで探しに行かなければならぬ。若かし私には羽も何も無い。未だ其時分には風船も出来て居ないから、行くことが出来ない。何うしたものだらうと思つて居ると、丁度其土耳其の國は、豆が大變能く出来る處で、豆の蔓の長いになつて來ると、なか／＼大したものがある。豆の大木があるから、これに傳つて行たらよからうと、それから豆を買つて來て、それを蒔いてごん／＼肥料を掛けた。さうすると、忽ちの中に其豆が、非常な大木になつて、ズン／＼／＼／＼伸び上り、遂に霞んで梢が見えなくなつた。モウ宜からうと思つたから、私が其豆の木





に傳はつて、エツチラオツチラ、漸々上へ昇つて行く  
こ、嬉しや月の世界へ來た。サア此處だと思つて、ヒ  
ヨイこ月の世界へ飛込んだ。が、サア分らない。月の世界  
こ云ふものは全然銀色だ。野も山も皆残らず銀。キラ〜  
光つて居る。其處へ銀の斧が落たんだから、何しても分  
らない。毎日々々諸方を探して居るこ、丁度宜い所へ抛  
り込んであつたもので、或百姓家の土藏の中に、麥藁が  
山の様に積んであつたが、斧は其窓から飛込んで、麥藁  
の中に落ちて居た。ヤレ嬉しやこ、其斧を持つて歸らうこ  
思ふこ、さつき豆の蔓の心を、うまく止めて置かなか



つたから、ズン〜伸びて行つてからに、今度は月の世  
界を通り越して、太陽の側まで行つて仕舞つた。ところが  
太陽は月とは違つて、カン〜遠慮無く照り付けるから、  
豆はこ〜枯れてしまつて、折角の大木が倒れて仕舞  
つたから、サア歸ることが出来ない。これにはごうも弱  
つてしまつた。いつそのここ飛下りやうかと思つたが、  
此處から地球まで飛下りては大變だ。何うしたものかこ  
思つて居るこ、良い智恵が出て來た。其土藏の中の麥藁  
を取つて、随分骨が折たが、麥藁を綯つては繩をこしら  
へ、綯ては繩を拵へして、トウ〜非常に長い繩を造つ